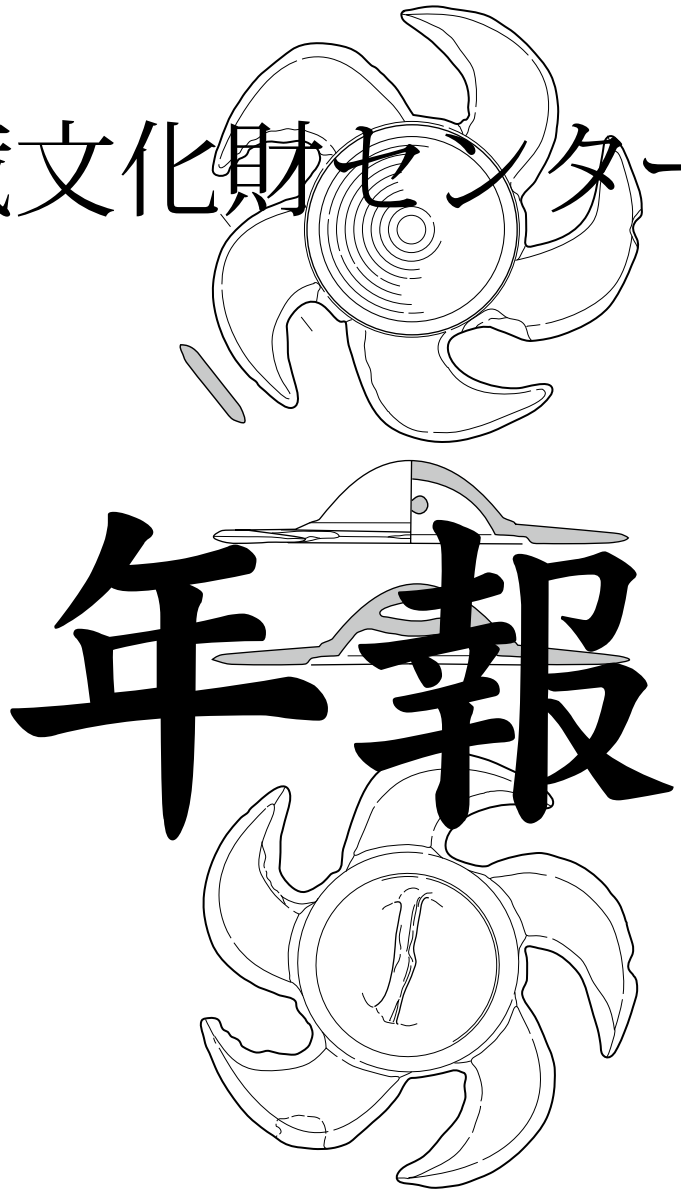
ISSN 0913-042X

平成 14 年度

愛知県埋蔵文化財センター



2003

（財）愛知県教育サービスセンター

平成 14 年度

愛知県埋蔵文化財センター

年報

2003

（財）愛知県教育サービスセン
ター

目　　次

I. 平成 14 年度事業概要 …… 1

調査の理由と工程 …… 2

平成 14 年度　調査遺跡位置図 …… 4

II. 遺跡調査の概要 …… 7

名古屋市　名古屋城三の丸遺跡 …… 8

一宮市　伝法寺野田遺跡 …… 16

瀬戸市　上品野蟹川遺跡 …… 18

長谷口遺跡 …… 20

八王子遺跡 …… 23

惣作鐘場遺跡 …… 24

凧山Ｃ窯跡 …… 30

吉野遺跡 …… 34

清洲町ほか　朝日遺跡 …… 38

日進市　三ヶ所遺跡 …… 48

安城市　上橋下遺跡 …… 50

豊田市　荒山古墳群 …… 52

III. 埋蔵文化財講演会の記録 …… 57

IV. 発掘調査技術等研修会の記録 …… 67

V. 埋蔵文化財センターの活動 …… 93

埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会 …… 94

現地説明会等 …… 95

資料の貸出・提供 …… 96

研究会 …… 98

報告書作成のための遺物等の指導・発掘調査現場における遺構・遺物等の指導 …… 99

ホームページ …… 100

平成 14 年度愛知県埋蔵文化財センター組織一覧 …… 101

I. 平成 14 年度事業概要

調査の理由と工程

1.発掘調査

調査委託者		事　業　名	遺跡名	面積(平米)	調査時期	調査担当者
国土交通省	愛知国道工事事務所	東海環状自動車道建設	長谷口遺跡	1,325	02.7-02.09	藤岡、宇佐見、永井（宏）
			惣作・鐘場遺跡	2,125	02.10-02.12	藤岡、酒井、成瀬
			凧山Ｃ窯跡	700	02.04-02.07	藤岡、宇佐見、永井（宏）
			八王子遺跡	100	02.08-02.09	藤岡、宇佐見、永井（宏）
国立名古屋病院		看護婦養成所大型化整備	名古屋城三の丸遺跡	1,100	02.04-02.09	石黒、鈴木、鵜飼
日本道路公団	東名古屋工事	近畿自動車道清洲ＪＣＴ建設	朝日遺跡	1,362	02.04-02.12	赤塚、樋上、蔭山、鈴木
	豊田工事	第二東海自動車道建設	荒山古墳群	1,200	02.04-02.07	宮腰、小嶋
名古屋高速道路公社		県道高速清洲一宮線建設	朝日遺跡	2,515	02.04-03.03	赤塚、樋上、蔭山、鈴木
県建設部	下水道課	五条川右岸流域下水道整備	伝法寺野田遺跡	1,540	02.04-02.07	石黒、川添
	道路建設課	国道363号道路建設	上品野蟹川遺跡	1,809	02.08、03.01-03.03	藤岡、酒井
		瀬戸設楽線建設	惣作・鐘場遺跡	3,340	02.04-02.10	藤岡、酒井、成瀬
		国道248号建設	吉野遺跡	2,300	02.10-03.02	藤岡、永井（宏）、鵜飼
		岩崎名古屋線建設	三ケ所遺跡	370	03.02	藤岡、永井（宏）、鵜飼
	河川課	鹿乗川改修	上橋下遺跡	600	03.01-03.03	宮腰、成瀬
		事業	14遺跡	19,210		

2　整理・報告書編集

	調査委託者		調査の理由	遺跡名	調査面積（平米）	調査年度
整理	国土交通省	愛知国道工事	東海環状自動車道建設	鷲窯跡	1,600	平成10・11・13年度
	日本道路公団		第二東海自動車道建設	水入遺跡	67,850	平成10・11年度
	県建設部	道路建設課	岩崎名古屋線建設	金萩遺跡	2,500	平成12年度
	名古屋高速道路公社		県道高速清洲一宮線清洲JCT建設	朝日遺跡	4,400	平成10年度～
整理・報告	国土交通省	愛知国道工事	東海環状自動車道建設	巡間Ｅ窯跡	※100	平成11年度
					1,400	平成13年度
				八王子遺跡	5,700	平成10～14年度
		名四国道工事	東海環状自動車道建設	御船城跡	※200	平成9年度
					3,570	平成13年度
				矢並下本城跡	※200	平成12年度
					4,500	平成13年度
		豊橋工事	矢作川河川改修	木戸城遺跡	※500	平成11年度
					1,400	平成12年度
				古新田遺跡	※500	平成11年度
					4,100	平成12年度
		中部地方整備局	名古屋地方裁判所執行部・名古屋簡易裁判所交通部庁舎建設	名古屋城三の丸遺跡	1,000	平成13年度
	日本道路公団		第二東海自動車道建設	本川遺跡	15,500	平成10年度
			名神一宮下り線ＰＫ建設	猫島遺跡	33,000	平成11・12年度
	県建設部	道路建設課	大塚国府線建設	石堂野Ｂ遺跡	※400	平成11・12年度
					6,200	平成12年度
			瀬戸設楽線建設	凧山屋敷遺跡	※100	平成13年度
					1,600	平成13年度
			国道155号建設	烏帽子遺跡	2,500	平成12年度
		道路維持課	自転車歩行者道設置工事	東端城跡	800	平成13年度
		下水道課	五条川右岸流域下水道整備	権現山遺跡	※450	平成8・9年度
					4,900	平成8・9・11･13年度
				計	18遺跡	※は範囲確認調査

3　平成14年度刊行物

埋蔵文化財調査報告書（計９冊）

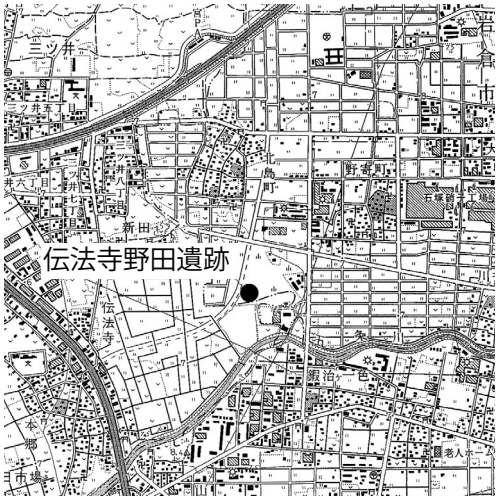
第 98集　　郷上遺跡
第 99集　　清洲城下町遺跡Ⅷ
第101集　　平手町遺跡
第102集　　矢迫遺跡
第103集　　川田遺跡
第104集　　寄元古墳群・上ノ段遺跡
第105集　　今町遺跡
第113集　　東端城跡・御船城跡・矢並下本城跡
第115集　　名古屋城三の丸遺跡Ⅵ

平成14年度　愛知県埋蔵文化財センター　年報

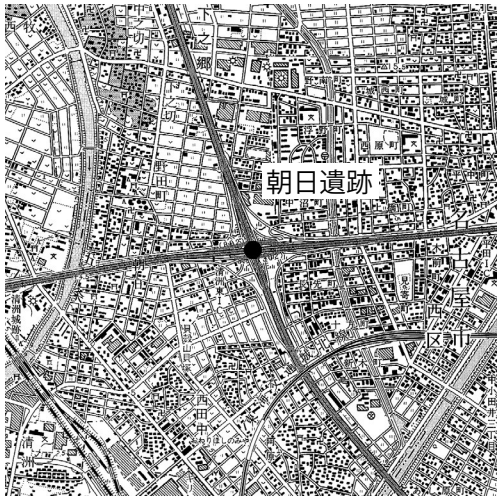
研究紀要　第4号

まいぶん愛知　no.69 ～ 72

平成14年度　調査遺跡位置図



国土地理院1/2.5万地図「一宮」



国土地理院1/2.5万地図「清洲」



国土地理院1/2.5万地図「名古屋北部」



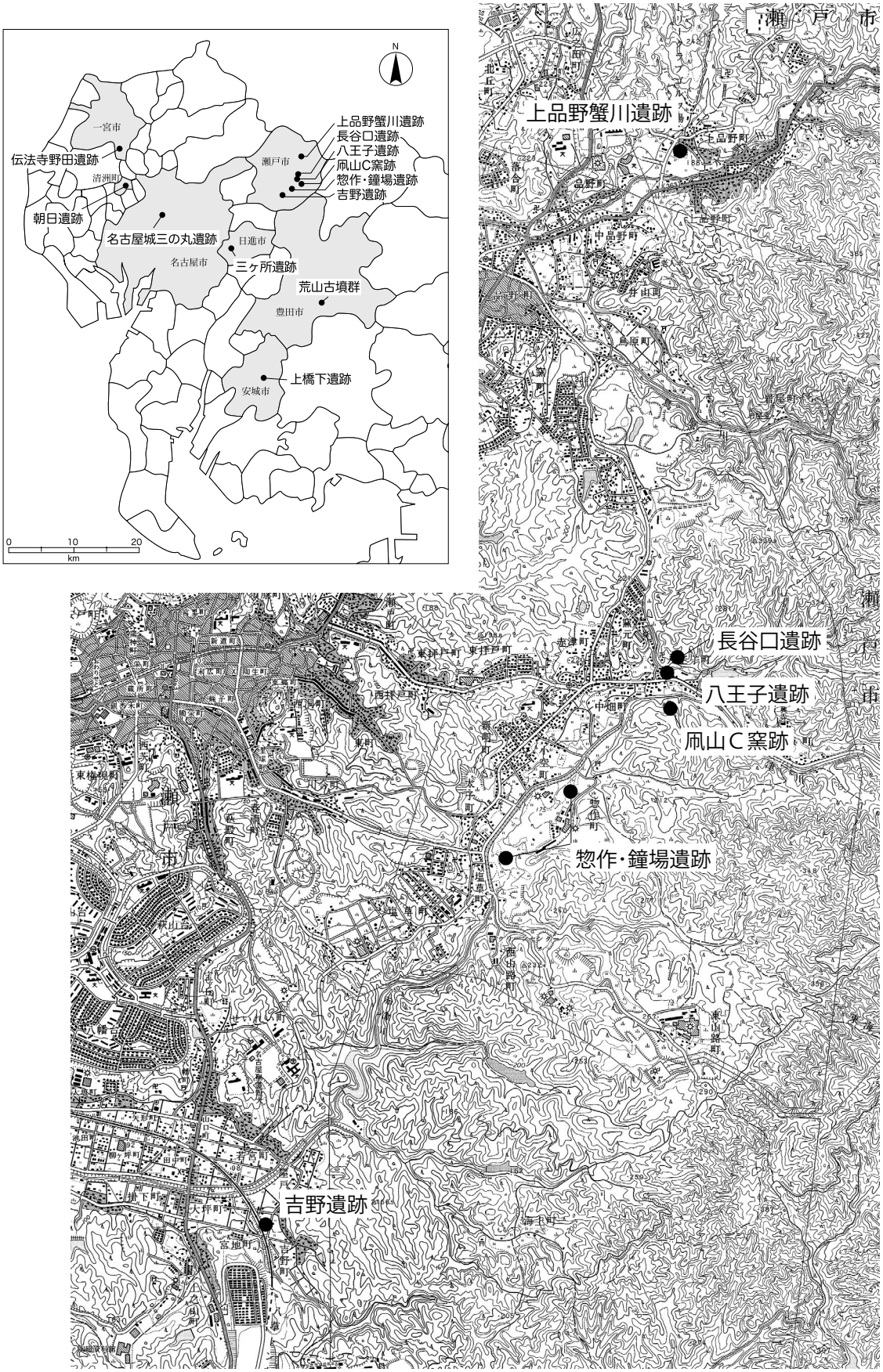
国土地理院1/2.5万地図「平針」



国土地理院1/2.5万地図「安城」



国土地理院1/2.5万地図「豊田南部」



国土地理院1/2.5万地図「高蔵寺・多治見・瀬戸・猿投山」

II. 遺跡調査の概要

なごやじょうさんのまる 名古屋城三の丸遺跡

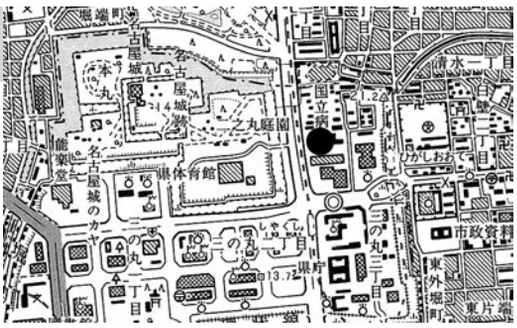
所 在 地　名古屋市中区三の丸４－１

調査理由　国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備

調査期間　平成 14 年 4 月～ 9 月

調査面積　1,100 ㎡

担 当 者　石黒立人・鈴木正貴・鵜飼雅弘

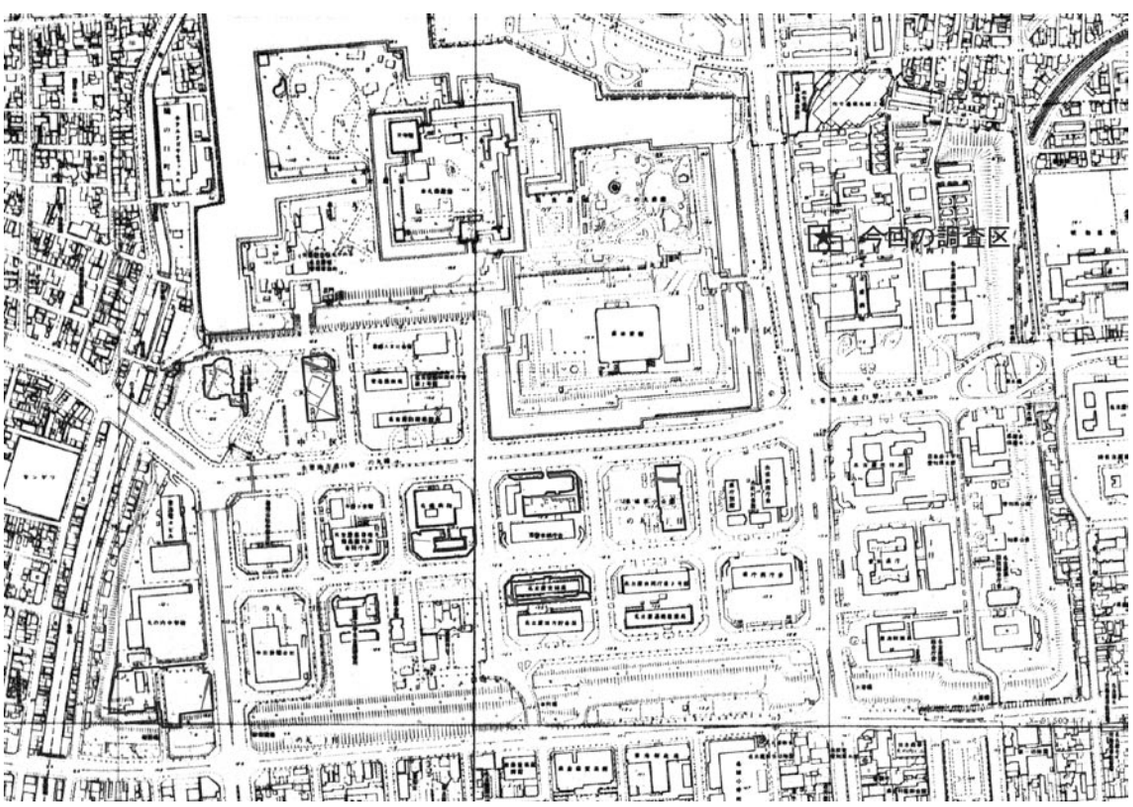


調査地点（1/2.5 万「名古屋北部」）

調査の経過　本遺跡は国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備のための事前調査として、国立名古屋病院から愛知県教育委員会を通じて受けた委託事業として、平成 14 年 4 月から 9 月にかけて実施した。調査面積は 1100 ㎡である。

立地と環境　名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の北西端に立地する名古屋城のうち、本丸・二の丸の南および東に配置された名古屋城三の丸一帯に広がる弥生時代、古代、中世から近世にかけての複合遺跡である。調査地点の現地表面の標高は約 13 ｍを測る。

今回の調査は二の丸の東側、現国立名古屋病院の敷地内で行った。この一帯は名古屋城築城当初武家屋敷が広がっていたが、1651（慶安４）年京都から広幡忠幸を迎える際ここを屋敷地として与え、その後３代藩主徳川綱誠が藩主就任まで過ごしたことから御屋形の称が始まり、以来幕末に至るまで藩主の一族・元藩主の側室が住んだ。廃藩置県後御屋形は取り壊され、跡地は陸軍第三師団東練兵場となったが、太平洋戦争末期名古屋陸軍病院東練兵場臨時分院が設置され、戦後国立名古屋病院に改組され現在に至る。（鵜飼雅弘）



調査の概要　今回の調査では、古墳時代から昭和時代前半に至るまでの様々な時期の遺構や遺物が確認された。検出された遺構は大きく、A 期:古墳時代後期～平安時代（6 世紀末～ 9 世紀)、B 期：鎌倉時代～室町時代（12 世紀～ 14 世紀)、C 期：戦国時代（15 世紀～ 16 世紀)、D 期：江戸時代初期（1610 年～ 1650 年頃)、E 期：江戸時代前期～江戸時代末期（1650 年頃～ 19 世紀中頃)、F 期：明治時代～昭和時代前半（1873 年～ 1945 年）の 6 時期に大別することができる。ここでは時代順に記述を進める。

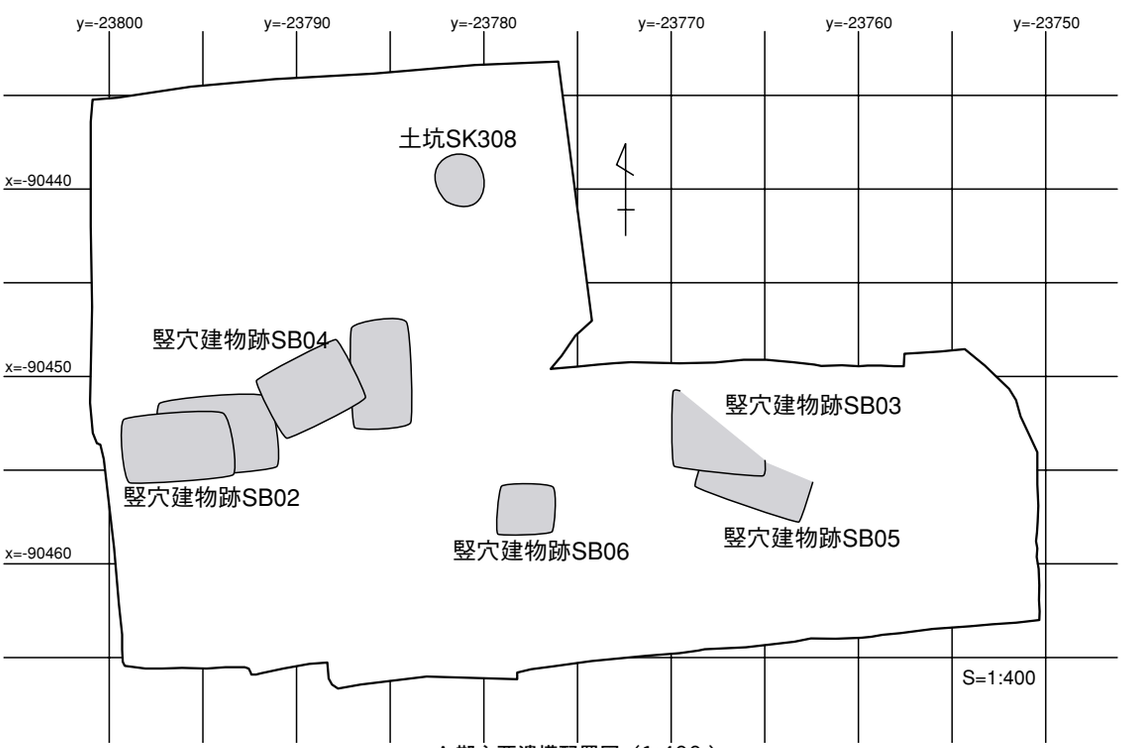
A　　期　古墳時代から古代の遺構としては、古墳時代後期の土坑 SK308 と奈良時代から平安時代初頭に位置付けられる竪穴建物跡群などが確認された。

SK308 は直径約 2m を擂鉢状の形で、中から 6 世紀末～ 7 世紀初頭の須恵器の杯身や杯蓋や甑などが出土した。この他に遺構には伴わないが、須恵器の円筒埴輪片が数点出土しており、付近に古墳が存在していたことが予想される。

一方、竪穴建物跡はその可能性があるものまで含めると 8 基が検出された。SB02 は平面形が約 6m ×約 4m の規模を持つ隅丸長方形であり、床面には貼床の痕跡が確認された。竪穴建物跡はいずれもカマドを確認することができなかった。これらの竪穴建物跡群は出土遺物から見て 8 世紀から 9 世紀にかけて存在したものと推測される。

B　　期　鎌倉時代から室町時代の遺構には区画溝と井戸などが存在する。SD27 はほぼ東西方向に走る比較的小規模な溝である。SD27 以外に確実にこの時期と考えられる溝が確認されていないため、区画の規模などを特定することができないが、井戸 SK310 の存在などからみて、SD27 は居住域（屋敷）を区画したものと想定される。SK310 は掘肩の平面形が大きい素掘りの井戸で、中から 13 世紀後半から 14 世紀前半に位置付けられる山茶碗などが出土した。

この時期に属する遺物の出土量はそれほど多くなく、調査区付近は比較的小規模な集落が展開したものと想定される。



A 期主要遺構配置図（1:400 ）

C　　期（戦国時代）

戦国時代の遺構としては、区画溝や井戸などが発見された。SD17 は幅が約 1m 、深さが約 1m の規模を持つほぼ東西方向に走る溝で、西端で南に屈曲している。この他に調査区中央部で SD35・SD36・SD39 などの小規模な溝が南北方向に平行して走っており、これらの溝で挟まれた細長い空間が道路であった可能性が考えられる。井戸は調査区の東側で SK147 や SK146 などが確認された。これらは素掘り井戸で中から 15 世紀後半から 16 世紀前半に位置付けられる瀬戸美濃窯産陶器や大量の土師器内耳鍋などが出土している。

発見された溝や道路は屋敷境を構成すると考えられ、SD17 の南北に 2 つの屋敷を想定することができる。これらの屋敷は出土遺物の時期からみて、戦国時代の那古野城に伴うものと考えられる。

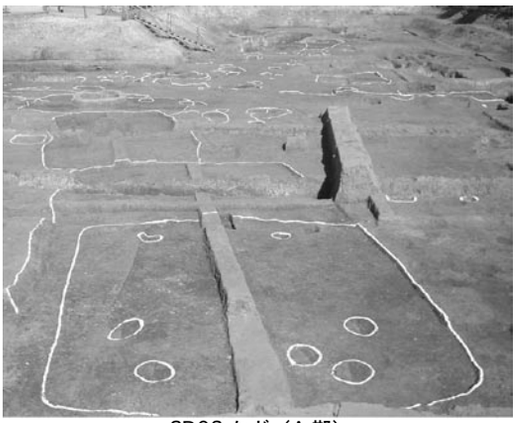
D　　期

17 世紀前半に所属する遺構としては、屋敷や屋敷の内部を区画する溝、掘立柱建物跡、井戸、土坑などの遺構が確認された。SD12・SD14・SD22 は幅が約 1m 、深さが約 1m を測る屋敷を囲む溝と想定され、SD12 と SD14 の間に挟まれた細長い空間が道路であったと考えられる。また、SD24 は中に柱穴が等間隔に並ぶ布堀状の溝で、塀などの基礎構造であったと思われる。この SD24 は SD12 などによる屋敷割りを変更して作られた可能性が想定され、門と推定される掘立柱建物跡が付随している。この他には、掘肩の平面形が比較的小さい素掘り井戸（SK144 や SK163 など）や、約 2.5m ×約 6m の隅丸長方形の平面形で深さが 2m 弱を測る大きな土坑 SK185 などが存在する。出土遺物には、瀬戸美濃窯産陶器の皿・笠原鉢・擂鉢や焼塩壺などがある。特筆すべきものとしては、区画溝 SD12 から調査区北側に屋敷を構えていたと推定される寺西藤左衛門の家紋鬼瓦が出土している。

出土遺物の時期や家紋瓦の存在などから、溝で区画された空間は御屋形が成立する以前の近世名古屋城の有力家臣たちが居住した武家屋敷であったと考えられよう。具体的な屋敷割の比定は今後の課題であるが、調査区は『金城温古録』に記載された石川光忠、粟生将監、一色竜雲等が屋敷を構えていた場所に相当すると想定される。



B 期・C 期主要遺構配置図（1:400 ）



SD02 など（A 期）



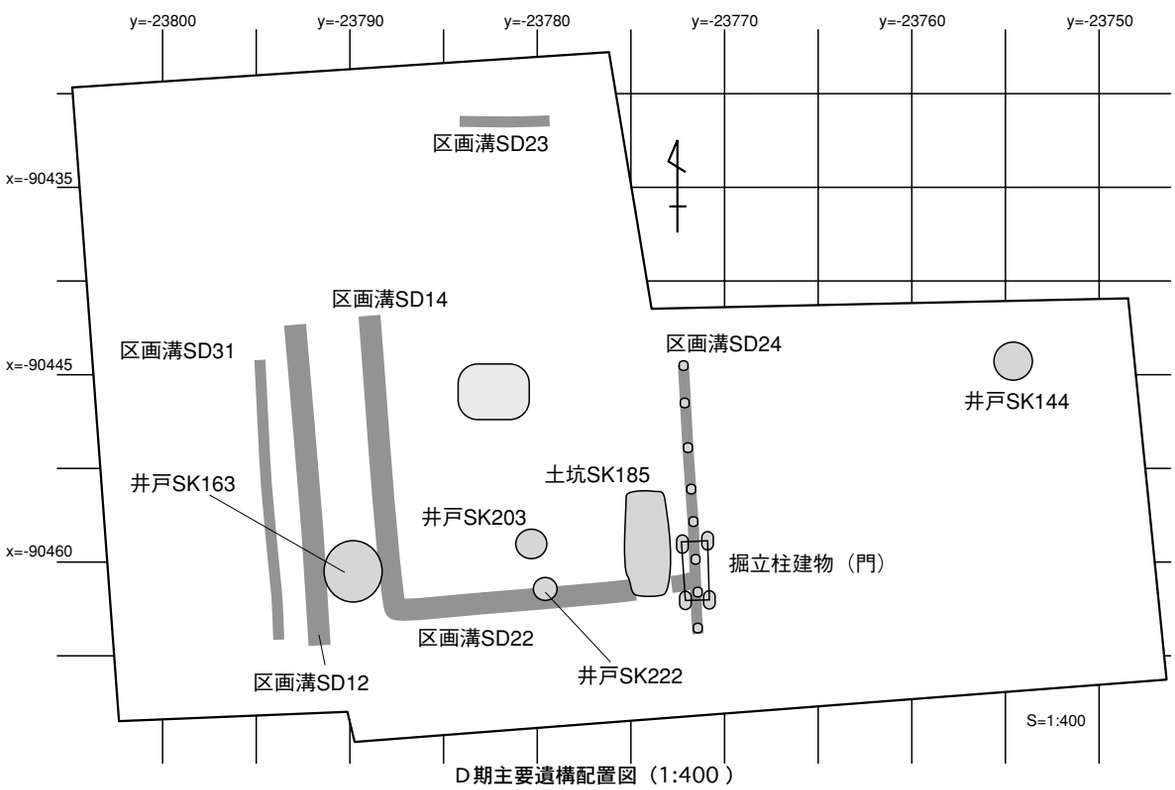
SD17 など（B～D期）



SD24・SK185（D 期）



SD31・SD12・SK163（D 期）



D期主要遺構配置図（1:400 ）

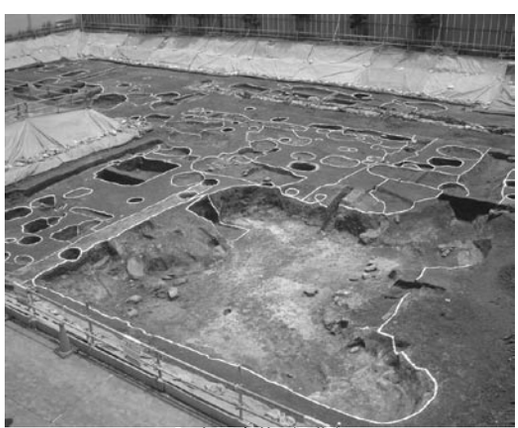
E　期（江戸時代前期～後期）

この時期では、まず調査区南西部を中心に広い範囲で厚さが 1m 弱を測る盛土が確認されており、D期（江戸時代初期）の遺構を埋め立てて造成され、大きく屋敷割りが変更されたことが判明している。この盛土（整地）層の上面から掘削されたと考えられる遺構として、庭園に伴う池、石組溝、地下室、石列、掘立柱建物跡、井戸、廃棄土坑など多種多様な遺構が存在する。

石組溝は合計で 4 条（SD01 ～ SD04）確認され、このうち SD01 は内法幅が約 65cm を測る立派なものである。SD03 の北側は石材が抜き取られており、裏込めの栗石のみが残された状態であった。これらの石組溝は建物に伴う排水路などの施設と考えられる。SD01 の南側には切石で構成された石列 SX09 や礎石の根石と考えられる集石が検出されており、これらは建物の基礎構造の一部であった可能性が想定される。地下室 SK94 は平面形が2.8m×2.7mのほぼ正方形となり深さは約1.8mを測るもので、17 世紀末から 18 世紀前半にかけての肥前窯産磁器碗や瀬戸美濃窯産陶器汁次などの遺物が出土している。調査区の東側には非常に大型の廃棄土坑群 SK01 があり、中からは大量の瓦や石材が出土した。この SK01 最下層からは鉋屑や端切れ材などの木材の廃材も多量に出土しており、これらの出土遺物からみて SK01 は建物の増改築などの際に出てきた廃棄物を埋めて処分した際に構築されたものと推測される。調査区東端部と北東端部では各々掘立柱建物跡の一部が確認されており、この他に屋敷内を区画する溝や小型の廃棄土坑などの遺構も認められた。

出土遺物としては、肥前・京都・瀬戸美濃窯産陶磁器などが認められるが、これまでの名古屋城三の丸遺跡の調査事例と比較すると陶磁器類の出土量がやや少ない点が特徴となっている。また、池などの遺構から出土した瓦の中には、御霊廟など特別な場所で出土する場合が多いとされる緑釉の陶器瓦が少なからず出土している。

石組溝や後述する庭園に伴う池、緑釉瓦の存在や出土遺物の時期などからみて、E 期の遺構や遺物は名古屋城を描いた各種絵図や記録にみえる「御屋形」に伴うものであると推測される。



調査区全体（E 期）



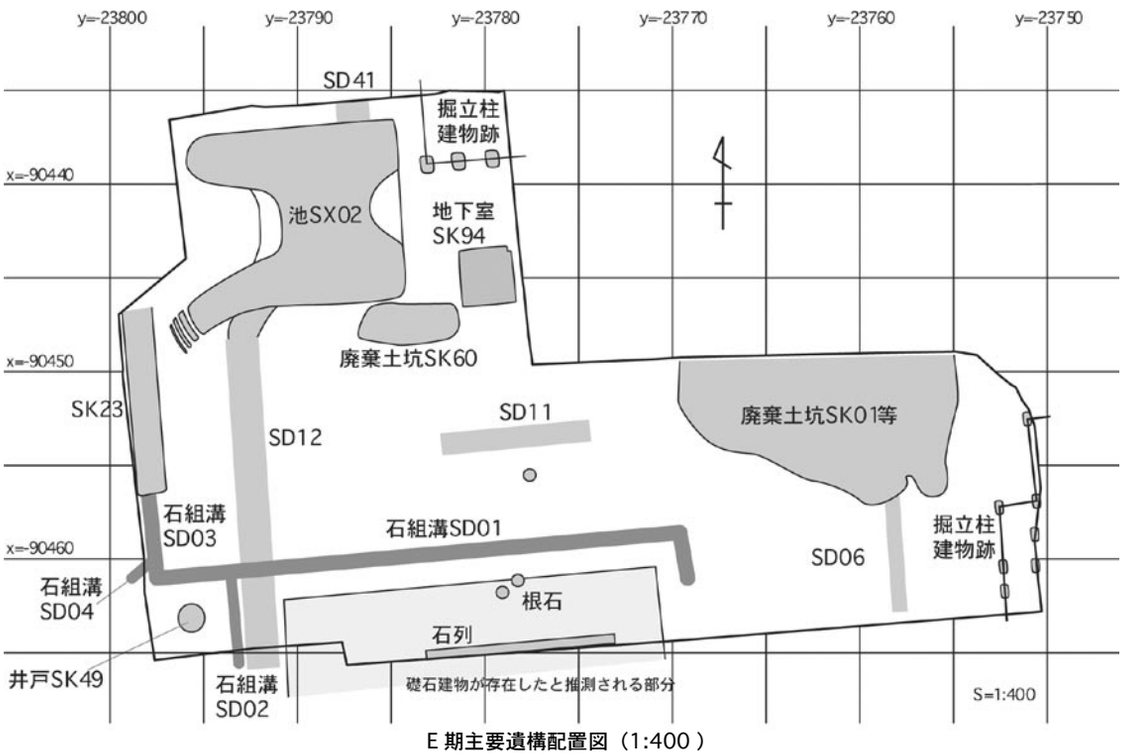
石組溝（E 期）

庭園に伴う池

E 期に属する遺構で最も注目される遺構は池 SX02 である。SX02 は約 10m 四方の大きさで深さは約 1.2m を測り、東西両側には内側に張り出し部（岬）を持つものである。池の周囲の壁は大きな穴が開いた部分や漆喰の壁が残った部分などがあり、本来は巨石を池の周りに配置しその隙間を漆喰壁で覆い尽くしたものと考えられる。北壁が直線的に作られていることや石の配置などから考えると、池は北側から観賞するように造られていると思われる。おそらく、池の北側に書院などの建物が存在し、そこから庭園の風景を楽しんだものと想像される。

池 SX02 の具体的な構造は次のとおりである。水の取り入れ口は南西部分の漆喰で造られたスロープが該当するが、排水口は北東部にある幅広いやや浅い溝 SD41 が存在する他は確認できなかった。池の西側の張り出し部（岬）の先端には巨石が何個かはめ込まれていたと復元され、この部分が磯浜を表現していると考えられる。一方、反対側の東側の張り出し部（岬）の上部には白い小玉石が敷かれており、この部分が洲浜を表現していると思われる。東側の張り出し部の北側には階段状遺構が設置されていた。池の底は、古い段階では溝状の凹地が設けられ、新しい段階では黄色粘土を貼り付けた上に玉石が敷かれていた。このような状態からみて池全体の構成は、南西部の上流から磯浜や洲浜を経て北東部に水が流れていくという形に復元されよう。

今回確認された石による装飾が施された池は庭園に伴うものと考えられ、名古屋城二の丸庭園などで類例が認められる。しかし、名古屋城三の丸にある他の家臣の武家屋敷ではこれまでの発掘調査で庭園遺構は見つかっておらず、今回初めてこうした庭園遺構が発見されたことは、御屋形が特別な存在であったことを示す貴重な事例となるだろう。そして、名古屋城二の丸庭園は大規模な回遊式庭園であるが、今回確認された「御屋形庭園」は池の規模などから見て、書院などから眺める池泉庭園と位置付けられよう。



E 期主要遺構配置図（1:400 ）



SX02 水の取り入れ口



SX02 南壁（正面）



SX02 東張り出し部（洲浜）



SX02 西張り出し部（磯浜）



池 SX02 全体

F　　期　1873 年に陸軍第三師団が名古屋に駐屯した際に、今回の調査地点は東練兵場になっていた。調査の結果、現地表下約 1.2m 前後で東練兵場の地面と考えられる硬化面とその上に造られた礎石建物跡 SB01 が発見された。SB01 は 7.1m（8 間）× 25.3m 以上（28 間以上）の規模を持つと復元され、礎石の状態が脆弱であることなどからみて大平洋戦争の終戦直前に建てられた名古屋陸軍病院第二分院の病棟と推定される。また、この時期の遺物として「名古屋陸軍病院」と記された瀬戸窯産磁器湯呑などが出土している。

ま と め　今回の調査の結果、これまで調査事例がほとんどなかった名古屋城三の丸遺跡の北東部の様相が明らかとなり、多様な時期にわたる多くの成果が得られた。最後に箇条書きでその成果をまとめておく。

1、古墳時代から古代そして中世にかけて、名古屋台地北端の縁辺部に遺跡が展開することが明確となった。

2、戦国時代の那古野城の中心は現在の二の丸にあったと言われているが、今回初めて二の丸の東側地域にも那古野城に関連する屋敷が広がっていたことが想定された。検出された溝は松田訓が設定した正方位溝群（松田 2002）に属するものと考えられ、時期的には古瀬戸後期末段階まで遡る可能性が高い。那古野城の変遷を考察する上で貴重な情報が得られたといえる。

3、江戸時代初期の武家屋敷が確認され、これらは 17 世紀中頃に廃絶されその後大規模な整地を伴って御屋形が造成されたことが判明した。また、17 世紀前半の中でも屋敷割の変更があったことが考えられ、近世名古屋城三の丸の武家屋敷の成立過程を考えるためのデータが追加された。

4、御屋形の時代では、庭園に伴う池や石組溝などこれまでの名古屋城三の丸の武家屋敷とは異なる遺構群が発見された。遺物においても緑釉陶器瓦の存在など御屋形の特異性を表現する状況を読み取ることができたが、今後は御屋形と三の丸の武家屋敷との間で遺構や遺物の様相が具体的にどう相違しているのかをより詳細に検討していく必要があるだろう。　（鈴木正貴）

文　　献
松田訓 2002「遺構からみた那古野城の残影」『研究紀要第３号』愛知県埋蔵文化財センター


SB01（F 期）


SK94 出土遺物（E 期）

伝法寺野田遺跡（でんぽうじのだ）

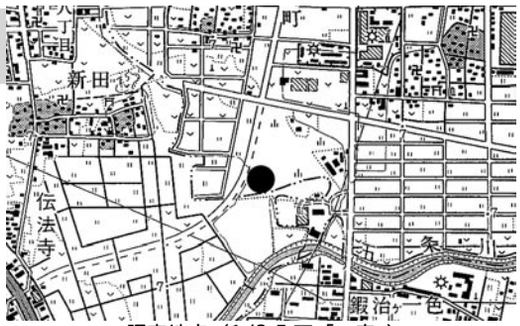
所 在 地　一宮市丹陽町伝法寺地内

調査理由　五条川右岸流域下水道整備

調査期間　平成 14 年 4 月～ 7 月

調査面積　1,540 ㎡

担 当 者　石黒立人・川添和暁



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

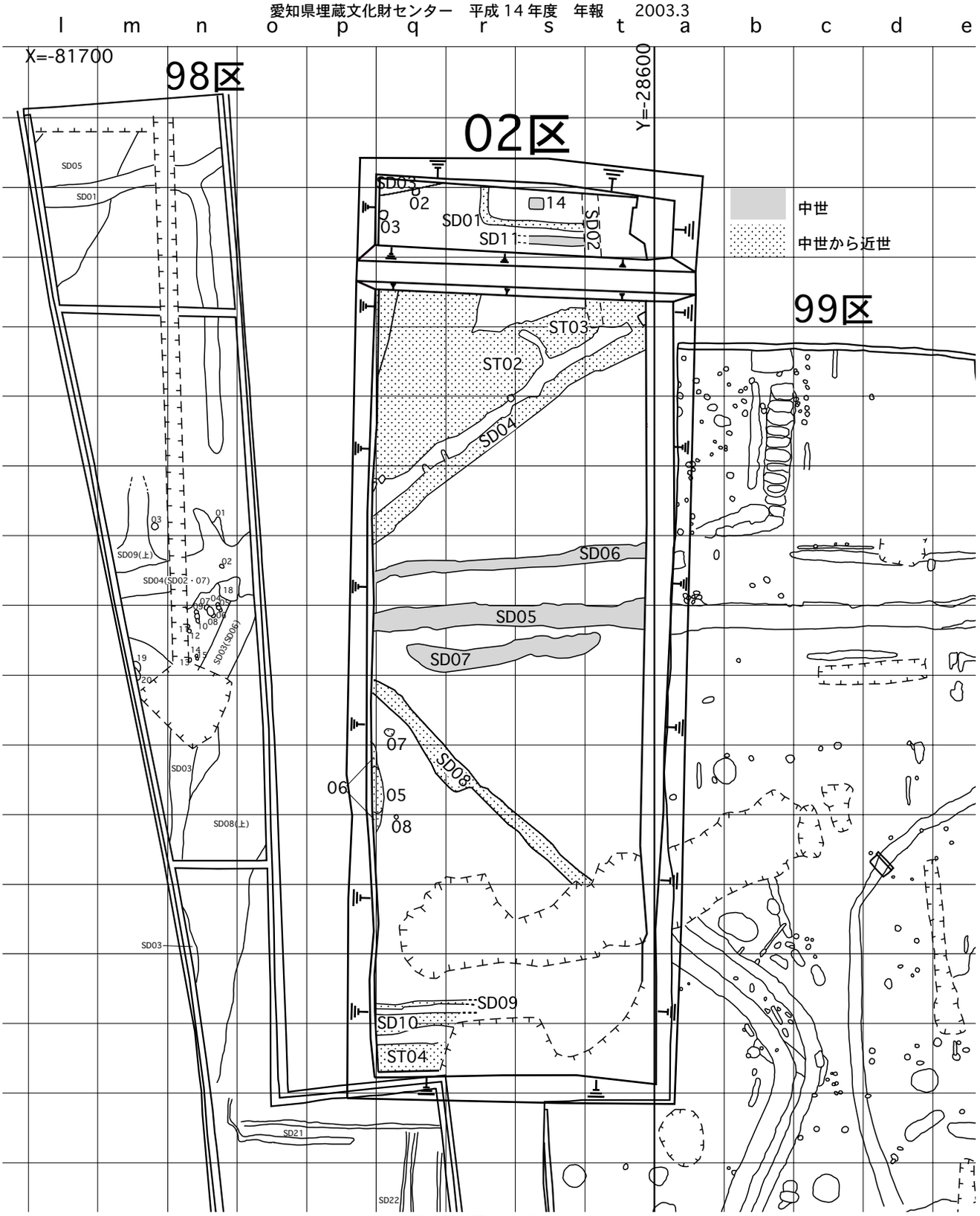
調査の経過　本遺跡は、西から南へと流れが大きく蛇行する、五条川右岸の自然堤防上に立地する。一宮市と岩倉市との境にある本遺跡周辺には、近接する権現山遺跡をはじめ、元屋敷遺跡・北島白山遺跡・大地遺跡などが所在し、縄文時代後期以降の各時代の遺跡が展開する地点として注目されている。

調査は、五条川右岸流域下水道整備に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。過去 98・99 年度にも調査が行われており、弥生時代から古墳時代、古代・中世にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。98 年度には、弥生時代中期中葉と考えられる水田跡が検出され、大畦畔の脇から無茎銅鏃が出土している。99 年度には、同時期とされる溝や竪穴状遺構の検出が報告されている。今年度は 98・99 両年度調査区に挟まれた部分が、調査対象区となった。


調査区全景（北より）

調査の概要　検出された遺構には、中世以降の溝数条、中世の方形土坑、近世の畦畔・溝などがあり、方形土坑を除いては、水田耕作に関わる遺構と考えられる。溝および畦畔の軸線が真北に対して 45 度に振るものと直交するものの二者が見られ、時期の違いが想定される。

調査区南端では、灰黄色シルト層・黒褐色粘土層 (98 度調査の VII 層か) の堆積が見られた。灰黄色シルト層はマンガン斑が多く見られたことから水田耕作に伴う堆積土であった可能性が考えられるものの、水田跡の検出までには至らなかった。この層からは、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が出土している。黒褐色粘土層は出土遺物は微少であり、形成時期などは不明である。旧地形は北に向かって高くなっているものの、近世の畦畔脇や畑と考えられる高まりなどには黒褐色粘土層の部分的な残存が見られた。元来調査区全体に黒褐色粘土層が堆積していていたものが、後世の耕作により削平されたものと考えられる。



遺構配置図（1:400 ）

ま と め　調査の結果から、当地は弥生時代以降、耕作が継続して行われていた場所であると考えられる。灰黄色シルト層での水田跡の未検出は悔やまれるところだが、今回の調査において弥生時代中期中葉に比定できる遺物が見られないことは、過去の調査成果を考える上で参考となるであろう。　（川添和暁）

かみしなのかにかわ
上品野蟹川遺跡

所 在 地　瀬戸市上品野町地内

調査理由　国道 363 号道路建設

調査期間　平成 14 年 8 月、平成 15 年 1 月～ 3 月

調査面積　1,809 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・酒井俊彦



調査地点（1/2.5 万「多治見」）

調査の経過　調査は , 国道 363 号道路建設に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。これまでに（財）瀬戸市埋蔵文化財センターが平成 7 年度と同 11 年年度に調査を行い、本センターは、平成 11 ～ 13 年度に遺跡範囲の西部において計 8550 ㎡の調査を実施した。今年度は、遺跡範囲西部において昨年度の調査区の南側に A 区、遺跡範囲東端より B・C 区を設定して調査を行った。昨年度までの調査によって主な遺構として平安時代の竪穴住居址 1 棟と同時期の土坑および自然河道などが検出され、遺物としては旧石器時代から戦国時代の遺物が出土した。

立地と環境　遺跡は瀬戸市北東部の山地間にある谷地形の低地部に立地し、谷地形内に流れる蟹川の両岸に遺跡範囲が広がる。標高は、約 180m を測る。調査範囲の大部分は近年まで水田であり、今年度調査区の一部は農業用の溜池であった。遺跡東側の山地上には中世城館の桑下城跡が、南方 0.5km には本センターが調査した旧石器時代から近世かけての複合遺跡である上品野遺跡が所在する。

調査は、昨年度の調査区 01A 区と 01B 区の南に接する部分に A 区 (200 ㎡) 、遺跡範囲東端より西へ連続して B 区と C 区 (計 1609 ㎡) を設定して実施した。

調査の概要　A 区は、蟹川右岸の谷地形の中央部に位置する。基本層序は現水田耕作土下の黒色土の包含層を挟んで、基盤である河川性の堆積物の砂礫層となる。耕作土下部の包含層中より少量の中世の灰釉系陶器 (山茶椀) が検出された。

B・C 区は、蟹川左岸の山地斜面から谷地形の低地部分に位置する。基盤は山地斜は粘土層を基本とする洪積層であり、低地部分は扇状地の砂礫層である。低地部分は近世以降の耕作土下に戦国時代までの湿地性の堆積土層が存在し、一部土石流による礫層および河川性の砂層を挟んで扇状地の砂礫層に達する。遺物としては山地斜面上の包含層中より、中世の灰釉系陶器 (山茶椀) 、中世末の瀬戸窯産施釉陶器類と常滑窯産陶器が少量検出された。湿地性の堆積層からは 8 世紀代の須恵器杯身・蓋、13 世紀代の灰釉系陶器 (山茶椀) 、中世末の瀬戸窯産施釉陶器類及び土師器鍋が少量出土した。B 区の山地斜面に接する部分の湿地性の堆積層からは伐採された自然木、板材、小形の曲物などが出土し、若干の杭が打ち込まれた状態で検出された。また、これらに混じって拳大よりやや大きめの礫が集中して出土した。遺物は摩耗しておらず、調査区に接する山地の尾根上にこの時期の集落が存在することが考えられる。また、加工された木材が出土していることからこれに関連する作業場の存在も想定することができる。今後は B・C 区の出土遺物と隣接する山地頂上の桑下城跡との関連が検討課題になるものと考えられる。（酒井俊彦）



02B 区全景（東より）



02B 区自然木切断面



02B 区遺物出土状況



02B 区出土墨書土器



02B 区遺物出土状況

長谷口（はせぐち）遺跡

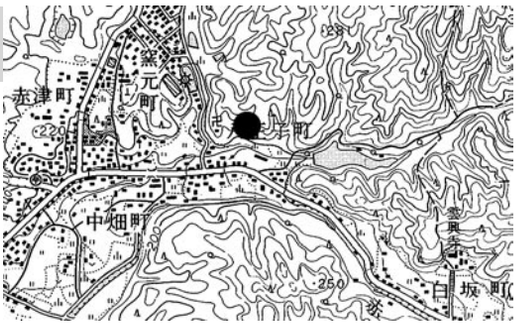
所 在 地　瀬戸市長谷口町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 14 年 7 月～ 9 月

調査面積　1,325 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・宇佐見守・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　調査は東海環状自動車道建設の事前調査として、国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成 12 年度に東地区（00 A・B区）を 1,200 ㎡実施し、今年度は西地区を 1,325 ㎡実施した。

立地と環境　長谷口遺跡は瀬戸市の東南部、矢田川の支流である赤津川流域に広がる赤津盆地を囲む東側の丘陵、赤津川に流れ込む木下川右岸の段丘上、標高 195 ～ 200 mに立地する。隣接する遺跡としては、今回の調査で確認された江戸末期から明治初期の屋敷地と関連性が指摘できる長谷口Ｂ窯跡が丘陵斜面にある。また、木下川を挟んで左岸には縄文時代早期後半と中世を中心とする八王子遺跡がある。

調査の概要　現況は４つの平坦地が段状を成し、00 A区（木下川沿いの低位面）が概ね下段から中段、00 Ｂ区（丘陵側の高位面）が上段に相当し、さらに一段高い平坦地が今年度認められた。したがって、調査直前までの耕作によって土地の改変が想定され、遺構は削平されていると思われた。

上面の遺構　ところが、表土を除去した後、これら４つの段状地形は江戸末期から明治初期の屋敷地に関わることが判明した。特に最上段面、すなわち山側に位置する平坦面には、柱穴列や土坑など屋敷に関わる遺構群が展開し、上段面との境に溝が１条確認できた。調査区北西に隣接する長谷口Ｂ窯に関連する窯道具（匣鉢など）が出土した遺物に含まれることから、窯操業時に関わる施設であった可能性が高い。

上段面では中世後期を中心とする遺構群と平安時代の造り付けカマドをもつ竪穴住居２棟が検出された。平安時代の SB01 はプランの北西寄りと南東寄りの２ヶ所に集中して遺物が確認できた。

中～下段面は中世の遺構・遺物が散見するものの希薄で、00 A区の延長上に位置する木下川の河道の一部と考えられる礫群が認められる程度であった。

下面の遺構　今回の調査で注目される成果として、これら中世以降の遺構群より下位に、縄文時代早期後半と中期末、弥生時代中期後葉から後期前半の遺構群があげられる。

弥生時代の遺構としては、竪穴住居２棟と板状鉄斧の出土した土坑１基がある。これらはすべて重複する遺構群で、SB07（中期後葉）→ SK120 → SB03（後期前半）の順の切り合い関係が確認できた。問題は、SK120 に鉄斧以外に遺物が出土しなかった点である。鉄斧の形状などから弥生時代後期頃に比定できるが、希少な遺物だけにその年代観は今後の課題である。

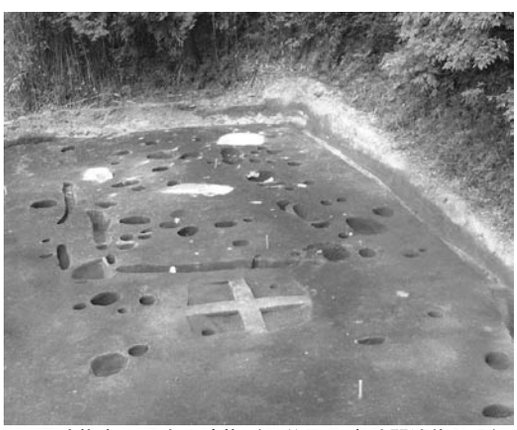
縄文時代中期末の遺構は竪穴住居２棟と土坑数基がある。このうち SB06 は住居にめぐる壁溝の形状から五角形のプランが想定できる。中央に円形の炉を有し、５本の主柱穴が配置さ

れている。また、住居が位置する上段面より一段上に相当する最上段に単独の埋甕 SK146 がある。正位に埋められ、底部を穿っている。

縄文時代早期後半の遺構は山に近い最上段面を中心に確認できた。遺構は最上段面の北西寄りが中世以降の削平で滅失している部分を除けば、ほとんど満遍なく認められた。ただし、住居に関連する柱穴などを特定するにはいたらず、人為的な掘削ではない窪地も含むと考えられるため、今後の検討を要する。00 B区で検出した集石炉 SX01 と同様の遺構 SK169 は 00 B区と同じ上段面に位置し、遺構が密集する最上段面からやや離れている。

ま と め　調査の成果としては、まず、縄文時代早期後半と中期末の遺構・遺物を確認したこと。そしてこれらが隣接する八王子遺跡の希薄となる時期を補うことから、２つの遺跡を通して早期後半から中期にいたる時期が通観できる好資料を得ることができた。さらに弥生時代の鉄斧は県下では希少な資料を得ることができた。最後に、長谷口Ｂ窯跡に関連する施設が確認できたことから、窯操業に関わるモデルの一例を得ることができた。

（永井宏幸）



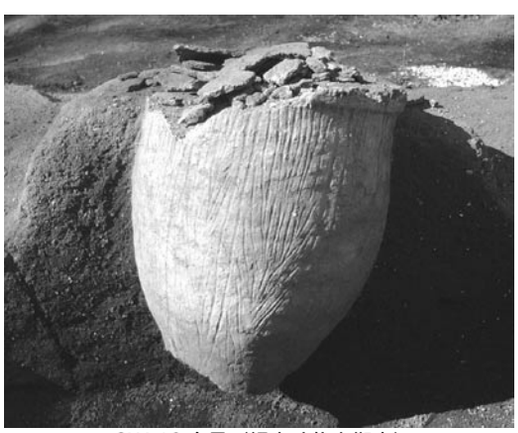
江戸時代末～明治の建物（長谷口 B 窯跡関連施設？）



SB06 全景（縄文時代中期末）

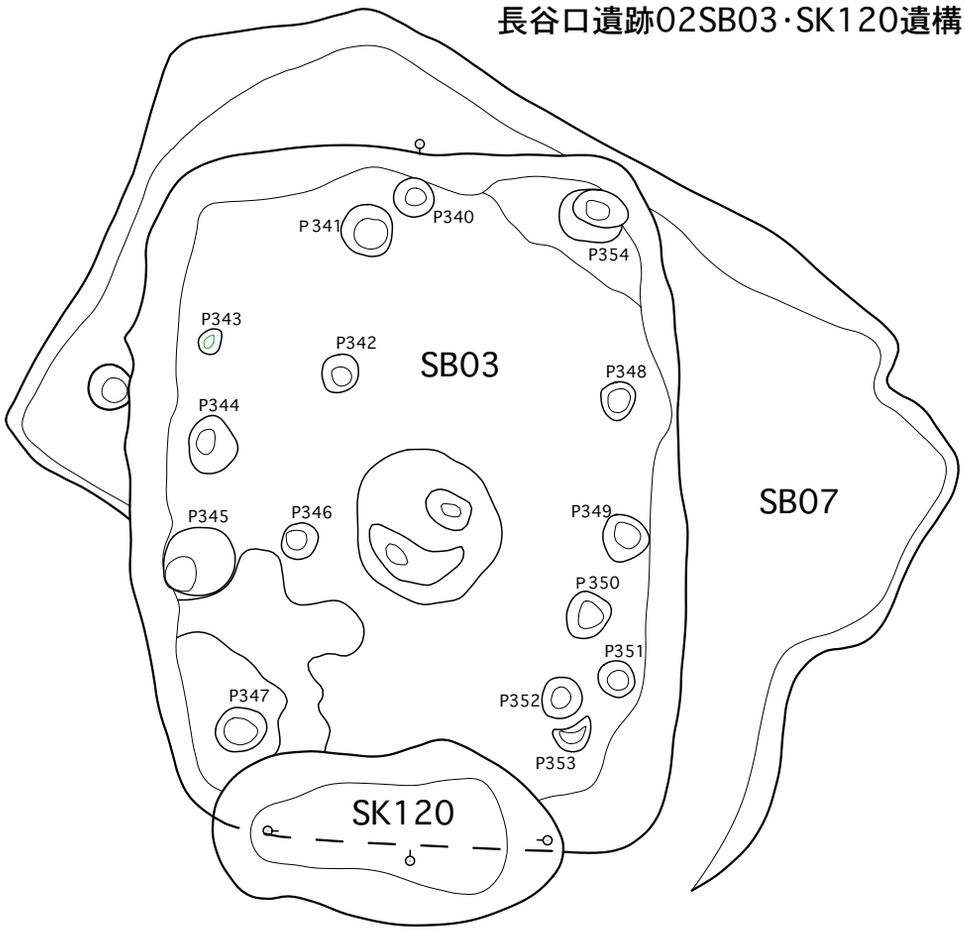


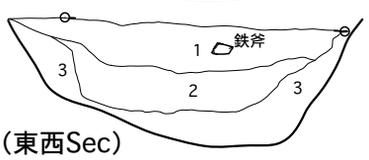
下面全景（縄文時代早期後半）



SK146 全景（縄文時代中期末）

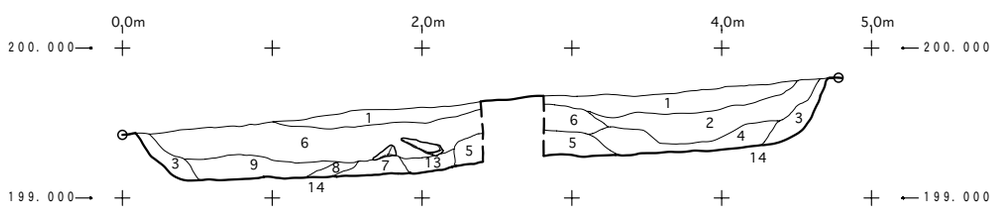
長谷口遺跡02SB03･SK120遺構図　S＝1





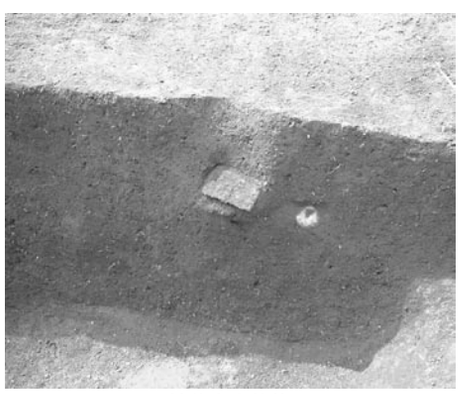
SK120　断面図（東西Sec）

層位番号	土色記号	土色	備考
1	5YR4/2	灰褐色土	2～4mm大の砂礫混じる
2	2.5YR3/1	暗赤灰色土	〃
3	10YR7/6	明黄褐色砂質土	〃



SB03　断面図（南北Sec）

層位番号	土色記号	土色	備考
1	5YR3/2	暗赤褐色土	5YR4/2灰褐色土、2～4mm大の砂礫混じる
2	〃	〃	5YR 4/3にぶい赤褐ブロック、　〃
3	7.5YR2/3	極赤褐色砂質土	2～4mm大の砂礫混じる
4	7.5YR2/2	黒褐色土	5YR4/3にぶい赤褐ブロック、2～4mm大の砂礫混じる
5	2.5YR2/1	赤黒色土	〃
6	5YR3/2	暗赤褐色土	7.5YR4/3褐色ブロック、2～4mm大の砂礫混じる
7	10YR5/2	灰黄褐色砂質土	10YR7/6明黄褐色砂質土　〃
8	5と同じ		
9	4と同じ		
10	〃		
11	5YR2/2	黒褐色土	2～4mm大の砂礫混じる
12	3と同じ		
13	4と同じ		
14	10YR7/6	明黄褐色砂質土	2～4mm大の砂礫混じる



鉄斧出土状態

八王子（はちおうじ）遺跡

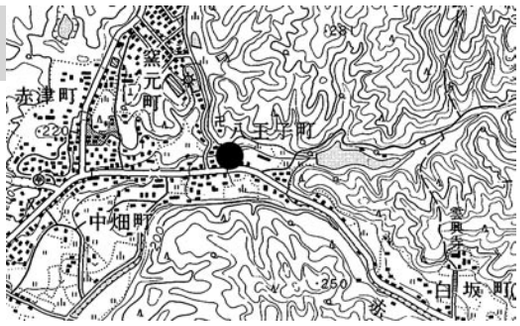
所 在 地　瀬戸市八王子町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 14 年８月～９月

調査面積　100 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・宇佐見守・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

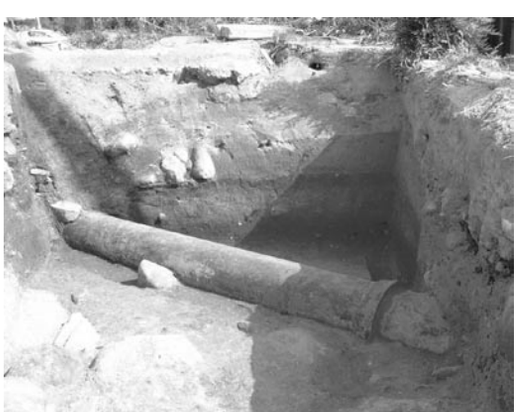
調査の経過　調査は、東海環状自動車道建設にともなう事前調査として、国土交通省愛知国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。遺跡の調査は平成 10 年度から継続して行われており、本年度は 00 A区の西接する 100 ㎡である。

調査の概要　遺跡は赤津川と木下川によって形成された河岸段丘上の標高 197m 前後に立地する。木下川を挟んで北側には縄文時代から近代にいたる長谷口遺跡が隣接する。

今回の調査は、八王子遺跡の最終年度にあたる。調査区のほとんどが後世の削平により滅失していた。ただし、北東寄りの一部に縄文時代から中世の包含層を確認することができ、中世陶器・縄文土器などが出土した。遺構は検出されず、包含層が確認された調査区北側にある木下川に向かって、地形の傾斜が確認できた。なお、調査区南側は木下川の氾濫原と思われる砂礫層の堆積が下位に確認された。したがって、縄文時代以前には今回の調査区近くまで河道が広がっていた可能性が指摘できる。　（永井宏幸）


調査区全景


土層断面


導水管


作業風景

惣作・鐘場遺跡（そうさく・かねば）

所 在 地　瀬戸市惣作町・鐘場町地内

調査理由　県道瀬戸設楽線・東海環状自動車道建設

調査期間　平成 14 年 4 月～ 12 月

調査面積　5,465 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・酒井俊彦・成瀬友弘



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設および東海環状自動車道建設のため愛知県建設部道路建設課および国土交通省愛知国道工事事務所から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 12 年度より実施している。平成 12 年度は遺跡範囲の南部、平成 13 年度は南部および北辺部分の調査を行った。これまでの調査によって後期旧石器時代末から近世までの遺構・遺物が検出された。今年度は、遺跡北部と南部の調査を実施した。

立地と環境　惣作・鐘場遺跡は、瀬戸市東部、惣作町・鐘場町に所在し、矢田川支流である赤津川左岸の標高 170m 前後の２段よりなる洪積段丘上に立地する。遺跡は赤津川と門前川を西限及び南限とし、北側と東側は山地を北限及び東限とする。遺跡範囲の北部は大目神社の所在する山塊からのびる尾根状の段丘上に位置し、惣作川によって南部と隔てられるため遺跡は地形的に２つに別れる。周辺には南側に太子縄文遺跡、太子遺跡、北東部の山地部に大目神社古墳、巡間 E 窯跡、瓶子窯跡、凧山 C 窯跡、凧山窯跡、凧山屋敷遺跡、凧山 A 窯跡、赤津川上流に長谷口遺跡、八王子遺跡がある。

調査の概要　本年度の調査区は、遺跡北部の昨年度 01D 区に続く南側部分に 02A 、02B 区を、南部では昨年度 01A 区北側に 02C 区、東側に 02D 区を設定した。

02A 区　昨年度 01D 区の南側に接する調査区である。式内社である大目神社からのびる尾根状の洪積台地の赤津川に面する低位段丘上に相当する。調査区北端は、大正時代以前の赤津川の旧流路である。基本層序は、現耕作土下に黒色土層を挟んで段丘の洪積層に至る。黒色土層の上面及び洪積土層上面において遺構が検出された。

主な遺構としては、古墳時代初頭の竪穴住居址２棟、古墳時代後期の竪穴住居址８棟、中世の不明遺構がある。古墳時代初頭の竪穴住居址は調査区中央やや南よりで検出され、埋土は黒色土を基本とする。竪穴住居は平面隅丸方形で、遺構に伴う構造物は不明である。出土遺物は土師器が少量検出された。古墳時代後期の竪穴住居址は調査区全体で検出され、平面隅丸方形である。粗粒砂と細礫混じりの暗灰色土を基本とし、確認できるものでは竈が北北西から北北東の辺に認められる。SB04 は検出面から床面までの掘り込みが比較的深く、やや大形の竪穴住居である。径 30cm 程の柱穴を 4 隅に検出され、柱の径は 15cm 前後である。遺構内からの出土遺物は少なく、住居の切り合いは SB07・SB08 の１ヶ所で単一時期に近い集落と考えられる。中世の遺構は旧赤津川河道に面する段丘縁辺部に認められる。旧河道に並行して不定形の落ち込み状の遺構が確認された。部分的に溝状になるが、性格は不明である。13 世紀代の灰釉系陶器 (山茶椀) が、比較的まとまって検出された。

02B 区　02A 区に連続する南側の調査区である。北部は 02A 区と同じく低位段丘面に相当するが、中央部は上位面にあたる。南部は近世以降の耕作地造成のために南の惣作川に向かって階段状に下がり、南から３段目が低位段丘面にあたる。

主な遺構としては、弥生時代から中世の遺構を検出した。弥生時代後期から古墳時代初頭の時期の遺構としては竪穴住居址６棟、溝１条 (SD08) 等を検出した。竪穴住居跡は全て上位段丘面上で確認され、SB02 は段丘の縁の削平により大部分欠失する。平面形は隅丸方形でやや大形のもの (SD03・07・11) と小形のものがある。柱穴は確認できたが、SB11 以外は炉址等の構造物は検出されなかった。SB03・05・06 からは比較的まとまって土器が出土した。SB03 からは床面より浮いた状態で弥生時代後期土器・土製品が検出され、銅鐸型土製品１点が出土した。SD08 は、上位段丘の直下をめぐる下位段丘面上の溝で、弥生時代後期に掘削され、古墳時代初頭に埋没している。赤津川方向にのびる上位段丘の先端部分の集落を囲繞しているものと推定される。溝は、検出面より深さ約 1.2m 、幅約 3.7m を測り、断面 V 字形である。溝両側面は水流による大きな凹凸があり、底部も水流により両側が削られ拡張している。底部の拡張部分の埋土は拳大以上の大きさの礫を交える粗粒砂で、上部は黒色土となる。土石流などの強い水流が流れて埋没した後掘り返しが行われている。溝下層から少量の弥生時代後期の土器が検出され、検出面に近い高さで古墳時代初頭の土器が投棄された状態で多量に出土した。古墳時代後期の遺構として調査区北端に SB01 が検出された。02A 区の集落に属するもので、床面直上より拳大以上の自然礫が多量に検出されたが、遺物は少量である。奈良時代の遺構としては、竪穴住居２棟が検出された。SB10 はほぼ南北方向に主軸をもち、東辺に竈を有し、床面及び竈から須恵器、土師器甕などが少量検出された。中世の遺構としては 15 世紀代の溝、土坑などが調査区北部の低位段丘面上で検出された。SD02・03 は上位段丘面直下に平行してはしり、15 世紀代の施釉陶器類が比較的まとまって出土した。いずれも検出面からの掘り込みは浅いが、SD02 は一部土坑状の掘り込みとなっている。溝の性格は不明である。調査区北端部で掘立柱建物が検出され、同部分の土坑より鉄滓や鞴の羽口などが出土している。また、調査区南部の低位段丘面上で 13 世紀代の土坑が検出された。その他、SD07 から中世から近世までの陶器類が投棄された状況で検出されたが、調査区南半の階段状の削平は近世以降の時期と推定される。

02C 区　遺跡南部の 00A 区と 01A 区に間の調査区で、上位段丘面及び下位段丘面への傾斜地に位置する。基本層序として現耕作土下部が段丘の洪積層となる。

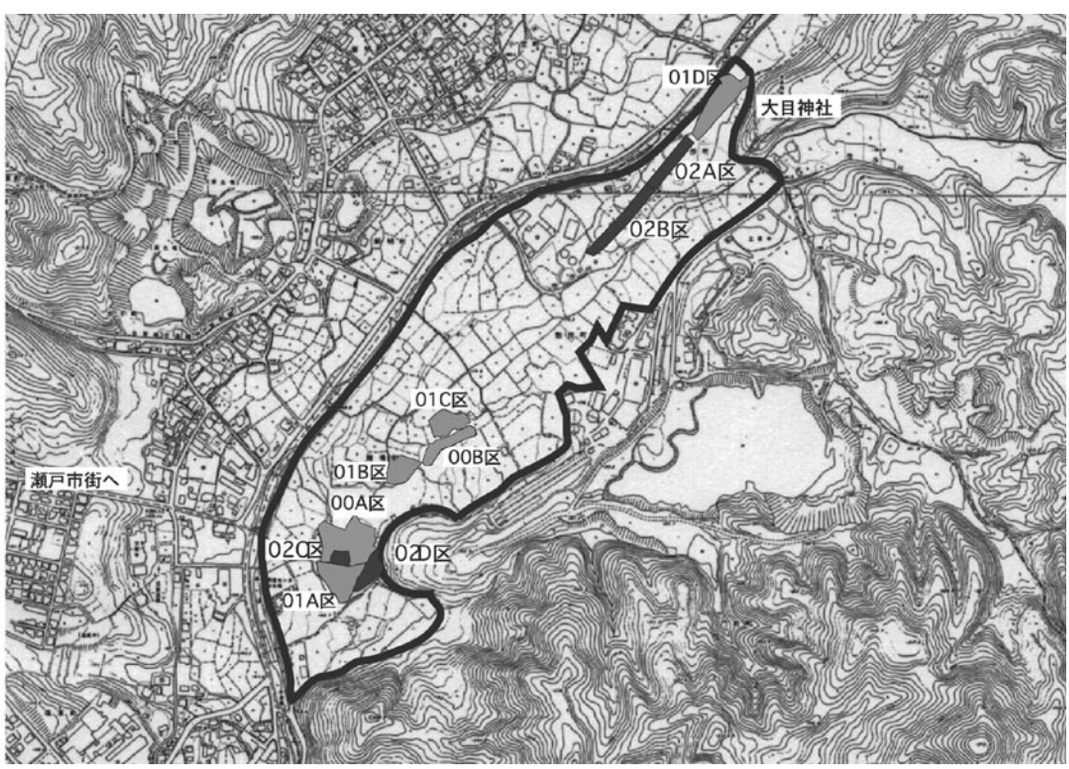
遺構は中世末の溝１条 (SD01) を検出する。SD01 は段丘端に平行しながら西方向に斜面をやや下る溝で、14 世紀代後半から 15 世紀前半の瀬戸窯産施釉陶器が少量検出された。また、段丘面は端部に向かってやや落ち込み、落ち込みの埋土よりこれと同時期の遺物が検出され、その他、傾斜地の包含層中からも同時期の瀬戸窯産陶器類などが出土した。

02D 区　遺跡南端に位置する調査区である。赤津川と門前川の間の段丘の門前川側に面する下位段丘面に位置する。調査区の南端は門前川の河谷である。基本層序は現耕作土下部が段丘の洪積層で、門前川河谷の端に近い部分に中世の包含層の黒褐色土層が洪積層上に存在する。

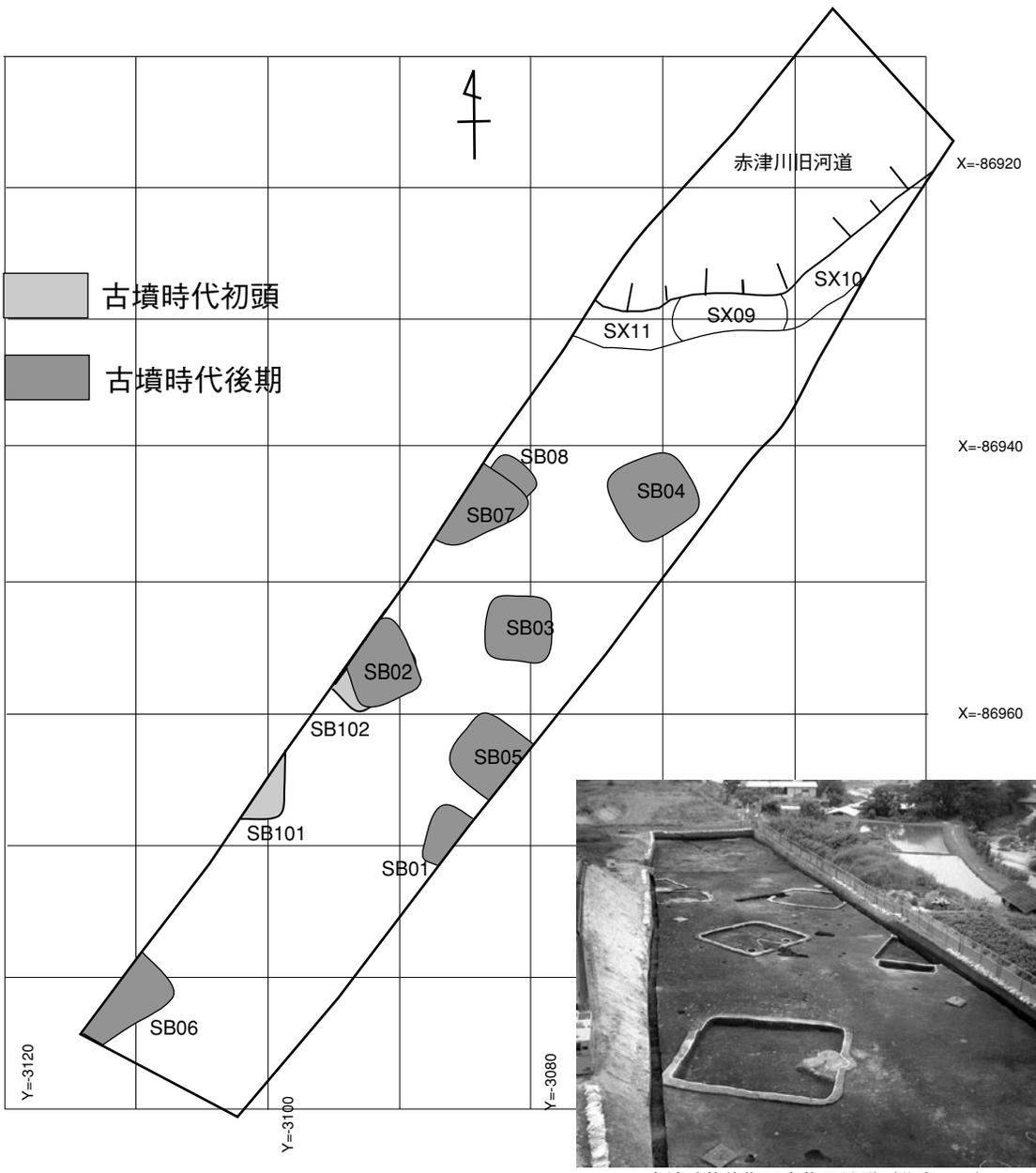
遺構・遺物は縄文時代から中世の時期のものが検出された。縄文時代後期の遺構として

土器埋設遺構が２基検出された。SK94 は、上部は不明であるが下部を欠失した無文深鉢形土器を立位で埋置し、内部に土器片を敷いている。SK132 は、立位の深鉢形土器の底部のみを検出した。また、倒木跡を１基検出し、埋土中より縄文時代後期の土器を検出した。また、中世の掘立柱建物２棟を検出した。SB01 は２間×３間、SB02 は１間×３間である。２棟は南北方向の主軸がやや東に振り、同一方位をとる。SB01 の柱穴より出土した灰釉系陶器 (山皿) から、これらは 12 世紀後半の時期に属するものである。段丘端に近い部分はやや端部に向かって落ち込み、中世の包含層が認められる。包含層中より 13 世紀代の灰釉系陶器 (山茶椀) が検出された。自然地形として南北方向の自然河道が調査区南半に認められた。いずれも 10cm 程度の浅い落ち込みで、白色粗粒砂と細礫を埋土とする。

ま と め　昨年度から遺跡範囲の北部の調査を開始し、今年度は 02A・02B の２調査区を設定した。その結果、これまでの調査では確認されなかった時期の遺構・遺物が検出された。弥生時代から古墳時代初頭の時期の竪穴住居及びこれに伴う遺物は遺跡範囲の南部では認められない。集落の及びこれにともなう遺構の範囲は、北部のみに限定される可能性がある。段丘の連続性及び小河川の谷地形による分断など遺跡の地形的なまとまりの面から本遺跡が大きく２つにわかれることが考えられ、今後の検討課題となる。また、02B 区で確認されたこの時期の集落は、段丘上位面を東北方向に展開することが推定される。予定されている今後の調査で様相を明らかにすることができるものと考えられる。　（酒井俊彦）

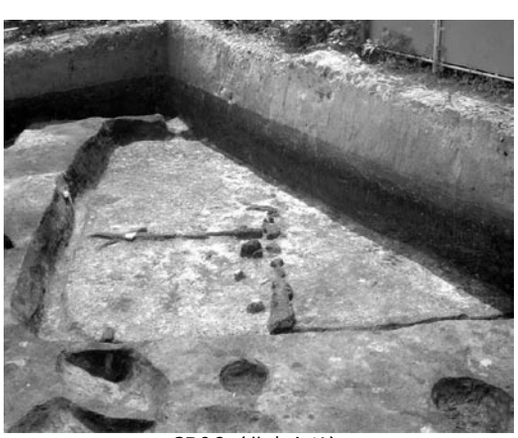


調査区位置図（1:10000）



02A 区主要遺構図　　(1:400)

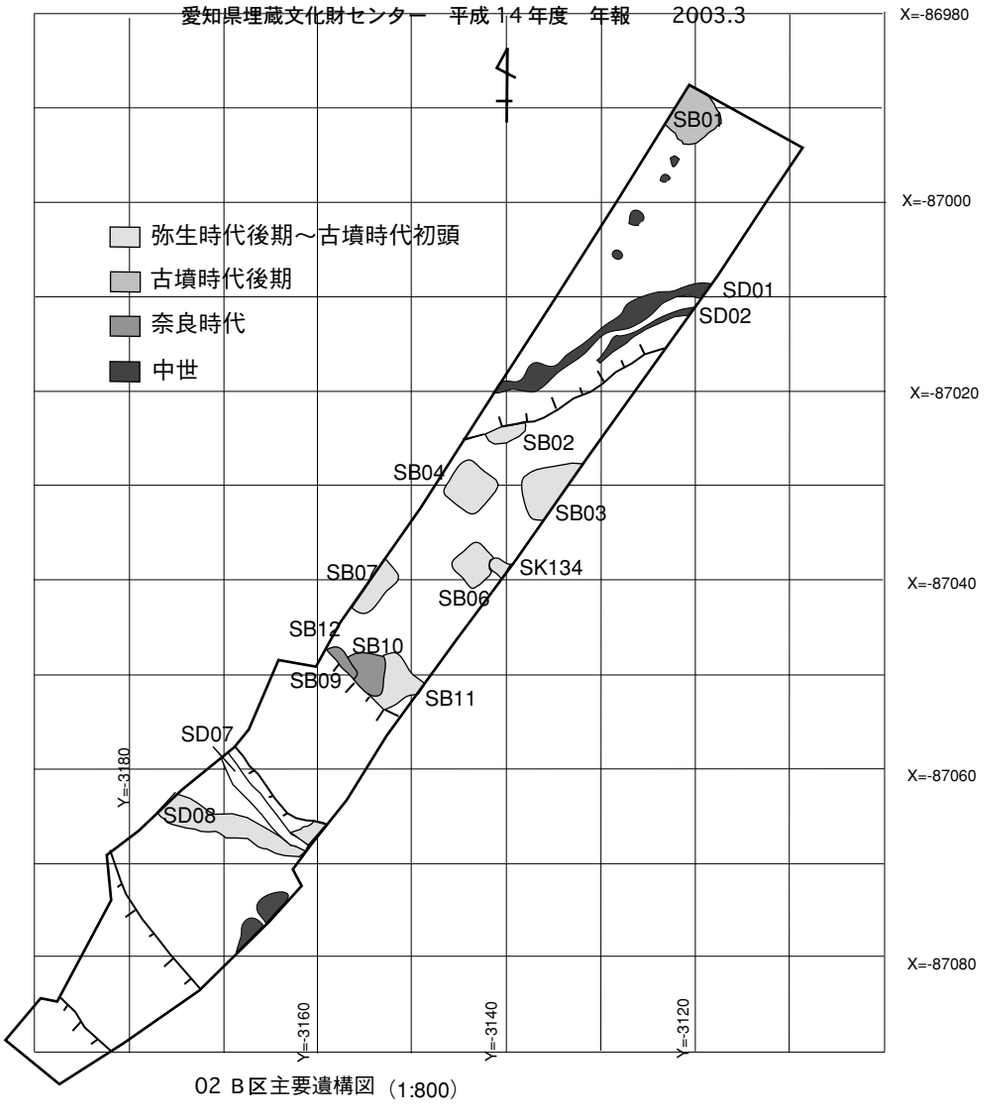
古墳時代後期竪穴住居址群（北東より）



SB06（北東より）



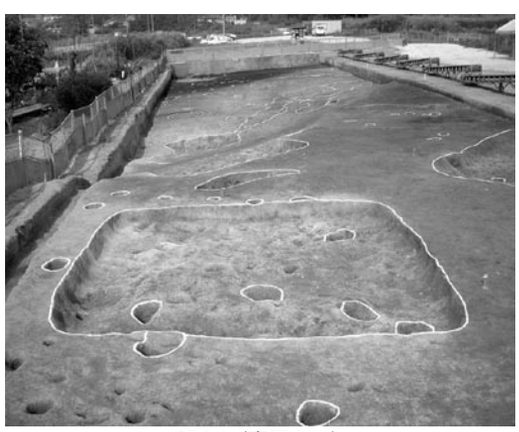
SB04（南より）



02 B区主要遺構図（1:800）



SB03 銅鐸型土製品出土状況（北より）



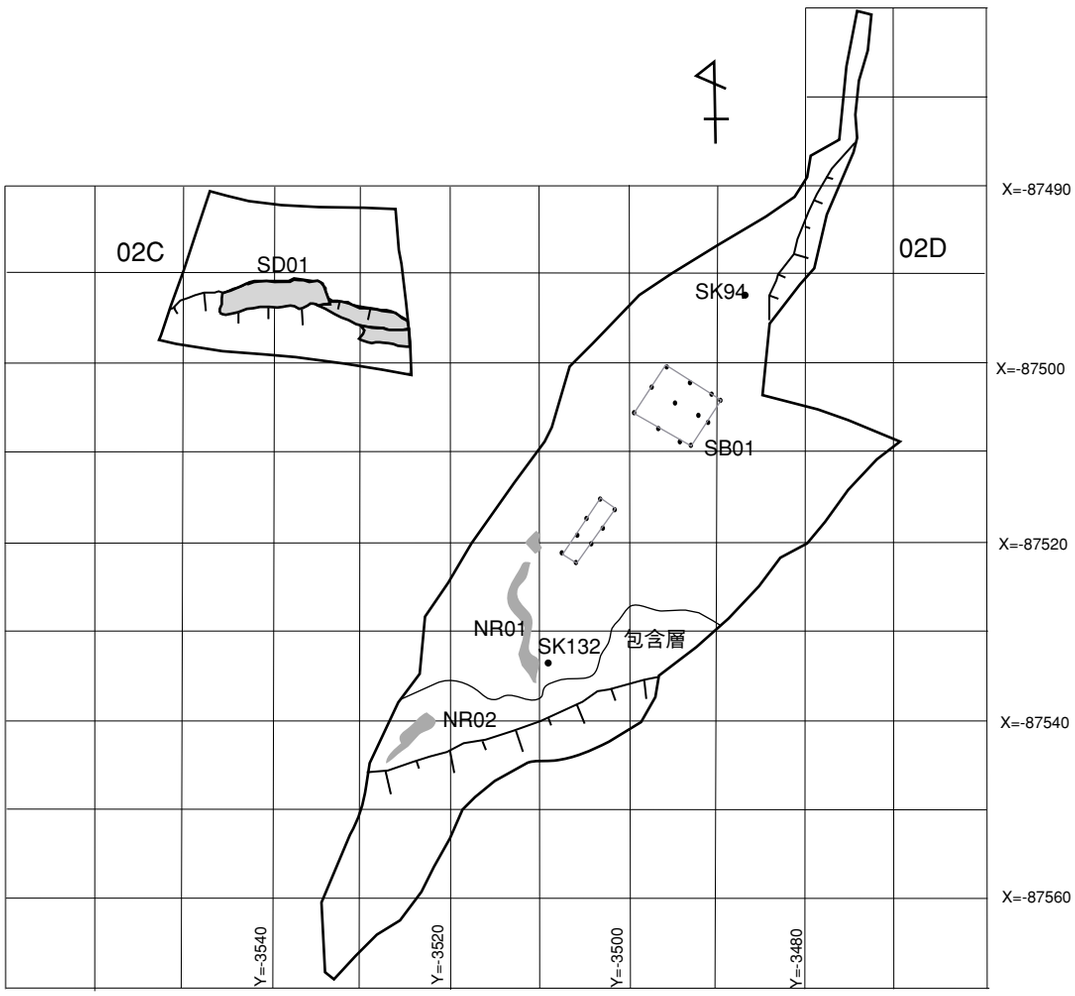
SB04（南西より）



SB03 遺物出土状況（北東より）



SD08（西より）



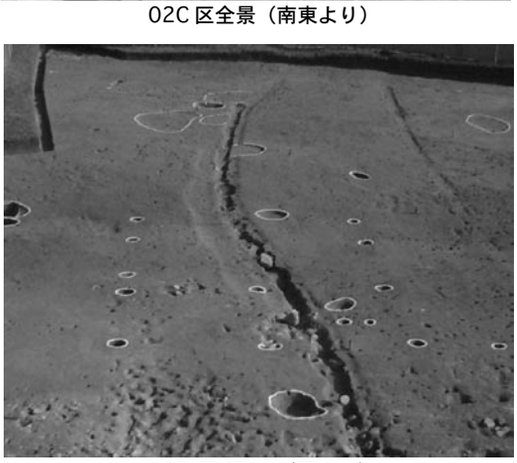
02 C・D 区 主要遺構図（1:800）



02C 区全景（南東より）



02D 区全景（北より）



02D 区 SB01（西より）



SK94 埋設土器（西より）

凧山（たこやま）C 窯跡

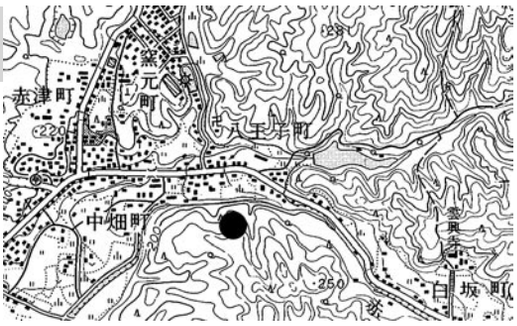
所 在 地　瀬戸市凧山町地内

調査理由　東海環状自動車道建設

調査期間　平成 14 年 4 月～ 7 月

調査面積　700 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・宇佐見守・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「猿投山」）

調査の経過　調査は東海環状自動車道建設の事前調査として、国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本窯跡は、平成 13 年 11 月に実施された瀬戸市教育委員会の分布調査により新たに確認され、同年 12 月に実施した範囲確認調査の結果、灰原と窯体の一部が判明した。これを受けて調査面積 700 ㎡を対象とし実施した。

立地と環境　凧山 C 窯跡は瀬戸市の東南部、矢田川の支流である赤津川流域に広がる赤津盆地を囲む丘陵上、凧山町地内に所在する、赤津地区としては窯業生産の最古段階の窯である。窯体は丘陵の南東斜面、標高約 220 mに 2 基、窯直下から斜面末端まで灰原が濃密に広がっている。周辺の遺跡には、鎌倉時代の凧山窯跡と江戸時代の瓶子窯跡、凧山 A 窯跡など窯業遺跡と古代から近世の凧山屋敷遺跡、縄文時代から中世の惣作鐘場遺跡などの集落遺跡がある。

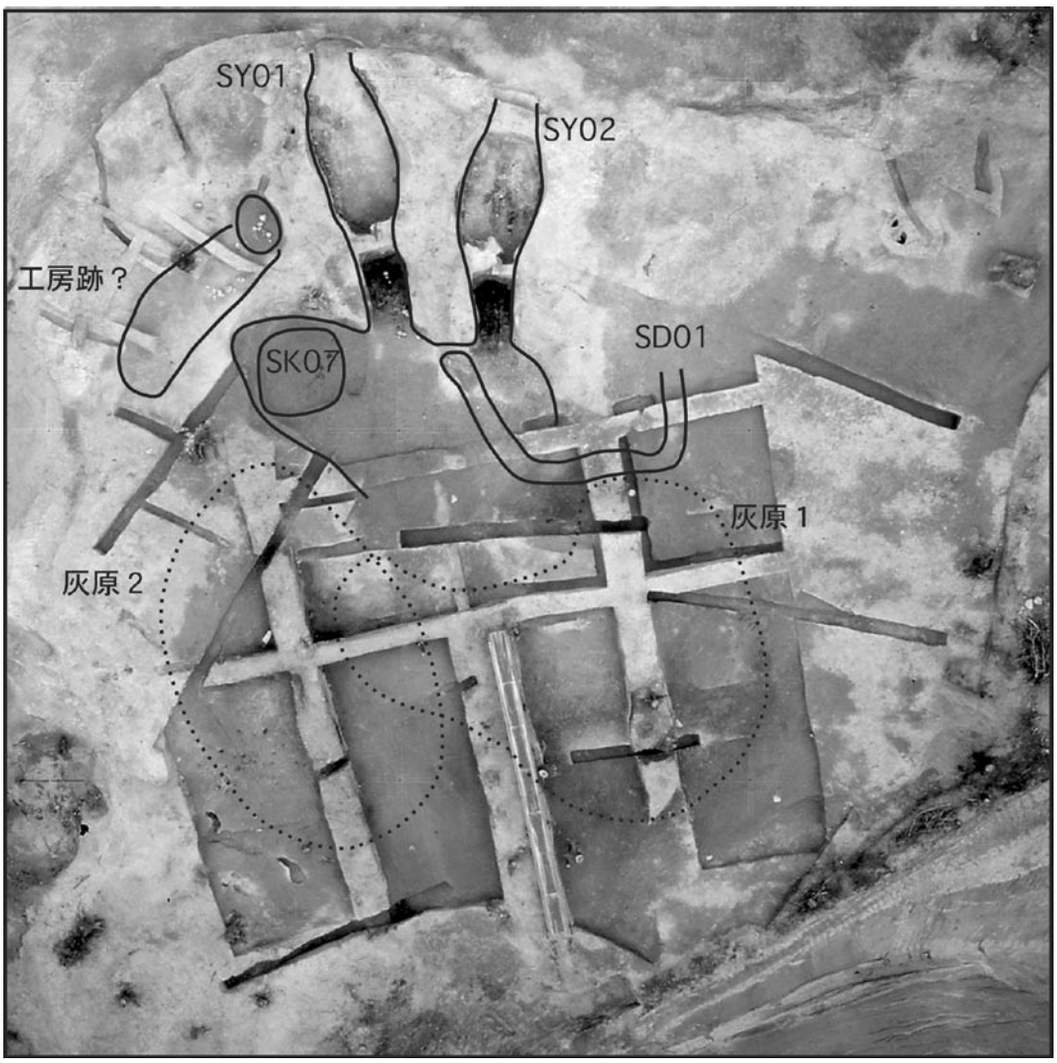
調査の概要　今回の調査では、13 世紀半ば頃（尾張型山茶椀第 7 型式）の窯体 2 基、工房跡・灰原といった灰釉系陶器（山茶椀）生産に関わる遺構群を、良好な状態で確認することができた。また、縄文時代早期と奈良時代の土坑も確認され、注目できる。

遺　　構　**窯体**：南北に隣接して 2 基（北：SY01 、南：SY02）が確認された。2 基とも焚口から焼成室まで確認でき、煙道部は削平され残存していなかった。窯体の規模は全長 7 m（推定）、最大幅約 2 mを測る。2 基の窯はその新旧関係から、SY02 → SY01 の順で構築されている。窯体手前の前庭部には排水路（SD01）が見つかっている。この排水路から灰と釉着した椀や椀を重ねて廃棄された遺物が多数出土した。

工房跡：SY01 の北西側にテラス状に掘り込まれた長方形の平坦地。ロクロピットなど作業施設に関わる遺構は確認できなかったが、窯に隣接して平坦面を築いていることから工房跡を推定した。

灰原：焼成不良な陶器や灰などを捨てた灰原は、窯体前庭部より谷側にかけて、大きく 2 ヶ所にわたり広がりが見られた。盗掘坑がほとんどみられず、当時の灰原が極めて良好な状態で遺存していた。概ね、SY02 の灰原は南東側（灰原 2）、SY01 の灰原は北西側（灰原 1）に対応する。南東側の灰原は窯体を構築した時に地盤を削りだした土（斑土層）が確認できる。灰層 1 層で 1 回の操業と試算すると、灰層は全体で 5 層（灰原 1 に 3 層、灰原 2 に 2 層）確認でき、最低 5 回の操業が推定できる。

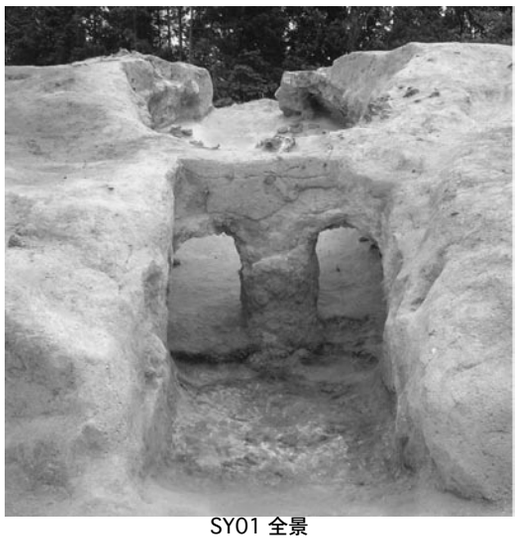
出土遺物　遺物収納コンテナ（27 ﾘｯﾄﾙ）で約 450 箱にのぼる。無釉の陶器（山茶椀）である椀・皿を中心に、陶丸や古瀬戸瓶子・四耳壺などが出土している。　（永井宏幸）



凩山 C 窯跡全体図



凩山 C 窯遠景


SY01 全景


SY01 分焔柱（焼成室から）


SY01 焼成室遺物出土状況


SY01 焼成室焼台出土状況


SY01 焼成室焼台出土状況


SY02 全景


SY02 分焔柱補強後


SY02 分焔柱補強前


SY02 分焔柱


SY02 焚口付近遺物出土状況


SY02 前 SD01 遺物出土状況


灰原全景（灰原 1 東から）


SK07 遺物出土状況


SD02 遺物出土状況（工房跡？）


SK11 全景（奈良時代）


SK12 全景（縄文時代早期）

吉野（よしの）遺跡

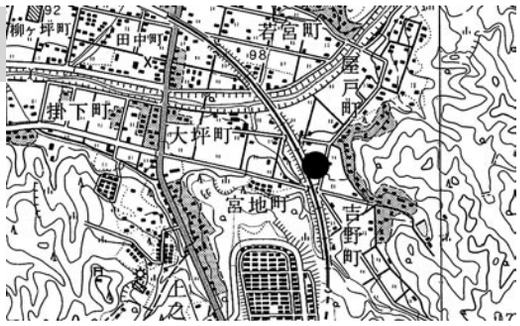
所 在 地　瀬戸市屋戸町

調査理由　国道 248 号建設

調査期間　平成 14 年 10 月～平成 15 年 2 月

調査面積　2,300 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・鵜飼雅弘・永井宏幸



調査地点（1/2.5 万「瀬戸」）

調査の経過　調査は国道 248 号建設に先立ち、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成 12 年度から実施している。過去２年の調査では、弥生時代中期の水田跡、古墳時代前期の柵状遺構を伴う自然流路、中世の土坑などが検出されている。瀬戸市教育委員会の遺跡分布地図によると、昨年度までの調査区は吉野遺跡、今回の調査区は屋戸町遺跡とされていたが、関係機関との協議の結果、吉野遺跡の一部として調査を進めることになった。

立地と環境　遺跡は、矢田川（山口川）により形成された沖積地である山口谷の南東部、山口川にそそぐ吉田川の右岸、標高 100m 前後に立地する。今回の調査区は、過去２年の調査区の北側に位置する。

調査の概要　本年度の調査は、調査区を南北に縦断する水路を挟んで東側を 02A 区、西側を 02B 区として実施した。

調査の結果、本年度の調査区でほぼ完結する微高地上に、縄文時代中期後葉から後期前葉を中心とする遺構が展開することが明らかになった。

調査区の現況は水田で、昭和 30 年代の耕地整理により地形が改良されていた。そのため、昨年度までに確認されていた中世の遺構群はほとんどが削平され、02B 区に深い遺構が若干残存する程度であった。

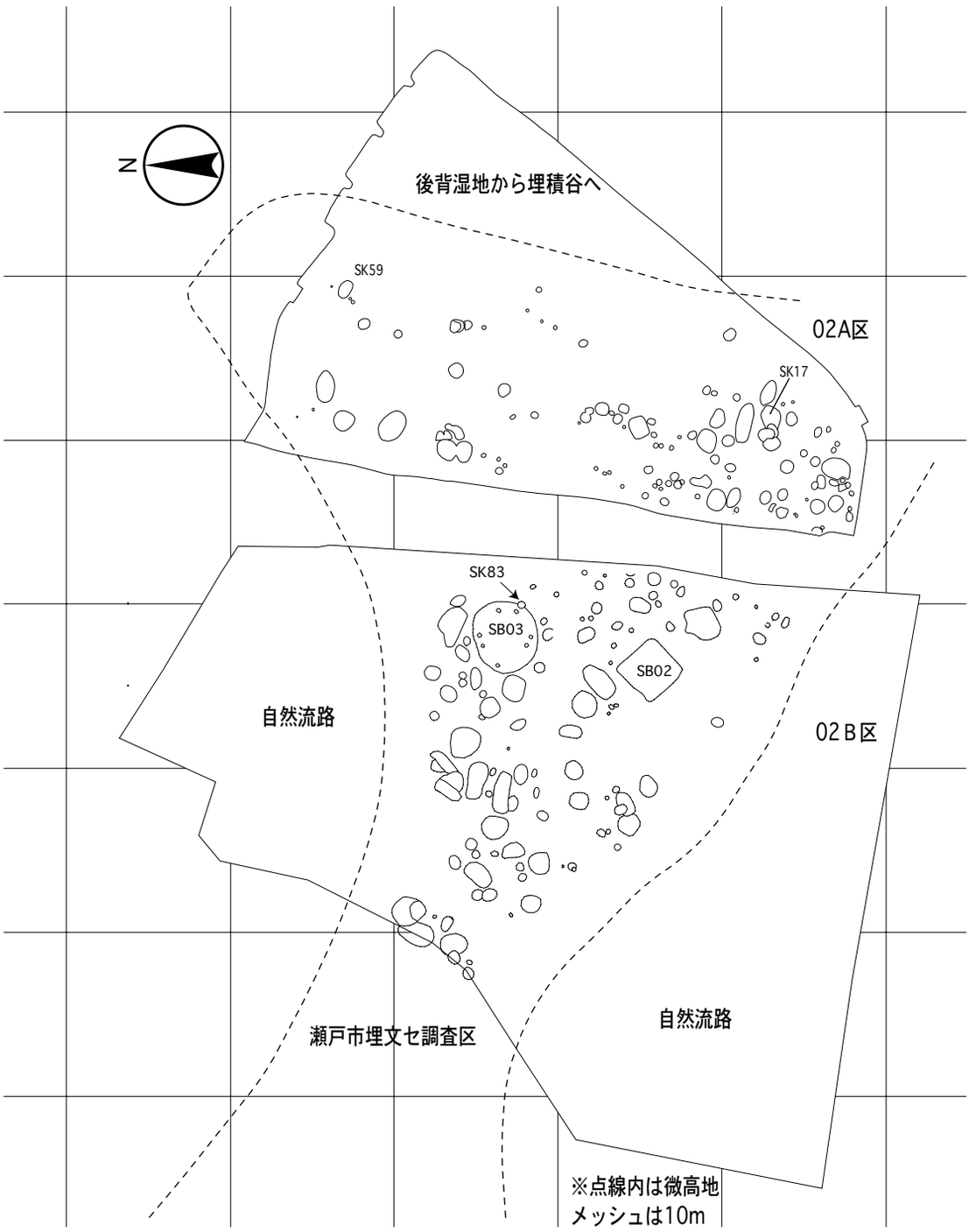
縄文時代の遺構としては、両調査区にまたがって多数検出された土坑群が目立つ。なかには、02A 区 SK17 、02B 区 SK83 のように土器が埋設された状態で確認できる遺構が数基含まれる。また、02A 区 SK59 のように破損した石皿など大型石製品が集積した土坑もみられる。土坑内資料はほとんどないが、出土した遺物に、切目石錘や磨製石斧が目立ち、ついでチャート製の剥片が多い。最も注目される遺構としては、02B 区 SB02・03 があげられる。SB02 は 2m 四方の方形プランで中心部に石囲炉をもつ竪穴遺構である。主柱穴は確認できなかったが、石囲炉は被熱痕があり、住居の可能性が高い。一方 SB03 は直径約 3m の円形プランで中心部に炉がない。ただし、主柱穴と考えられる 4 箇所のピットがあり、竪穴住居と考えた。さらに SB03 内および周辺から褐鉄鉱（鬼板の一種）が数ヶ所、赤色塗料の付着した磨石、赤彩された土器片が出土している。したがって、SB03 はベンガラを塗布するための施設であった可能性が示唆できる。

中世の遺構は、02B 区の西側に隣接して実施された瀬戸市埋蔵文化財センター調査区に続く、東西の溝（SD03）や土坑数基を確認した。

また、耕地整理以前まで使用されていた石積の水路を南北方向に２条、東西方向に２条

確認した。このうち、00A 区の SD01 は現存する南北水路に沿って確認でき、胴木を基礎とした石積の水路であった。

ま と め　本年度の調査成果としては、瀬戸市内では希少な縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての遺構・遺物が確認できたこと、さらにこれらの遺構群が約 1,500 ㎡の微高地上に展開していることがあげられる。そして遺跡の規模や立地、剥片石器・切目石錘の出土から考えて、定住的な居住地ではなく、漁撈活動を中心としたキャンプ地的な性格の居住地を想定したい。（永井宏幸）



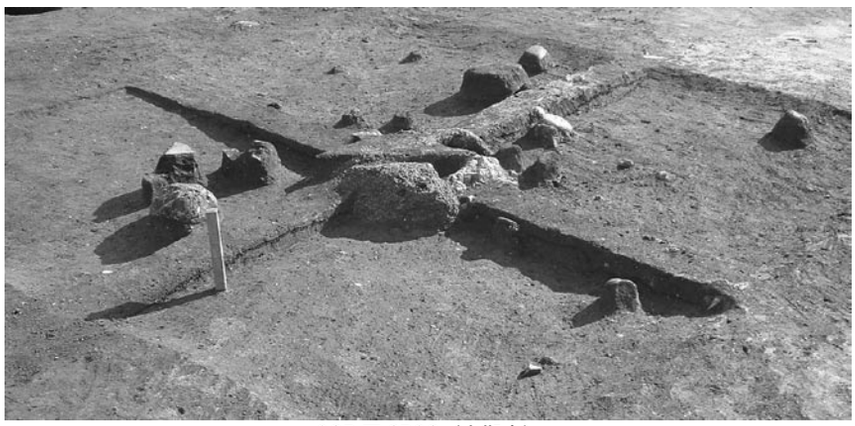
吉野遺跡 02 調査区縄文時代遺構全体図（1:400 ）



02A 区 SD01（近代以降の水路）



02A 区 SK17（中期後葉の埋設土器）



02B 区 SB02（中期末）



02A 区 SK59（石皿などが出土した土坑）



02B 区 SB03（褐鉄鉱などが出土した後期前葉の円形竪穴住居住居）



02BSX02・03（近代以降の水路）



02B 区 SK83（SB03 に隣接する埋設土器）



02B 区縄文時代全景（北西から）



02B 区中世以降全景（北西から）

朝日（あさひ）遺跡

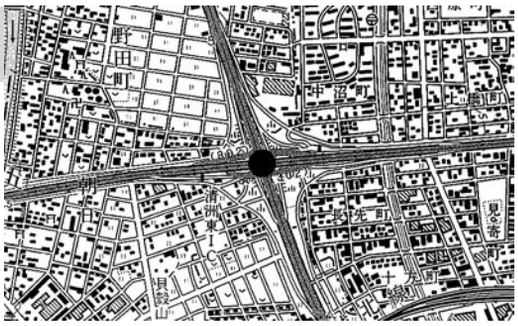
所在地　西春日井郡清洲町、新川町、春日町、名古屋市西区

調査理由　近畿自動車道清洲 JCT 建設
県道高速清洲一宮線建設

調査期間　平成 14 年 4 月～平成 15 年 3 月

調査面積　3,877 ㎡

担当者　赤塚次郎、鈴木正貴、樋上昇、蔭山誠一



調査地点（1/2.5 万「清洲」）

調査の経過

近畿自動車道清洲 JCT 建設および県道高速清洲一宮線建設に伴い、朝日遺跡にかかる部分について事前調査を行う必要があった。そこで平成 10 年度から日本高速道路公団・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通して委託された当埋蔵文化財センターにおいて発掘調査を実施している。今年度の調査は平成 10 年度年報における朝日遺跡「調査区の表記について」に準じて A 区に 02Aa 区～ 02Ag 区の 7 ケ所、B 区に 02Ba 区～ 02Be 区、02Bg 区～ 02Bj 区の 9 ケ所、C 区に 02Cb 区～ 02Ch の 7 ケ所、D には 02Da 区～ 01De 区の 5 ケ所の併せて 28 ケ所の調査区を設定し、3877 ㎡を調査した。調査期間は平成 14 年 4 月から平成 15 年 3 月である。



平成 14 年度発掘調査区位置図

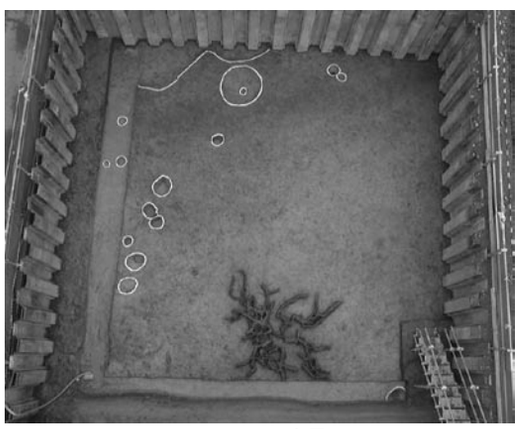
立地と環境

朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に同春日町、新川町、名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落で、現在では五条川左岸の後背湿地にあたる地域となっている。

調査の概要

弥生時代～古墳時代

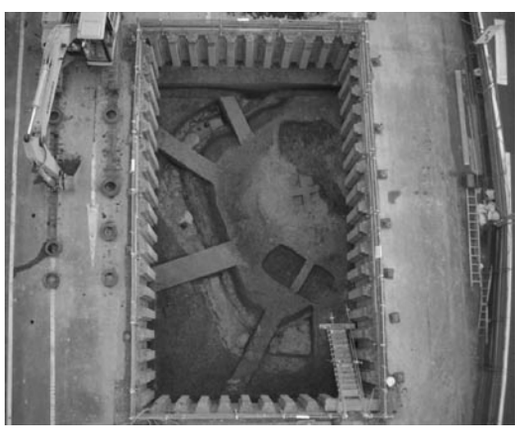
02Aa 区・02Ae 区・02Af 区と 02Ba 区は「北居住区」東の環濠帯の北東外側にあたり、02Aa 区では弥生時代の方形周溝墓の周溝と思われる溝 1 条が検出され、02Af 区では弥生時代中期後葉の方形周溝墓 1 基とその下面から土坑等が検出された。02Ba 区では古墳時代前期後半の自然流路とその流路に切られている水田跡を検出した。水田跡は弥生時代に遡る可能性が高いもので、朝日遺跡における初めての検出である。水田一筆は一辺 2 ～ 3m 程の小区画水田で 10 筆確認された。



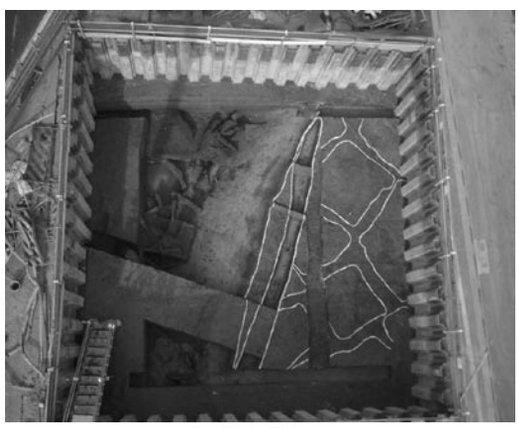
Aa 区 1 面全景



Af 区 1 面方形周溝墓の周溝掘削



Af 区 1 面全景



Ba 区 1 面全景



Ba 区 1 面水田跡



Ba 区 1 面水田跡土壌サンプリング

02Ab 区～ 02Ad 区と 02Ag 区、02Bb 区～ 02Bd 区は弥生時代中期中葉と弥生時代後期に「北居住区」東の環濠帯とされてきた部分にあたる。02Ac 区の南西隅と 02Ad 区の中央部から東側において検出された溝は同一のものと考えられ、従来の調査では弥生時代中期前葉～中葉の最も内側の環濠と考えられる。同様に 02Ac 区の中央部から東側に検出された溝は弥生時代中期中葉･弥生時代後期の内から 2 番目の環濠に、02Ag 区と 02Bd 区において検出された 2 条の溝は弥生時代中期中葉・弥生時代後期の内から 3 番目と 4 番目の環濠に、02Ab 区の南西隅に検出された溝は弥生時代中期中葉・弥生時代後期の内から 4 番目の環濠に、02Bc 区の西側と 02Bb 区の南西隅に検出された溝は弥生時代後期の内から 5 番目（最外縁）の環濠に対応するものと思われる。



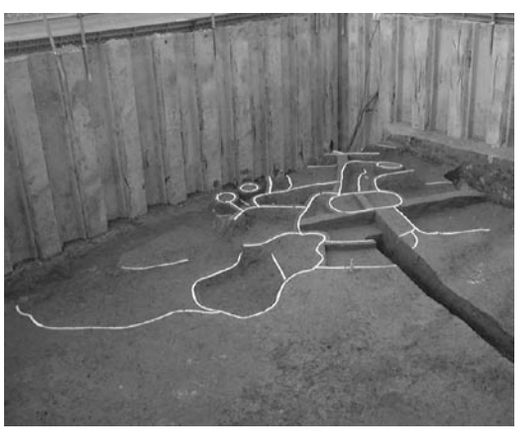
Ab 区 3 面全景



Ac 区 2 面の溝掘削



Ac 区 2 面全景



Ad 区 2 面全景

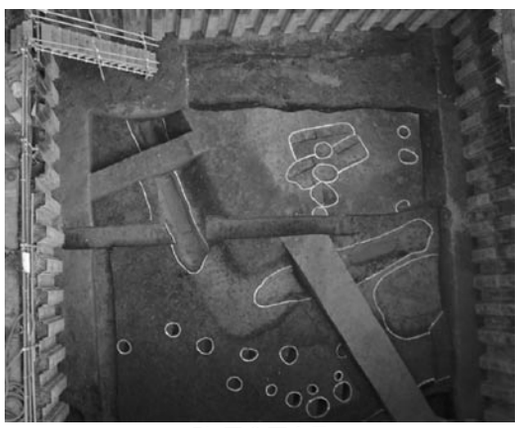


Ad 区 5 面全景

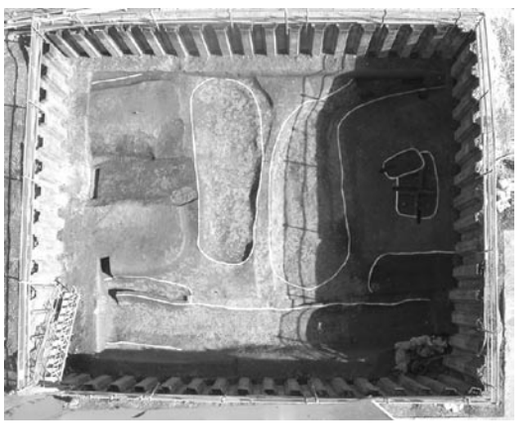


Ag 区 2 面全景

この中で02Bd区の内から３番目の弥生時代後期の環濠において有肩袋状鉄斧が出土した。また、これらの調査区は弥生時代中期後葉において墓域化していたようであり、方形周溝墓が 02Ab 区・02Ad 区・02Af 区・02Bb 区・02Bd 区に各 1 基、02Bc 区に 2 基検出され、同時期の土坑墓や土器棺墓も 02Ab 区・02Ag 区・02Ac 区において検出された。これらの方形周溝墓は弥生時代中期中葉の環濠が埋没した後に周溝を掘削しており、02Bd 区の方形周溝墓のように環濠と環濠の間にある高まり（堤）部分を利用したものもある。02Ad 区の環濠の集落側において弥生時代中期末～弥生時代後期の竪穴住居や土坑を検出し、「北居住区」の居住域がここまで展開することが明らかに出来た。



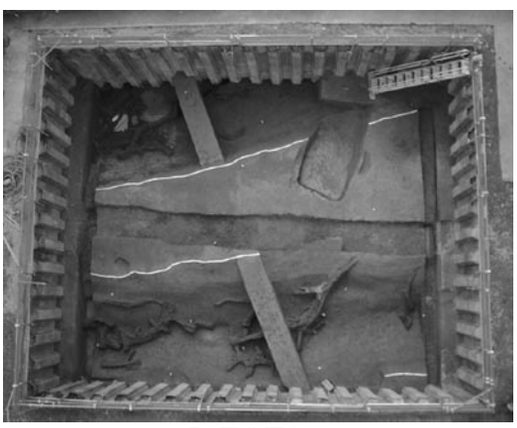
Bb 区 2 面全景



Bc 区 1 面全景



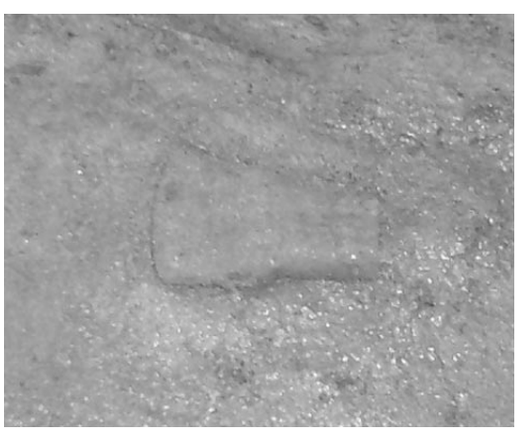
Bd 区 1 面中世の方形土坑



Bd 区 2 面全景



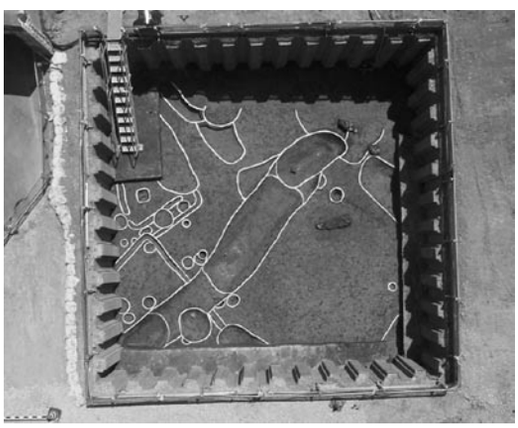
Bd 区 2 面環濠掘削



Bd 区 2 面環濠出土袋状鉄斧

02Bg 区は谷 A の北肩部分にあたるものと思われ、谷を流れる流路が微妙に流れを変え、徐々に埋まっていく過程が観察された。谷 A の上層では弥生時代後期の流路が確認され、下層では弥生時代中期前葉を中心とする流路が 3 条検出された。

02Be 区と 02Bh 区～ 02Bj 区は谷 A を挟んで弥生時代中期の東墓域が広がる部分で、02Bh 区においてかって調査された大型方形周溝墓の北周溝とその北に広がる小規模な方形周溝墓と思われる溝や土坑などを検出した。02Be 区・02Bi 区・02Bj 区では弥生時代中期前葉～中葉の竪穴住居や土坑、その後形成された弥生時代中期中葉～弥生時代中期後葉の方形周溝墓が確認された。また 02Be 区では弥生時代中期の方形周溝墓の周溝と重複するかたちで堆積した弥生時代後期以後の溝に囲まれた高まりの中で弥生時代後期と思われる横臥屈葬の人骨が 1 体出土した。



Be 区 3 面全景



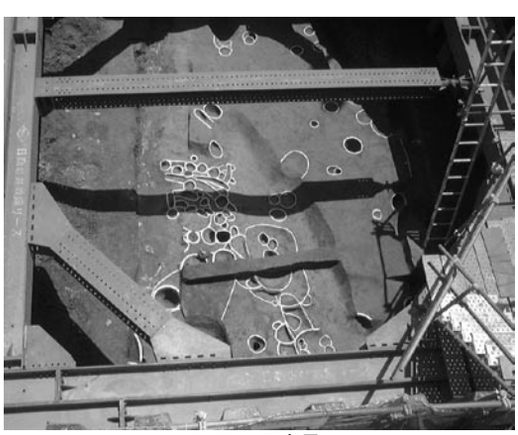
Bg 区 3 面谷 A



Bg 区 3 面谷 A に堆積した貝層



Bh 区大型方形周溝墓の北周溝断面



Bi 区 1 面全景

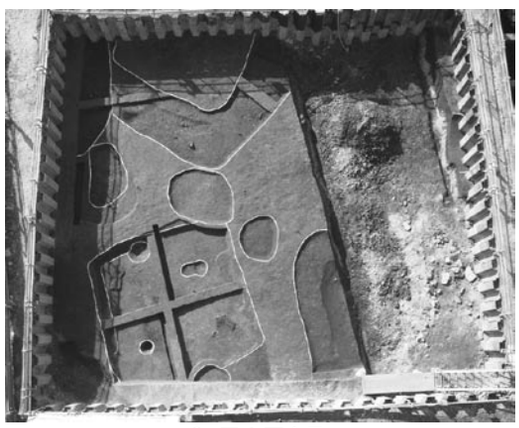


Bj 区 2 面方形周溝墓の周溝掘削

02Cb 区～ 02Cd 区・02Cg 区は「南居住区」から南東へ外に出た部分で、02Cb 区では弥生時代中期中葉～中期後葉の竪穴住居と土坑とそれらより新しい弥生時代中期後葉の方形周溝墓の周溝やさらにその方形周溝墓の溝を切って流れた自然流路が検出された。この自然流路はこれまで谷 B とされてきたものに対応し、弥生時代中期中葉以後の洪水堆積の後弥生時代後期～古墳時代前期にかけて流れているようである。02Cc 区と 02Cd 区は隣接する調査区で、弥生時代中期中葉～中期後葉の竪穴住居や土坑と、弥生時代中期後葉～弥生時代後期の方形周溝墓が 5 基検出された。02Cc 区では古墳時代前期の竪穴住居 1 棟が確認され、朝日遺跡の中では大型に分類される一辺約 6m の焼失家屋であった。02Cg 区では弥生時代中期中葉の溝（幅 3.2m 前後、深さ 1.5m 前後）1 条とマウンドの隅部が陸橋状になる方形周溝墓を 2 基確認した。



Cb 区 2 面南側



Cc 区 1 面全景



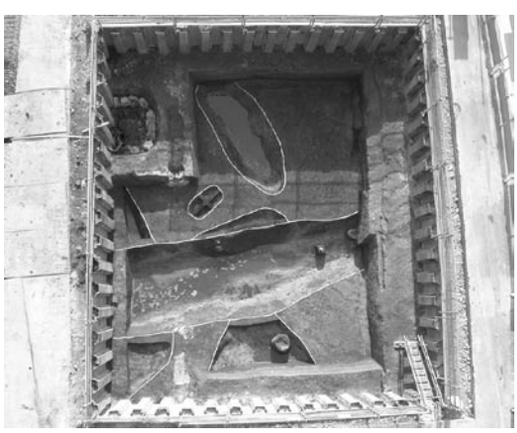
Cc 区 3 面全景



Cc 区 3 面方形周溝墓の周溝出土土器



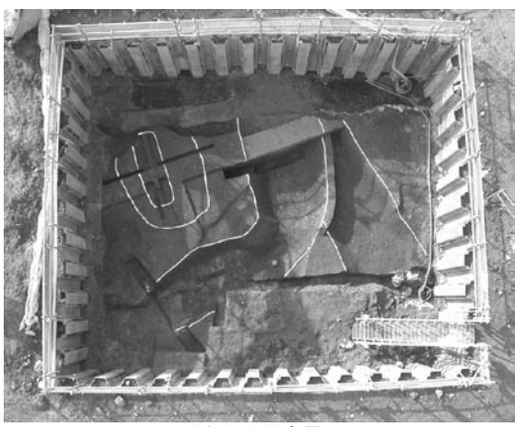
Cd 区 1 面全景



Cg 区 1 面全景

02Cf 区・02De 区は「南居住区」の南縁辺部にあたる部分で、02Cf 区において弥生時代中期前半の環濠と思われる溝、02De 区において弥生時代後期前半の環濠が検出された。02Cf 区は溝が埋没した後、弥生時代中期後葉の土坑が掘削され、弥生時代後期には方形周溝墓が築かれていた。弥生時代後期の方形周溝墓のマウンド上では主体部と思われる土坑が検出され、ガラス小玉や人骨が出土した。02De 区では弥生時代中期前葉～弥生時代中期後葉の竪穴住居が 10 棟、土坑が約 90 基と環濠より新しい弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居 1 棟と土坑も確認された。

02Ce 区・02Dc 区・02Dd 区は「南居住区」の内部に位置し、02Dc 区では、弥生時代中期前葉～古墳時代前期前半の竪穴住居約 100 棟、土坑約 500 基を検出した。02Dd 区



Cf 区 2 面全景



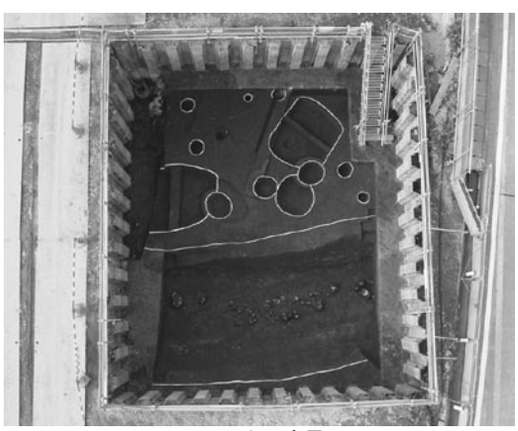
Cf 区 2 面方形周溝墓



Cf 区 3 面全景



De 区 1 面環濠遺物出土状況



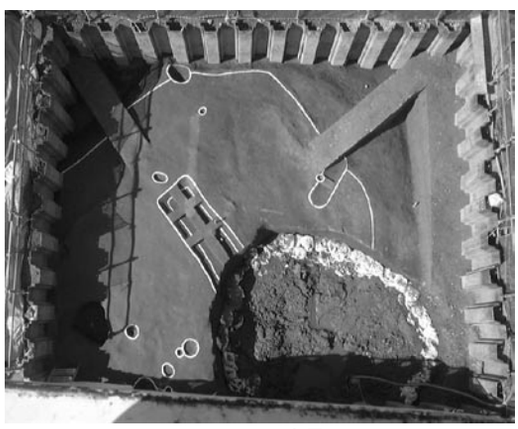
De 区 2 面全景



De 区 3 面環濠出土弥生土器

では弥生時代中期前葉～古墳時代前期前半の竪穴住居 10 棟程と土坑約 150 基、弥生時代中期前半の区画溝 1 条を検出し、弥生時代後期の巴形銅器が出土した。02Ce 区は調査区のほとんどを近年の撹乱によって破壊されていた。残存した部分は遺物包含層が約 0.75m あり、出土した弥生土器は弥生時代中期前半と弥生時代後期後葉に区分できる。

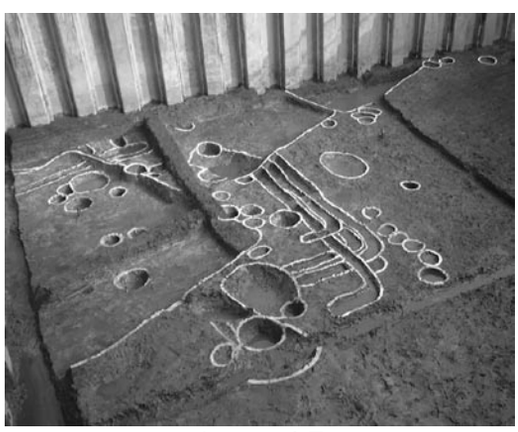
02Da 区と 02Db 区は「南居住区」の西外側に展開する西墓域にあたる部分で、02Da 区は弥生時代中期後葉～後期の方形周溝墓 1 基、弥生時代中期中葉の溝 2 条、土坑多数を検出した。02Db 区は弥生時代中期中葉～後葉の貝層の腐食したものと炭化物を多く含む堆積が北にある谷 A に向かって傾斜して堆積し、その上部において弥生時代中期中葉～弥生時代中期後葉の竪穴住居約 75 棟、土坑約 150 基を検出した。方形周溝墓などは検出されなかった。



Da 区 1 面全景



Db 区 1 面遺構掘削



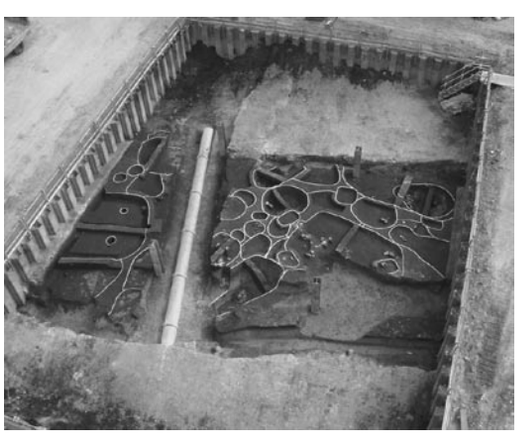
Db 区 4 面全景



Dc 区 2 面全景



Dc 区 4 面測量

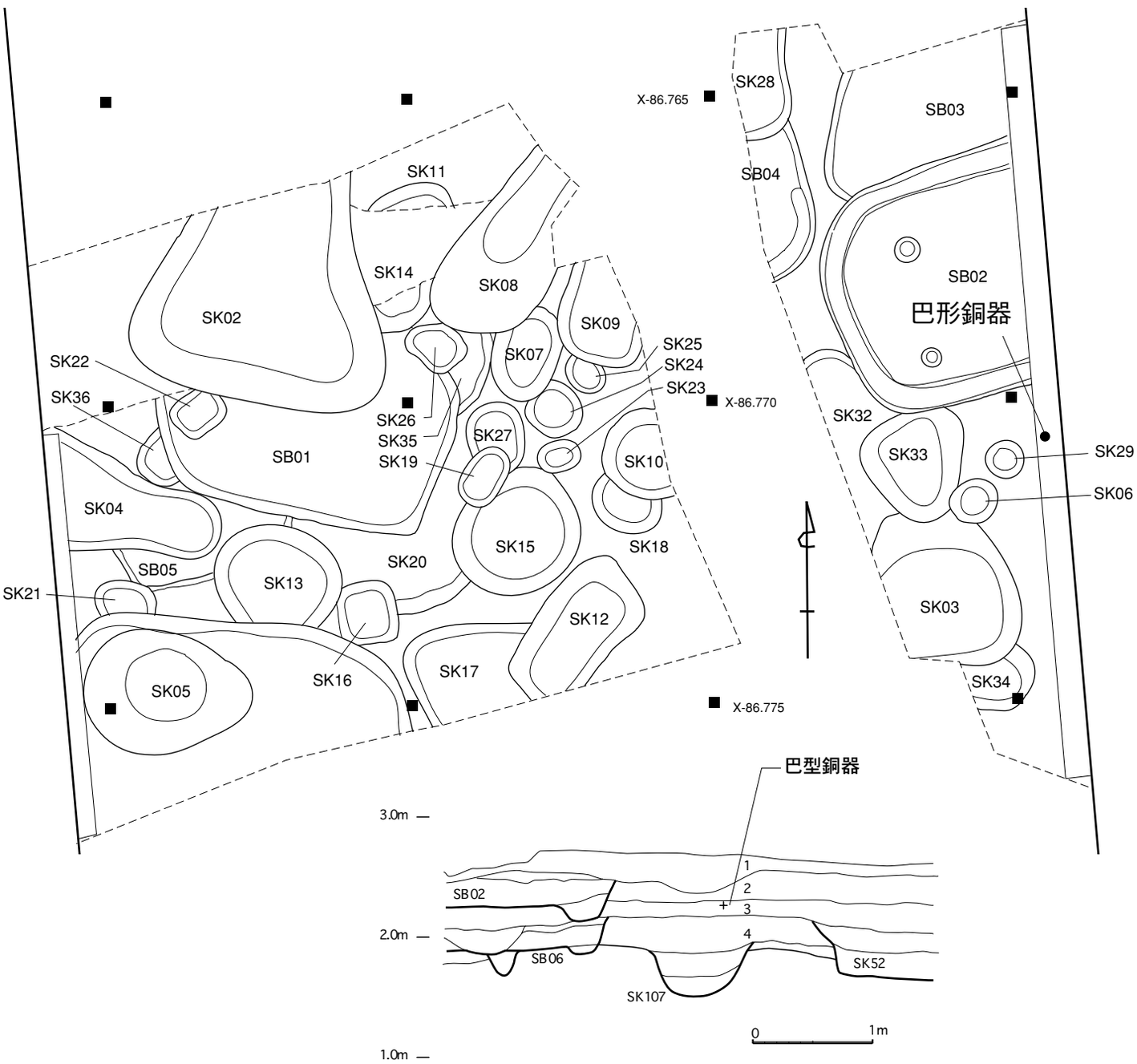


Dd 区 1 面全景

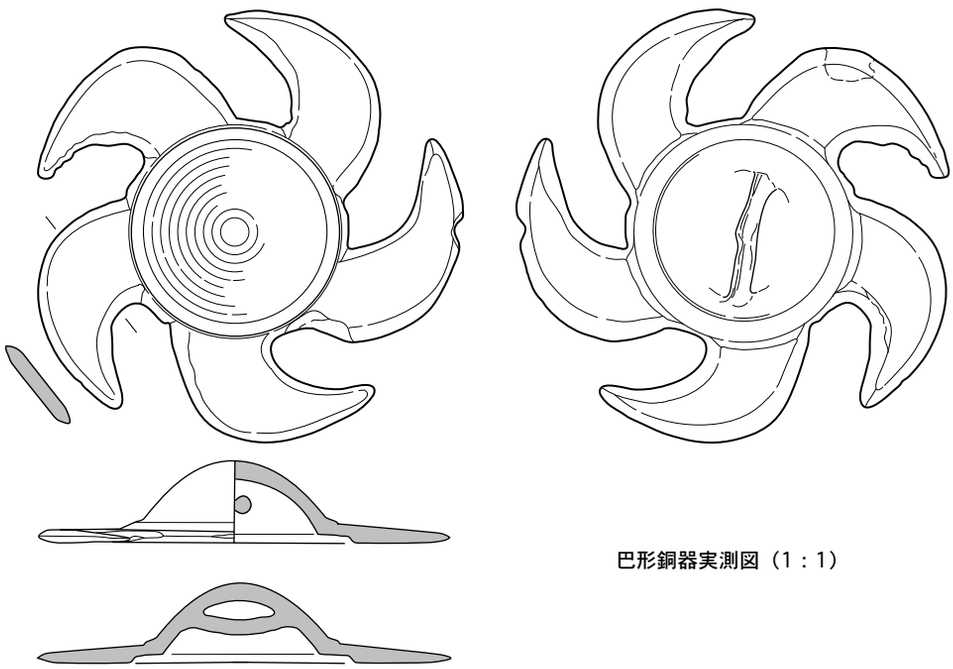
02Dd 区出土の巴型銅器

（1）出土状況と所属時期

出土地点は、調査区 02Dd 区竪穴住居 SB02 の南側に近接し、調査区を囲むシートパイルに設定したセクションベルト内 (包含層) で巴形銅器は表面を上にしてほぼ水平に置かれたような形状で出土した。層位的には、断面図から明らかなように、第 3 層上位に位置し、第 2 層から掘削されている竪穴住居 SB02 からは山中 I 式 1 段階の高杯が床面上から出土している。また同一遺構検出面では、SB02 に重複する SK33 から、山中 I 式 2 段階の資料が確認できる。さらに第 4 層から掘削された SK52 は、弥生中期末葉の高蔵式期の土器を包含する。したがって層位的には山中 I 式期から高蔵式の間に位置づけることが可能である。遺構配置や層位を総合すると、巴形銅器の所属時期は、山中 I 式 2 段階を中心とする時期を想定しておきたい。



上：02Dd 区 1 面遺構平面図（1：100）、下：02Dd 区東壁セクション（1：50）



巴形銅器実測図（1：1）

（2）巴形銅器の特徴

5 脚左捩半球形座棒状鈕巴形銅器であり、巴径は 5.6cm で座径は 3.0cm 、高さ 1.1cm を測る。全体の形状が残り、保存状況も極めて良好な資料である。表面は全体に研磨痕跡が著しく光沢をおびる。半球形座の座縁部には段が見られる。内面は二次的な研磨痕跡がほとんど見られず、鋳出した状況をそのままとどめているものと思われる。座の中央部には棒状鈕が見られ、座内面と脚との間には 4mm ほどの一段の窪んだ平坦面が存在する。脚の端部は内外両面ともに 2mm ほどの斜面が認められる。こうした微小な段差や斜面からは、巴形銅器の上下鋳型の形状を復原することができ、鋳型の両面に巴形銅器の脚部を含めた輪郭線が丁寧に描かれていたことを類推することができる。脚部は幅広で、短く鋭く捩じる形態を留める。各脚との間には脚幅ほどの間隙を置き、バランス良く配置されている。以上の形態的な特徴の中で、特筆できるものを整理すると以下のようにまとめることができる。座縁部の段の存在、均等に配置され幅広で短く鋭く捩じる脚部。上下の鋳型に加工が施されたことによって生じた、脚端部両面に残る斜面と座内面の窪んだ平坦部の存在。以上の諸点はいずれも弥生後期巴形銅器の古相を主張する要素として指摘されてきたものと考えることができる。最も類似する資料としては佐賀県唐津市桜馬場遺跡出土品 A と考えることができるが、5 脚という点と棒状鈕、座内面の窪んだ平坦部の存在などは他に例を見ない特異なものである。また巴形銅器の内外面には赤色顔料が付着しており、分析の結果からは、ベンガラであることが判明している。出土地点での観察所見からは、周囲に赤色顔料が見られないことから、付着した顔料は、使用時におけるものであることが想定できよう。

中　　世　中世の遺構は弥生時代～古墳時代の遺物包含層の上から掘削されるもので、方形土坑と水田跡とそれに伴う溝がある。方形土坑は 02Ac 区 3 基、02Ad 区 5 基、02Ag 区 2 基、02Af 区 1 基、02Bc 区 1 基、02Bd 区 4 基、02Bj 区 2 基、02Db 区 2 基、02Dc 区 1 基の計 21 基検出された。また 02Cb 区において谷 B 埋没後の中世後半の水田跡とそれに伴う溝を土層観察にて確認した。（蔭山誠一）

三ヶ所（さんがせ）遺跡

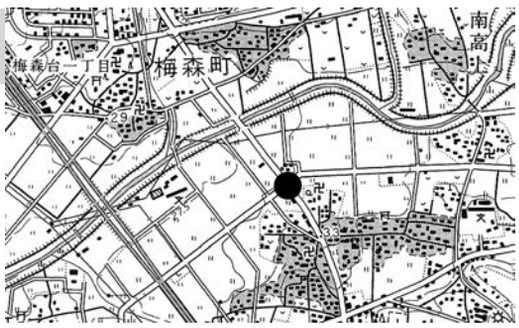
所 在 地　日進市浅田町地内

調査理由　県道岩崎名古屋線建設

調査期間　平成 15 年 2 月

調査面積　370 ㎡

担 当 者　藤岡幹根・永井宏幸・鵜飼雅弘



調査地点（1/2.5 万「平針」）

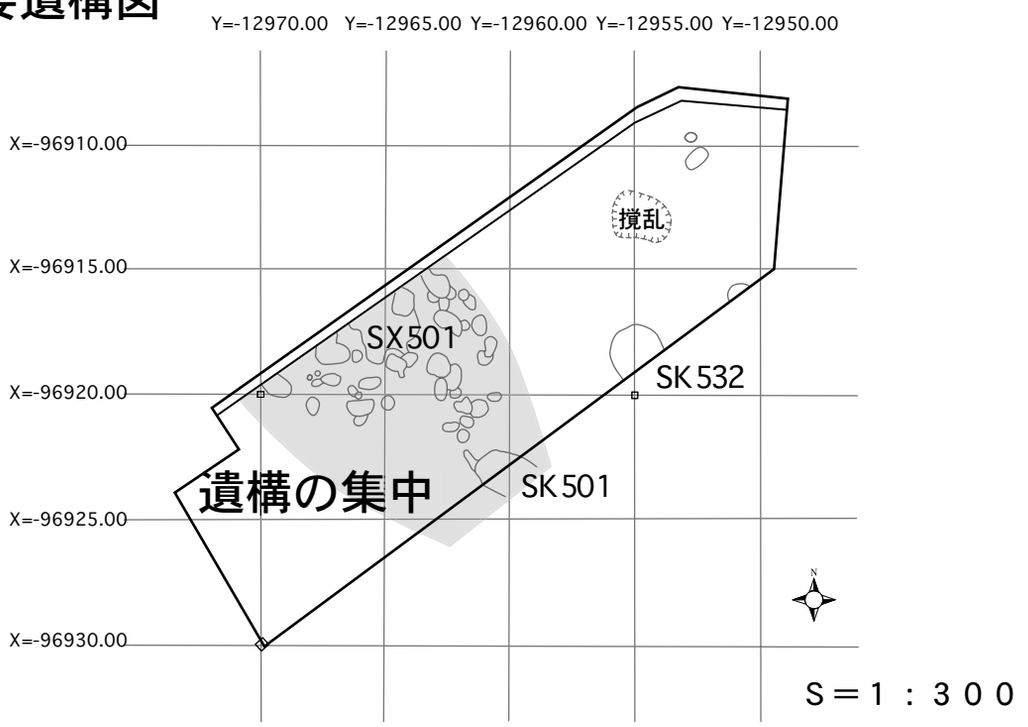
調査の経過　調査は県道岩崎名古屋線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より委託を受けて、平成 15 年 2 月に実施した。調査面積は 370 ㎡である。昨年度の調査では、平安時代中期から中世初頭にかけての溝・土坑を検出した。

立地と環境　三ヶ所遺跡は日進市の西部、浅田町地内に所在する。遺跡は岩崎川・天白川・折戸川の合流地点よりやや下手に位置し、これらの河川によって開削された浅い谷に立地する。調査地点の周辺は水田が卓越する地帯である。現地標高は約 28.0m を測る。

調査の概要　基本層序は現水田耕作土約 0.2m 、旧耕作土約 0.1m の下に明黄褐色砂質シルトが約 0.15m 前後堆積するが、調査区西端では旧耕作土直下に基盤層が乗り、削平を受けているものと思われる。この直下に山茶椀・灰釉陶器・須恵器などの遺物を包含する灰白色砂質シルトが堆積する。また調査区中ほどから東側にかけてほぼ南北方向に緩やかに落ち込み、褐灰色砂質土が約 0.1 ～ 0.15m 堆積する。基盤層は明黄褐色砂質土で、その下層に円・角礫を多く含む明黄褐色砂質土が堆積する。

今回確認された遺構は、平安時代中期を中心に土坑 40 余基、不定型の掘り込み 1 基であり、調査区やや西よりに集中していた。このうち SK501 は下層に炭化物を多く含み、上層の褐灰砂質シルト層からは須恵器甕、甑、灰釉椀など遺物がややまとまって出土した。また SX501 は、昨年度調査地点の掘り込みと同時期のものと考えられる。出土遺物は須恵器・灰釉陶器・山茶椀などである。（鵜飼雅弘）

主要遺構図





遺構検出状況



SK501 出土状況



SX501 完掘状況



遺構掘削風景

上橋下遺跡（かみはしか）

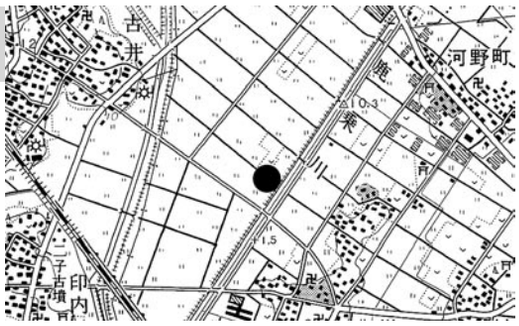
所 在 地　安城市川島町・古井町

調査理由　鹿乗川改修

調査期間　平成 15 年 1 月～3 月

調査面積　600 ㎡

担 当 者　宮腰健司・成瀬友弘



調査地点（1/2.5 万「安城」）

遺跡の環境　上橋下遺跡は、鹿乗川右岸に形成された標高約 8.8 mの沖積低地の微高地上に立地し、西側には古井堤遺跡をはじめとする「古井遺跡群」が所在する。

調査の経過　鹿乗川改修工事に伴う上橋下遺跡の発掘調査は、昨年度に引き続き今回が２年目になり、県建設部河川課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成 15 年 1 月から 3 月にかけて本センターが行った。調査面積は、600 ㎡である。

調査の概要　調査区は昨年度に行った 01 A区の南西側に設定された。調査区の北東側約 1/4 程は、01 A区でも検出されている江戸期以降の自然河道が走っている。

第１面　表土を除去した暗茶褐色面で遺構検出を行った。遺構としては、南東に位置する川島町から北西に位置する古井町に通じる現道に沿って北西ー南東方向に走る６～７条の溝が検出された。また、これらの溝に直交する不定形な溝も検出されている。出土遺物が小片のため時期の決定は難しいが、中世後半から江戸期になると思われる。

第２面　鉄分を多く含む畦畔の高まりが検出される面を第２面目の遺構検出面とした。遺構としては畦畔遺構・水田・溝があり、調査区中央部を北北西ー南南東方向に走る SD01・09 の西側に展開している。溝肩に沿って堤状に走る幅 1.2 ～２m・高さ 30 ～ 40 ㎝の畦畔には、２カ所の途切れ部分が確認されており、導水のための水口であると考えられた。水田は、SD01・09 に平行する一辺８mを測るものや、それとは方向を違え、軸線が北西ー南東方向を向く一辺４m程のものが検出されたが、西に行くほど畦畔・水田の痕跡は不明瞭となり、畦畔の切れ目などの詳細は不明である。

出土遺物は小片のため溝・水田の時期は不明であるが、SD01・09 肩部分より宋銭が９枚まとまって出土しており、古代末から中世前半になると考えられる。

第３面　寄道式期の方形周溝墓２基と不明瞭な大型の落ち込みが２カ所、その他土坑・溝が検出されている。　（宮腰健司）


調査風景


土師器皿出土状態


第 1 面（北東から）


第 1 面（南から）


第 1 面（南西から）


SD01・09（南から）


第 2 面（西から）


第 2 面（南から）


第 1 面（北西から）


畦畔セクション（南西から）

荒山（あらやま）古墳群

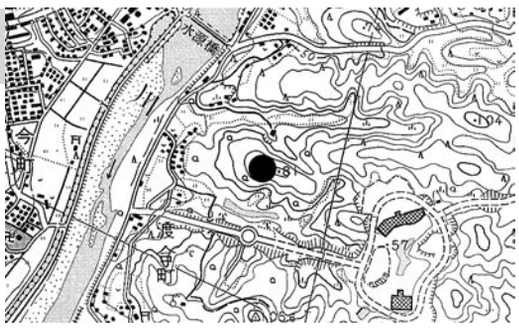
所 在 地　豊田市渡合町

調査理由　第二東海自動車道建設

調査期間　平成 14 年 4 月～ 7 月

調査面積　1,200 ㎡

担 当 者　宮腰健司・小嶋廣也



調査地点（1/2.5 万「豊田南部」）

遺跡の環境　荒山古墳群は、矢作川左岸の標高 80 m前後の舌状に延びる丘陵上に立地し、巴川との合流地点の北西約 1 ㎞に位置する。南に巴川沿いの丘陵には琴平古墳群が、対岸には水源山古墳群や豊田大塚古墳が所在する。

調査の経過　今回の調査は、第二東海自動車道建設に伴い、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて実施したもので、石室の存在が確認されていた 1・2 号墳を中心に、1,200 ㎡の面積を調査した。

調査の概要　**SZ01（1 号墳）**　調査開始時点には、墳丘の墳頂部はすでに無く、石室上部が破壊されて露出している状態で、解体に際して転落したと思われる天井石などの石が、古墳の南西側に散乱していた。また石室内にも大型石を含む多数の石室石材が転落しており、調査はそれらの石と流入していた砂を除去しながら順次進めていった。さらに石室内の堆積土は篩にかけ、微細遺物の検出を行った。

墳丘は流出が激しく、現状では高さ 20 ～ 30 ㎝の盛り土が確認されたのみで、明瞭な版築などは確認できなかったが、墳長は 7 ～ 8 mを測る。石室は地山を掘り込んだ墓壙の中に作られており、石室と墓壙壁との間には、版築状に小礫混じり土が詰められている。検出時の石室の規模は、全長 4.8 m・玄室長 3.6 m・玄室上端幅 0.9 m・玄室下端幅 1.2 m・玄室高 1.6 mを測る。石室は周辺で産出する板状に剥離する花崗岩を用いており、平面形は長方形を、断面形は上部が持ち送りされて、ややアーチ状を呈している。石室の奥壁は、側壁に比べやや大きな石材を用いているが、基本的には同様の形状をしている。羨道部分は、花崗岩を使用した閉塞石が詰められており、石室床面とは約 90 ㎝の大きな段差がある。この石室の開口部側にも奥壁同様にほぼ垂直に立ち上がる石積みがあり、墓壙の間には土が詰められていた。これらの形態から、SZ01 の石室は「竪穴系横口式石室」に分類される。棺は極めて狭小な開口部から石室内に搬入したか、または安置後に開口部部分を構築したと思われ、追葬時には石積みを取り外して棺を搬入している可能性が考えられた。

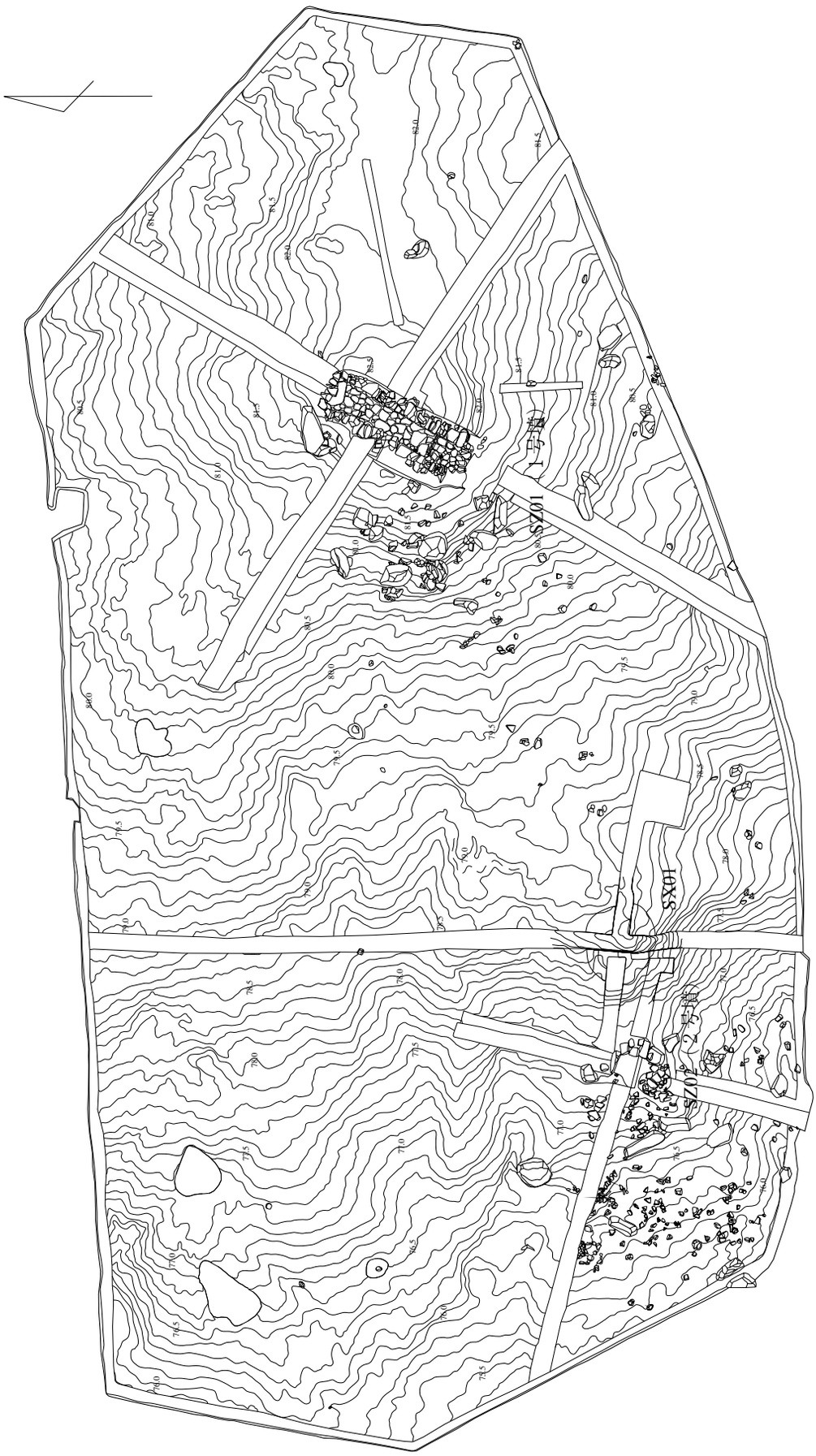
遺物は、石室内のほぼ全域でガラス小玉、羨道部から石室に移る部分で杯蓋、石室南西隅のほぼ床面上でハソウ・杯蓋・大刀、石室内から鉄鏃・耳環が出土している。これらの遺物より、SZ01 の築造時期は 6 世紀中頃を中心とした時期になると考えられる。

SZ02（2 号墳）　調査開始時点にすでに石室全体が露出しており、天井部や石室の左側壁・床面部分にまで破壊が及んでいた。墳丘はほとんど残存しておらず、墳長は不明である。検出時の石室の規模は、全長 1.8 m・玄室推定幅 0.7 mを測る。石材は小型の花崗岩を用いているが、奥壁のみ縦 1.2 m・横 0.7 mを測る大型のものとなっている。

石室内より遺物が出土していないため、築造時期は不明であるが、周辺から出土した須恵器より、7 世紀後半であると推定される。

また、SZ02 の東側には径 2 ～ 3 m、高さ 0.8 mの盛り土 SX01 が検出されている。

（宮腰健司）



荒山古墳群遺構配置図（1：200）



SZ01 石室（南から）



SZ01 石室（北から）


SZ01 石室調査前（西から）


SZ01 石室表土除去状況（南から）


SZ01 石室開口部（北西から）


SZ01 石室開口部半裁（西から）


SZ01 石室基底部・墓壙（南から）


SX01（北東から）


SZ02 石室（南から）


SZ02 石室（西から）

III. 埋蔵文化財講演会の記録

森と人との物語　ー環境考古学のすすめー

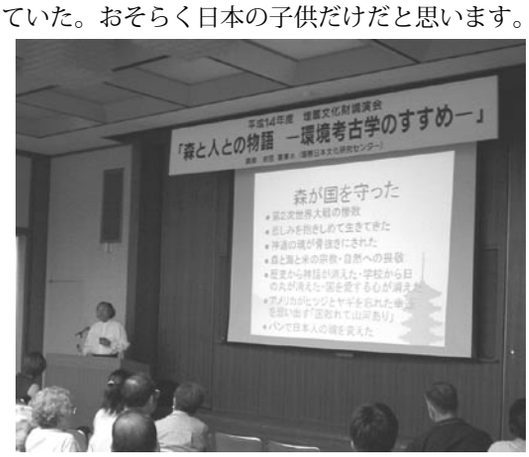
安田喜憲氏（国際日本文化研究センター教授）

1，　復讐の連鎖を断ち切る

今日は「森と人の物語」ということで 1 時間ちょっとお話をさせていただきます。

日本は第二次世界大戦で負けました。原爆で何十万という人々が命を失った。戦争が終わってから 50 年、私たちはしかし、今アメリカを憎いとは思っていない。昨年の 9 月 11 日にニューヨークの貿易センタービルが爆破され、ブッシュ大統領はテレビの演説でこういった。「絶対に許さない。必ずこのテロは撲滅する。仕返しをする。」と。第二次世界大戦で、何十万という日本人がアメリカ人の手によって殺された。けれども、アメリカに対して仕返しをしようなどと思った人はいない。思う力もないまでに我々は戦って疲れ果ててしまったということの方が正しいかもしれない。そして今我々は、アメリカに対して敵意を持っていない。しかし、世界はやられたらやり返すという、力のロジックで動いている。「眼には眼を。歯には歯を。」この力の論理は人類が文明を誕生させて以来ずっと持ちつづけているもの。とりわけ畑作牧畜民という、これからお話します、家畜を飼う人たちの文明に極めて特徴的なものです。肉を食べてミルクを飲んでパンを食べる人、こういう人々の文明は戦闘的なんです。

8 月 6 日の広島の原爆の記念日に小学生が朗読しました。「復讐の連鎖を断ち切りたい」とこう言いました。これはすばらしい言葉です。こんなすばらしい言葉を言える子供は世界にいない、アフガニスタンやアフリカでは幼い子供が銃をとっていた。おそらく日本の子供だけだと思います。



小泉首相の話よりもよほどこの小学生の話の方がよかった（笑）。「復讐の連鎖を断ち切りたい」、「眼には眼を。歯には歯を。」、やられたらやり返すということをいつまでも続けたら、人類は破滅にいくしかない。日本人はすばらしい国民であると私は思いました。しかし、現実の世界はそうじゃない。そういう復讐の連鎖を断ち切りたいと願うような国民は非常に少ない。大半はやられたらやり返すという、「眼には眼を。歯には歯を。」の力の論理で世の中は動いている。我々は戦後 50 年間じっと「悲しみを抱きしめて」生きてきた。

戦争の哲学を提供した国家神道、これは戦後骨抜きになりました。しかし、やっと我々はその神道の哲学の重要性がわかってきた。森を崇拝し、鎮守の森を造るという、その森の宗教の重要性がわかってきた。戦後のアメリカ政策の中でマッカーサーはいいことをやってくれた。農地解放とかいろいろやった。しかし、その中で 1 つ重要なことを忘れた。それは羊やヤギを日本列島に放牧するということを忘れた。だから、日本列島には森が残った。その森が残ったことによって、我々日本人の心の中に森の心、森の文化の伝統が絶えることなく 50 年間維持された。これは大変我々にとって幸いだった。しかし、大きな誤りもあった。例えば、日本人の歴史観がそれである。戦後の 50 年間の日本の考古学や歴史学は、マルクス史観という歴史観に翻弄され、今も翻弄されている。学校で日本の神話を教えない。もっとひどいのは、日本の国家のシンボルである日の丸を掲揚することを、学校で拒否した。復讐の連鎖を断ち切りたいというすばらしい人類史の哲学をいえる一面において、日本の国を愛する気持ちを、戦後の日本の教育は考えなかった。それはマルクス主義という歴史観が、日本の歴史学会を支配した結果生まれたマイナスの産物です。とくに考古学はこのマルクス史観に強く支配された。それが日本の考古学の発展にマイナスになった。戦後日本の知識者階級の左傾化は、日本に大きなマイナスをもたらした。

2，　宗教を見失った日本人

そしてもうひとつ、アメリカは羊やヤギを放牧するのを忘れたのですが、しかし、彼らは神道の魂を骨抜きにして日本人の世界観とりわけ宗教観を葬り去ろうとした。だから今の若い者だけじゃない、戦後の団塊の世代の日本人は自分は無宗教だと思っている。しかし、結婚式は教会であげて、七五三のお祝いは神社であげて、葬式は仏式でやる。宗教をもつかどうかは、人間以外の眼に見えないものを崇拝する心をもつかどうかということと深くかかわっている。眼に見えないものの存在を感じるかどうかという気持ちが、宗教心があるかどうかというもののまず出発である。日本人はまさにそれをもっている。ですから日本人全員が宗教を持っているのです。大木にさえ「しめ縄」を巻いて崇拝している。大木にも神様がいると思っている。そういう国民が無宗教であるはずがない。我々日本人は世界の中でも最も宗教的な人間である。ところが、それを戦後我々はパスポートに書くときに「あなたは何の宗教を信じてますか」と言ったら、「無宗教です」と日本人は言う。ヨーロッパ人はびっくりするわけです。「宗教なくしてよく生きてますね」と言う。そうじゃない、我々は万物の中に命がある、万物の中に神々が宿っていると信じているのです。国際日本文化研究センターの山折哲雄所長がこれを「万物生命教」って名前を付けましたが、まあアニミズムですね。それが基本にあるんです。だから我々日本人ほど宗教心の強い国民はいないんです。

3，　何を食べるかが心に影響する

戦後、アメリカが行った政策の中で、日本人の魂を腑抜けにする上において成功したものが 1 つあります。それは「アメリカはパンで日本人の魂を変えた」んです。戦後、日本は食糧難に直面しました。そのときアメリカは余った小麦粉をどんどん日本にもってきて、学校給食に当てた。「パンを食べろ、パンを食べろ、パンを食べろ。」そして私たちは脱脂粉乳を飲まされた。いつしか私たちは味噌汁や魚や、米を食べなくなった。いまどきの子供は大体そうです。インスタント食品を食べている。これが日本人の魂を腐らした原点であると私は思うんです。

実は人間は何を食べるかということによって、心と体のあり方に大変大きな影響を受ける。人間が何を食べるか、これが心のあり方、体のあり方を既定する。体のあり方を既定するのはわかりますよね。いまどきの子供はどんどん大きくなっている。それだけじゃない。心そしてさらに文明や文化のあり方、そしてさらに自然のあり方にまで、実は人間が何を食べるのかによって大きな影響をもたらすのです。

私たちは伝統的に米と魚を食べ味噌汁を飲んできました。こういった文明のことを「稲作漁撈文明」という。人間は生きるためにタンパク源がどうしてもいりますから、お米を食べる人々は魚を食べます。そして味噌汁を飲む。こういう世界観の根底にあるものが、たとえば神道と仏教です。これに対して、パンと肉を食べ、そしてミルクを飲むこういう文明を「畑作牧畜文明」といいます。この人たちはタンパク源を肉からとります。そしてその宗教はキリスト教です。

私たちは今までは、米と魚を食べ、味噌汁を飲む食生活がダサい、同時に神道もダサい。これに対して、パンを食べ、ミルクを飲み、肉を食べるのがモダンでかっこいい。だから、戦後どんどん朝飯はパン食に変わったわけです。しかし、その何を食べるかということが、人間の心と体だけじゃない文明のあり方、そして、自然のあり方にものすごく大きな影響を与えるのです。

しかし、パンと肉を食べる人も、馬刺しとか鯨は食べない。畑作牧畜民の人々は、馬刺しは食わないんです。なぜ馬の肉は食わないか。それは彼らにとって馬というのは聖なる動物だからです。キリスト教の世界では聖なる動物です。そしてもっとも重要な家畜だったからですね。馬は食わないんです。馬を食べる人間は野蛮人です。鯨も同じですね。今は彼らはこう言うんです。「鯨を食べる人間は野蛮人だ、だから鯨を取るな」と言う。しかし、アメリカ人はかつて鯨を大量に取っ

たわけですね。何のために捕ったか。油を取るためですよ。肉は食べないから全部捨てた。そして油を取るだけのために大量の鯨を殺したわけです。ところが、日本人は鯨を捕りますけれども、皮から骨にいたるまでのこすところなく、全部利用しますね。ところが彼らは勝手ですよ。なぜ鯨は食べちゃいけないのか、イルカは食べちゃいけないのか。それは、聖書に鯨やイルカは聖なる動物であると書かれているからです。それだけの理由です。これを今我々に押し付けているのです。

4，　気候の乾湿の違いが食べ物の違いを生んだ

それでは、なぜこういう食べ物に対する考え方の相違が生まれたのでしょうか。それにはユーラシア大陸の雨の降り方がたいへん大きな意味をもっています。私たちが住んでいる所を、モンスーンアジアといいます。雨がたくさん降るんです。しかも雨は植物の生育に適した夏に中心的に降るんです。ですからここでは、夏作物としてのイネが主要な作物になります。そしてタンパク源は魚を食べます。これに対してユーラシア大陸の西の方、こういったところは、雨が主として冬、降るんです。しかも雨の量が日本の２分の１から５分の１くらいなんです。植物の生育に適さない冬に雨が降りますから、ここでは、冬作物としての大麦や小麦などの冬作物を栽培します。秋に種をまいて、冬にゆっくり成長して、春に収穫を致します。そしてタンパク源としては、周辺の乾燥した草原に住んでいた家畜を取り入れて、そのミルクを飲んで肉を食べるということがこちらで引き起こされたんです。だから稲作漁撈民と畑作牧畜民がどうして生まれたかというと、ユーラシア大陸の雨の降り方の違い、これが大きく２つの人類文明史のあり方を生み出したわけであります。

5，　稲作は馬鹿ではできない

マルクスという人は「アジア的生産様式」という言葉を使った。これはどういうことかと言うと、アジアは未開で野蛮だという代名詞がこの「アジア的生産様式」です。その「アジア的生産様式」の中心をなすのが稲作漁撈です。米を作る人間は未開で野蛮だと戦後の歴史学者はずっと考えていたんです。しかし、小麦を作るのはどうやって作るかと言うと、地中海地域では、冬雨が 11 月頃降り始めると、畑を鋤で起こしてその後に、種籾を撒いて、それでもう後は収穫まで何もしないんです。雑草取る必要もないんです。なぜ雑草を取る必要がないかと言うと、冬は雑草が生長しないからです。収穫の季節まで何もしなくてもいい。これは知識のない奴隷でもできるんです。ところが、稲作は馬鹿ではできないですよ。本日は、お米を作った経験のある方がたくさんいらっしゃると思いますから、言うまでもありませんが、お米がどうやってできるかを知らない子供もいますから、ちょっと言います。お米はまず、種籾を選別しなくてはならない。苗代を作って、苗床を造って、そして田植えをして、そして５月から６月には、水を時間単位で変えなくてはならない。それだけじゃない。田の草を取らなくてはならない。これはもう、生産意欲のない人間では絶対できないんです。馬鹿じゃできないんですよ。そしてやっと収穫ができるんですね。これは麦作農業よりもはるかに複雑な農業のやり方です。そういう社会がアジア的生産様式と呼ばれて、未開で野蛮の生産様式の代名詞として使われてきたんです。戦後 50 年間の歴史学者と考古学者はそれを世界一すばらしい学説だとみなしてきた。だから、稲作を行ったような人間が文明というものを持つはずがないと思っていたわけです。麦作・畑作牧畜民の人々はこれはすごい文明を持っている。メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、黄河文明、これは全部畑作牧畜民の人々が作った文明です。しかし、稲作はこれは「ウンコ臭い」のがいいとこだ（笑）。僕はアメリカのワシントン大学の教授が日本にきたときに、日本を蔑視してこういう事を言ったのを忘れることができません。「日本は stinky だ」と、ウンコ臭いということですよ。つまりウンコ臭いということはどう言うことか。これは、日本が人間の排泄物を循環的に利用

しているということです。その臭いは循環社会のシンボルです（笑）。日本の農村は人間の排泄物を循環的に利用する極めて循環的な社会。だからウンコ臭いんです。そういう社会を我々は恥ずかしいと思ってきた。ところが実はそうじゃない。稲作漁撈社会はすばらしい自然にやさしい農業を維持して、そして 21 世紀の地球環境問題の世紀に、際めて大きな役割を果たす農業ということが分かってきた。そしてその稲作農業をやった人々が文明というものをもっていたんです。

6，　風土的過去を大切にする

もうひとつ戦後の日本の教育で大きな過ちがあった。子供たち、いや皆さんが、日本という国の風土的・歴史的な過去を背負って生まれてきた存在であるということを教えなかった。学校の教育で風土という言葉を使うと封建的だ、反動的だ、右翼だという風によく言われた。風土的過去、その風土的な過去から自由にならなくてはいけないと戦後の日本の教育は教えた。日本人が背負ってきた歴史的・風土的な過去は、全くマイナスなものだ、それを捨て去って、そして新しい未来へと羽ばたかなくてはならないというのが戦後日本の教育だった。風土的過去というのは封建的・反動的なイメージと重なっている。ところが我々は縄文人からの DNA を背負って生きているんです。我々の背中には何千年という縄文時代以来の DNA が、インプットされているのです。それが風土的な過去です。そんなもの断ち切ろうと思っても断ち切れない。ところが戦後の日本の教育は、日本人はそういう風土的過去のゆえに誤った方向に導かれたんだ、それを断ち切ろう、断ち切ろうと教えてきた。その一例が日の丸です。日の丸というのは太陽です、太陽は稲作漁撈民のシンボルです。稲作漁撈民は太陽を最大の神様として崇拝してきた。それをシンボル化した国旗を、学校教育で掲揚するということを否定したのです。そんな国民は世界広しといえどもいない。復讐の連鎖を断ち切ると同時に、やっぱり自分たちの風土的な過去・歴史的過去を大事にしなくてはならない。それを学校で教えなければいけないのにもかかわらず、歴史教育の中で神話そのものが取りあげられることさえなかった。日本の神話がなぜ学校教育の中で取り上げられないのか。むしろ神話がなくて困っている国民がいる。例えばアメリカ。アングロサクソンのアメリカ。彼らは神話がないんです。神話がないから何か神話に変わるものを、何かを造りたくて仕方ないんです。アメリカインディアンの人々を追放して作りあげた国家だから、国家のルーツにかかわる建国の神話がない。ところが我々は神話を持っている。日本国家のルーツ、日本国民のルーツとしての神話を持っている。なぜそれを学校できちんと教えないのか。私には理解できないんです。

7，　日本文明の原点は縄文にある

こう言う視点から日本の文明を論じてみたいと思います。日本人は森と海の宗教をずっと持ちつづけてきた森の民、海の民であり、そしてその後、弥生時代がやってきて稲作漁撈の民となった。その原点はどこにあるか。森の民、海の民の原点は縄文にあります。

それは縄文の土偶に見事に表現されています。私の専門には「環境考古学」というタイトルをつけていますが、純粋の考古学者ではありません。最近はインターネットが盛んですからね、考古学者の中には陰湿な方がいらっしゃって、考古学者同士でインターネットをやりあってるんですよ。たまたま僕はそれを観て、なんて書いてあるか。光栄だったですけど、「安田はトンデモ系だ」、とんでもない考古学者だと書いてあるんです（笑）。トンデモ系の代表だと書いてあるんです。僕は大変うれしかったんですけれども、今の考古学者にトンデモ系と言われる事はうれしかったです。今の考古学者自身がトンデモ系だからね。その彼らからトンデモ系と言われる僕はまともということですよ（笑）。

その縄文時代は女性中心の社会。なぜ女性中心の社会か、それはこの土偶に示されているように、大半の土偶が女性です。縄文時代というのは、

目と強調されているのは下腹部です。これは共に命の誕生と死に関わるところです。何でこの目をこんなに大きくしたか。マルクス史観、唯物史観に毒された考古学者は、これをエスキモーの雪メガネと言ったんです。そんなアホなことをよく言うなと思いますよ。この巨大な目はそんな生易しいものではありません。なぜ彼らがこんな大きな目を造ったのか。それは、目というのは亡くなった時にお医者さんが「お亡くなりになりました」というのは、瞳孔の拡散をみることで眼の力がなくなったことで最近までは生死を判別していたんです。縄文人もそのことを知っていたんですよ。人間が死ぬと目の力がなくなる。だからとにかく目の力を復活すれば命が生まれかわれる。そして土偶は大半が妊娠している妊婦です。そして彼らは子供が生まれる下腹部に異常な集中を示しています。ここには見せておりませんが、割れ目もちゃんと入っております。これパンツはいているじゃないかと、みんな言うくらいに丁寧に下腹部を造形しているんです。そして髪の毛は蛇ですね。これも全部僕が言ったこと。日本の考古学者は誰もまだ信用しません。盛り上がった髪の毛、なぜ蛇か。それは、蛇が脱皮をするということから、命が生まれ変わるシンボルだということです。それが 1 つの重要なことです。ですからこの土偶には、命の誕生と死というものがその中にシンボライズされている。

なぜ縄文人があれほどに縄文にこだわったか。縄文土器の縄文、これは縄でしょ。縄を土器全面に造形しているわけです。何で三角や四角でいけなくて、縄なのか。しめ縄というのは実は二匹の雄と雌の蛇が交尾している様をあらわしたものなんです。雄と雌の蛇が交尾するときには、しめ縄のように絡まる。しかもその交尾の時間が、半日以上に及ぶわけです。半日以上雄と雌の蛇が愛を交わす、それはたくさん子供が生まれるという豊穣のシンボルなんです。だから我々は、そのしめ縄を神社で聖なるところに飾るわけです。

亀ヶ岡式の遮光器土偶の髪の毛が盛り上がっている。なぜ盛り上がっているのか。それは蛇を意味しているのです。そして下腹部を入念に造形している。三内丸山遺跡から出た板状土偶は、パンツをはいてるといわれるくらい丹念に下腹部を造形している。ところが、おっぱいは小さいのです。あれだけ命が生まれるところには人々が注意払っているにも関わらず、子供を育て、ミルクを飲ませるおっぱいが小さいのです。申し訳程度にちょこんとついているだけです。

縄文人はおっぱいには注目はしないんですけれども、下腹部には異常な執着をしているのです。こういう話をするから僕はみんなからトンデモ系といわれるのだと思いますけどね（笑）。まあ私の妄想ですね。皆さんも妄想してください。浮世絵を思い出してください。浮世絵でどこが強調されてますか。男と女が絡んでいる時に最も強調されているところはあの下腹部でしょ。おっぱいを強調したような浮世絵はめずらしい。それほどまでに、日本人はなぜか縄文時代から江戸時代、現代もそうですが、下腹部、命を生み出すところに異常な執着を持っています。こういう話をするとそんなことはない、全世界共通だというでしょ。次のものをお見せします。

8，デカパイとペチャパイの大地母神

畑作牧畜民の人が作った大地母神像は、ものすごく大きなおっぱいを持っています。これを申し訳ないですが、デカパイと言わせてください（笑）。いろいろ考えたんです。デカパイというのはセクハラにあたるんじゃないかと？しかし、巨乳とか大きなお乳とか、いうのは言いにくいので、とりあえず、デカパイとペチャパイで統一させていただきたいんです。西アジアのトルコチャタルヒュユク遺跡の 8000 年前の大地母神。シリアのマリ遺跡の 7000 年前の大地母神ですがもっとも強調されているところが、おっぱいなのです。しかし、見てください。下腹部は申し訳程度か、全く造形されていない。どうしてか。ここに、人間が何を食べるかによっての心のもち方が相違することが示されています。このチャタルヒュユクやシリアのマリ遺跡のある畑作牧畜民の社会では、生きるために家畜を飼って、そのミルクを飲むというこ

とが必要なんです。これが最も重要な生き残り戦略なんです。そのミルクを飲むために、ミルクを供給するその乳房が最も重要なものとして強調されているんです。乾燥地帯では水が無くなったときに命を守るのはお母さんのお乳でね。これに対して縄文時代には家畜はいませんでした。ですから、家畜のミルクを飲むということがまずありませんでした。しかも日本列島は水に恵まれた「森と水の国」ですから、水はいくらでもありました。だから干ばつに見舞われて水がなくなるということはないんです。それよりは、命が生まれる下腹部こそが重要だったということです。こういう話は日本の考古学者は絶対しませんよ。だから多分、ここで聞いておられる愛知県の埋蔵文化財センターの人は、しまったなあこんな人呼ぶんじゃなかったと思っていらっしゃるんじゃないかと思うんですけど（笑）。

9，　高精度の環境史の復元

しかし、僕はそういう馬鹿な研究ばかりしているわけではありません。まあどちらかというとそちらの方を一生懸命やっておりますけれども（笑）、私の本業は湖にボーリングを致しまして、そして土を取る、土を取りますと、湖底の堆積物の中に縞々が見つかった。これはアジアでは初めて僕たちが見つけた。これは実は年輪と同じものであることがわかった。

年縞というのですが、白い部分が珪藻という藻が繁殖して春から夏にかけてできたもので、黒い部分が秋から冬にかけて湖の粘土鉱物などが静かに堆積してできたものです。この白黒の層がセットになりまして年輪と同じ一年を形成します。それが湖の底に 10 万年近く堆積していることがわかりました。それを分析すると、まず最初に、確実な時間軸が得られるということです。今までの年代というのは放射性炭素同位体という方法で測ったものです。放射性の炭素同位体というのは ± 100 年とか 200 年という統計上の誤差がつきます。そうすると、± 100 年という誤差がつきますと、例えば歴史と気候の関係を調べようとするときに、100 年という誤差がついたら、歴史は数年の単位で変わりますから、その原因が気候変動だったというためには、まさにその事件が起こった時代の環境を復元しなければ、説得力がないわけです。ところが、放射性炭素同位体で測った年代というのはどうしても ± 100 年とか 200 年という誤差がつきますから、多分そうだろうという推定の域を出ることができなかった。ところがこの、年縞というものを発見して、細かく分析することによって、例えば上から数えていって 1000 本目、これは 1000 年前に限りなく近いわけです。10000 本目、10000 年前に限りなく近い。ということは、過去の環境を今や数年の単位で復元できるようになったということです。その年縞の中には、花粉の化石であるとか、珪藻の化石、そういうものが含まれています。それで、お手元の資料、これは私が作ったものではありません。愛知県の埋文センターの人がわざわざ作ってくださった年縞、年層というようなものを使って過去の気候変動を復元した結果です。それをみると、グリーンランドでは氷の中に 1 年に 1 本ずつできた縞々があるんですけれども、その年層の中の酸素の同位体比というものを用いて復元した、過去の気温の変動が示されています。気候というのは千年、万年の単位でゆっくり変わると思っていた。ところが、グリーンランドの平均気温が今から約 14800 年前に、50 年の間に一気に 7 度から 8 度も上がることとがわかった。50 年って、僕は 55 歳ですから僕が生きている間に、生まれてから死ぬまでの間に、7 度も 8 度も年平均気温が上がったらどういうことになりますか。そういうことが



過去に起こっていたことが分かったんです。

これほど激しく地球の気候は変動したわけです。とくに温暖化のスピードが異常に早いということがわかってきた。今から約 14800 年程前にベーリングという大きな温暖期が訪れます。この温暖期のときに西アジアでは森が拡大するんです。そして、そこで人々が定住革命を成し遂げるんです。今まで狩猟採集で移動していた生活をやめて定着した集落を営むようになる。そして、その森の中で、植物を利用する技術をマスターするんです。ところがその温暖な時代が今から約 12800 年前に終わるんです。終わってヤンガー・ドリアスという寒の戻りが起こるんです。この寒の戻りのときに、麦作農業が誕生するということがわかってまいりました。これは過去 2000 年間の気温の変動と民族移動を対比して示したものです。例えば、ゲルマン民族の大移動、モンゴルの大移動。こういう民族の大移動というのはすべて寒冷期に引き起こされていることもわかった。

マヤ文明が崩壊したのは 922 年を中心とする激しい乾燥期。気候が激しく乾燥化したことによってマヤ文明が崩壊したということもわかってきたんです。この 922 年に、マヤ文明が崩壊する頃にいったい何が起こるかと言うと、渤海という国が崩壊しているんです。半世界的に、気候変動が文明の崩壊をもたらしているということもわかってきたのです。

邪馬台国の倭国大乱というのが引き起こされた時代は、いったいどういう時代であったかというと、まさに気候の寒冷期にあたることがわかります。冷夏と豪雪が引き起こされた時代にあたっているわけです。倭国大乱が引き起こされた時代、中国では黄巾の乱という大動乱が起こるんです。これは明らかに気候が悪化して中国の歴史が大きく揺さぶられ、それが日本に影響して倭国大乱を引き起こしたというようなこともわかるようになってきました。これはほんの一例ですけども、こういう風に過去の気候の変動の復元が今や極めて精緻になっている。ですからそれをもって歴史を解釈するということがかなり進展してきたわけです。

10,　高精度の自然改変の歴史の復元

人間が何を食べるかということによって、心と体の在り方だけではない、自然に対するインパクトが大きく違う、ということを申し上げたいと思います。パンを食べ、肉を食べ、ミルクを飲む人々は森を徹底的に破壊するという性格をもっているのです。小麦粉を粉にして、パンを焼くためには燃料が要る。パンを食べるということは、大量の燃料を消費するということと同じです。我々、ご飯を炊くときはご飯を粒状にして炊きますね。米は粒状にして食べます。これはお湯を下からグツグツグツと煮ればいいことです。その火力に比べて、パン焼き窯の火力はすごいんです。パンは焼かないと食べれません。日本人はパンを焼かないで、麦こがしってありますね。私たち食糧難のとき、麦をひいて、砂糖を混ぜて、水で練って食べたことありますけど。ぜんぜん燃料使いません。しかし、パンは焼かなくてはならない。焼くということは燃料を使うということです。そして同時に羊やヤギを飼う、魚を食べないで羊やヤギを飼うということは、これは森を破壊するということになる。森を置いておいても何の役にもならない。しかし、羊やヤギを飼えば、肉は食べれるし、ミルクは飲める。そうすると森に羊やヤギを放牧して森を破壊するというこういう生業を畑作牧畜民の人々はとるわけです。

これに対して、魚を食って、米を食べる人間は森を守るんです。魚をたくさんとるためには魚つき林といって森がなければならないでしょ。しかし畑作牧畜民の人々にとっては森は無用の長物です。そこを牧草地に変えたほうが生産性は上がるわけです。こうして徹底的に森が破壊されていきました。

これはシリアのガーブバレイの花粉分析の結果ですけれども、今から約 10000 年前にすでに激しい森の破壊が行われていることがわかります。それは羊やヤギの放牧がはじまる時代とぴったりと対応しています。

そしてこの現在の肥沃な三日月地帯の風景で

す。木一本ない荒野になっています。これが畑作牧畜民が果たした人類に対する罪悪ですね。原罪と言います。肉を食べ、ミルクを飲むこういう人々の持った原罪、それは森を食いつぶしたことにあります。これはアダムとイブの絵ですね。いろんなアダムとイブの絵がありますが、私はこの絵が一番好きです。実はこの女性のなまめかしいスタイル、デカパイではありません（笑）。このアダムとイブは楽園を追放されるのですけれど、なぜ楽園を追放されたのか。エデンの園というのは、森ですね。森を追放されるということです。アダムとイブがなぜ追放されたのか。それは彼らが文明の原点に森を破壊し尽くすという性格を持っている、ということをここに見事に示しているわけです。

キリスト教は羊を崇拝します。この羊が先ほど申し上げたように問題なのです。羊を食べるということ、羊の毛皮を利用するということ、これが森を破壊するということになるのです。羊が若芽を全部食べてしまって、二度と森は再生しない。ヤギはもっとひどいんです。根っこまで食べてしまうんです。

イエスは言った。蜜と乳のあふれる花園がユートピアである。なぜイエスは森がユートピアであるとおっしゃらなかったのかなあと考えたことがある。その原因がわかりました。すでにイエスがお生まれになったときには、もうイスラエルの森はほとんど破壊されていた。もう西アジアの森は壊滅状態だった。だからイエスはこの豊かな森を見ることがなかったのです。もしイエスが豊かな森を見ておられたら、これは森こそがユートピアであるとおっしゃったでしょう。しかしイエスがお生まれになったときには、地中海は森を破壊した後に生まれる二次植生としての花園におおわれていたんです。

これがトルコのハサン山。聖なる山なんですけど、これも実はデカパイ山なんです。この西アジアの畑作牧畜民の人々にとって聖なる山というのは必ず２つあるんです。日本の聖なる山、例えば富士山、奈良県の三輪山、これはみんな独立峰です。岩木山でもそう、独立峰です。これはなぜかと言うと、蛇がとぐろを巻いた姿をシンボルライズして、聖なるものとして崇拝しているんです。だから富士山にしても、岩木山にしても、三輪山にしても独立峰なんですが、ところが畑作牧畜民の社会では二つの峰のある山、これが聖なる山なんです。つまりこれは、デカパイを示すんです（笑）。

そして彼らは森を破壊した後、海をも砂漠に変えました。地中海が海の砂漠になってしまった。なぜ地中海には魚がいないか。それは森がなくなったからです。地中海の海岸には海藻ひとつ落ちていない。真っ白い砂を見て貝だと思ったんです。違うんです。全部石です。石灰岩の結晶のいい方解石なんです。地中海には貝殻なんて１つも落ちていません。つまり、パンを食べミルクを飲み肉を食べる人々とは森を破壊して大地を砂漠に変えると共に、海をも死の砂漠に変えたんです。だからこんなところで泳いだって健康によくないですよ。人間以外の命がない。どこを見たって砂しかない。海藻ひとつないんです。そんなところでトドのように甲羅干しして。何がこれが幸せなのかと思いました（笑）。

11，　人類文明史の２類型区分

人類の文明史には森の民と家畜の民の２つがあるということです。これは 15 世紀の段階の、世界の森の民と家畜の民の分布を示したものですが、大体この西アジアで誕生した、この畑作牧畜民の文明は 15 世紀の段階でユーラシア大陸の大半を支配する。しかし、環太平洋とアフリカの熱帯林があるところ、実はここはミルクの香りとは無縁のとこだった。私たちが調査しております長江文明は、ミルクのにおいとは全く無縁です。先ほど申し上げたマヤ文明、あるいはインカ文明。ここにはリャマとかアルパカがいるじゃないか。でも彼らは、バターやチーズを作らないんです。これも実はミルクの香りのしない文明なんです。

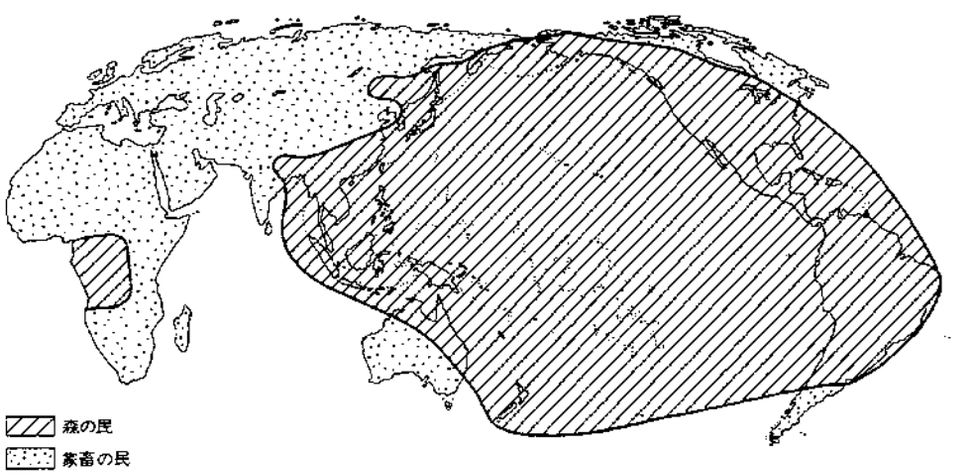
しかし、これらの文明は 15 世紀以降の地理上の大発見に於いて徹底的に侵略破壊をされてしまうんですね。そして日本の文明も森の民の文明で

あると僕はいっています。ミルクと無縁なのです。こう言うところの人々は何が好きかって言うと、それは餅が好きなんです。このあいだドイツの友達が来て福井県の名物は何だといいましたので、羽二重餅だといいました。羽二重餅買ってって、ドイツに帰りました。一ヶ月くらい経って私がドイツに行った。羽二重餅は食べれないと机の上においてあった。口の中へ入れたらネバネバして絶対喉を通らないと言うのです。つまり、パンを食べてミルクを飲んで、肉を食べる畑作牧畜民にとっては、餅が食えないんですよ。我々にとっては餅が食えるってあたりまえでしょ。ダラーとしたあの納豆。あんなものは見ただけで気持ち悪くて彼らはよう食べません。ネバネバしたものが彼らは食えないんです。これは我々稲作漁撈民が元々ミルクをも飲まなかったのと同じです。こちらがミルク文明とすれば、こちらは餅文明だといってもいいくらいですね。違いがありますよ。それで、その餅文明の代表が稲作漁撈文明です。稲作漁撈文明の原点は長江文明にあるのです。

その長江文明のお話しをしようと思いましたが時間がまいりましたので、このへんで終わります。

人類文明史は、人間が何を食べるかによって大きく２つの文明に類型できる。一つはパンを食べ、ミルクを飲み肉を食べる畑作牧畜文明で、もう一つの代表が米を食べ、味噌汁を飲み魚を食べる稲作漁撈文明です。前者の畑作牧畜文明は森を徹底的に破壊し、大地を海を砂漠に変えました。後者の稲作漁撈文明は森を守り水を守り自然にやさしいライフスタイルをとってきました。

人間が何を食べるかということが、人間の体のみでなく、心のあり方、さらには文明や文化のあり方、そして自然破壊のあり方にまで大きな影響をおよぼしているというのが本日の結論です。ご静聴ありがとうございました（拍手）。



動物文明圏と植物文明圏（地理上の発見以前の 15 世紀頃をおおよそのめやすとする）

（安田喜憲『日本よ、森の環境国家たれ』 中公叢書　2002）

IV. 発掘調査技術等研修会の記録

発掘調査技術等研修会

題目『新しい石器研究法』　　参加者：市町村埋蔵文化財担当職員等計

11月21日(木)　於　愛知県文化財調査センター　2階研修室		
講　演	「石器研究でどこまで分かるか」	愛知学院大学教授　白石浩之氏
講義１	「石器の観察・記録・報告の留意点、分類への視座」	長野県埋蔵文化財センター　町田勝則氏
講義２	「剥片剥離技術の検討および石器実測図の評価」	(株）アルカ　角張淳一氏
講義３	「石器の使用痕」	愛知県教育委員会　原田　幹氏

11月22日(金)　於　愛知県文化財調査センター　2階研修室		
石器製作実習	「文化としての石器作り」	国士舘大学教授　大沼克彦氏

石器展示遺跡		
	後期旧石器時代	上品野遺跡(瀬戸市)・駒場遺跡(豊川市)
	縄文時代	品野西遺跡(瀬戸市)・八王子遺跡(瀬戸市)・内田町遺跡(瀬戸市)・牛牧遺跡(名古屋市)
	弥生時代	猫島遺跡(一宮市)

大沼氏の石器製作実習に関しは、石材として黒曜石・下呂石・サヌカイトを使用した。
特にサヌカイト入手に関しては、一宮市博物館の久保禎子氏のご協力を得た。

1. 今年度研修会の目的

研修会は埋蔵文化財担当者の質的向上および情報交換の場の提供を目的としている。今年度は、特に石器の整理・報告・研究に視点を当て、基礎的な事柄から最近の研究動向まで知識の共有を図っていきたいと考えた。石器研究者のみならず、石器研究を専門にしていない者でも、石器への認識を深めていく一助となりうる場を作ることが大きな目標であった。

2. 研修会の成果

講演・講義・実習に関して言えば、抽象的な表現ではあるが、石器に対する視点がより深まったことにあろう。白石氏には、発掘調査時の留意点、町田・角張・原田各氏には石器の報告・観察・分析の方向性を述べて頂いた。大沼氏の石器製作実習では、実際の剥離を経験することで、出土石器の剥離への理解が大変深まった。また、石器製作実習が生涯学習行事の一環として、活用できる視点も提示された。

3. 講演および講義内容

今回の研修会は、一日目の講義・講演と、二日目の実習との、二部構成であった。各内容の概略を講師ごとに報告する。白石氏・原田氏のテキストはその概要を、それ以外は当日配布資料の内容をそのまま掲載する。なお、掲載内容に関しては、担当の川添が素案を作成し、その後各講師の方々に校正をお願いした。この掲載に関する誤りなどは、すべて川添の責任である。



講演　白石浩之氏　「石器研究でどこまで分かるか」(概要を掲載)

a. 講演　白石浩之氏　「石器研究でどこまで分かるか」(概要)

1.石器のもつ意味

「新らしい石器研究法」という事で、石器研究でどこまで分かるかということを述べるが、その前に、石器の持つ意味というのは何なのかという事を、まずは認識しておかなくてはならない。

(1)個々の石器から

石器を見ていくと、「形」即ち「形態」というものがある。「形態」の持つ意味は、やはり「形式」とか「機能」という様なことに結びついてくる。「形式」を考えると、それらがどういう風に製作されたかという観点でも考慮しなくてはならない。製作の手法と一言で言っても、「押圧剥離」、あるいはハンマーで打ち下ろすような剥離、または「直接剥離」あるいは「間接剥離」といった、さまざまな製作手法がある。

それと同時に、「石材」の吟味も十分しなければいけない。石器製作者は、石材に対して、長い伝統あるいは経験というものをもって、それらの石器を巧みに、あるいは効率的に製作しようとすることを伝統的に会得していたと考えられるからである。石材の入手に関して、遺跡によってはいわば「在地の石材」と「遠隔地の石材」という大きく見れば二種の石材がもたらされている場合がある。

「型式」というのは、形状下における「型式」と捉えられるため、当然「機能差」や「用途差」の反映が考えられる。一方、「機能差」ということで言えば、例えば「使用痕」という方向からのアプローチもある。使用痕には、「折れ」・「潰れ」・「線状痕」など肉眼で直接確認できるものと、顕微鏡的な観察によってはじめて確認できるものとがある。使用痕分析による機能復元は、そのような遺物の観察と併行して、民族的な事例や、実験データーによる提示された仮設との比較検討によりはじめて可能となる。

(2)群としての石器の検討

「石器」は幾つかの組み合わせがあることを前提としている。例えば一つの打製石斧では生活不可能であり、それには狩猟具あるいは生活する用具というものなど、そういう組合せというものから成り立っているという。しかし、「有舌尖頭器」あるいは「有茎尖頭器」といわれている縄文時代草創期の尖頭器に見られるように、それらが単一で出てくる場合がある。その出土状況については、当該地が狩猟地であり、廃棄をされたのかどうかという問題も含めて考えなければならないであろう。

単独資料で分布しているというのではなくて、複数の石器の中に単一の石器が出土する場合に注目しなければならない。例えば、いわゆる後期旧石器時代最初頭段階(註1)の「局部磨製石斧」は、それらが汎く出土する遺跡もあれば、遺跡によっては一点しか出てこないとかという場合もある。これの評価に関しては後述する。

(3)母岩ごとの個体識別の重要性

石器の製作・石材に関連して、さらに考慮しなくてはならないことがある。例えばチャートならチャートの一群が汎く出土したとしても、それらを復元すると幾つかの「母岩」に分かれ、各母岩から分割されたそれぞれの「核」から細かく石器が製作されているという、二つの時間的な差異、認識上の差異というかたちとして考えておかなければいけない。したがって、石器研究の上では「個体別資料」を細かく検討し、「母岩」の復元を通し、初めて石材の研究、石材の流入の検討が可能となり、重要な意味を持ってくるものと思われる。

2.石器の分布について

調査時において、石器がどのような層位から出てきたのかということは非常に重要である。土器にしても石器にしても、幾つかの主体的な層があってそれらが上下にかなり拡散をするというのが通例であり、単一の層から出てくるということはまず稀である。この前の藤本強一氏による捏造事件では、一つの層理面からしか石器が出てこないということに対し、当初から「おかしいな」という視点はあったのだが、それは東北地方のいわゆる前期旧石器文化層の特徴であると言われ、そのような架空の考え方を認識させられた。しかし、実際上後期旧石器を掘ってみると、やはり石器は同一レベルで一線上に出土することはありえない。したがって石器はどの範囲のところに主体的な層があるのかということを、確認しなければならない。

例えば愛知県酒呑ジュリンナ遺跡は大参義一氏によって、一次調査の報告では、出土層位をも含めて、神子柴・長者久保系石器群と有舌尖頭器・石鏃・土器の一群に区別され、編年差として指摘されたが、二次調査の段階では両者を含めて、酒呑式と捉え直している。



石器の出土には、霜の融解作用、氷河期の永久凍土の問題、雨などでも影響され、かなり浮き沈みがみられる。したがって、いわゆる「原位置」という形で、その位置にそのままの状況で当初からあったとは、到底考えられない。このような点からも発見石器の出土位置を基本とするので、十分に観察をしていかなければならないであろう。

3.発掘調査時に考慮すべきこと

(1)その石器自身の経歴を考慮【レジメP3左図】

石器の一生は、①「石材の採取」から始まり、②「石器の製作」、③「使用」、そして④「廃棄」という、四つの過程を経ていくと考えられる。一方、遺跡で出土した石器は、いわば「静的」に語られてまい、上記のような「動き」というものが把握されてないことが多いと思われる。これらの道具(石器)が、遺跡から検出された場合に、どうしてこの場に石器が存在するのか、どうしてこのような石材を用いているのか、使われているのか、ということを考えてみる必要性があるだろう。

4.遺物の分布から見た、「原産地遺跡」と「消費地遺跡」

先に見た石材との関連から、「原産地遺跡」と、「消費地遺跡」というものが浮かび上がってくる。仮に「消費地遺跡」を調査している場合には、それらが「原産地遺跡」とどの様な関係があったのかということを、考慮しなくてはならない。ひとつ分布という視点から見ていく必要性があるであろう。

(1)「消費地遺跡」の事例

事例1　埼玉県打越遺跡第3地点「樋状剥離尖頭器」の出土分布【レジメP4中上図】

出土分布を見ると、他の石器がかなり中心部にあるのに対し、樋状剥離尖頭器が一点のみ集中から外れた所、つまり縁辺部から出土している。他の遺跡例でもこの樋状剥離尖頭器は、ナイフ形石器が多い中に、一点ないしは二点といったような状況で入り込んでる場合が多く見られ、また樋状剥離尖頭器の原形から削片を剥がして、完成した製品を消費地遺跡に搬出したために、削片を中心に出土する遺跡も認められる。したがって、これらの樋状剥離尖頭器が「原産地遺跡」から「中継地遺跡」というものを経て、「消費地遺跡」へと、分配されたのではないかと考えられる。

事例2　熊本県狸谷遺跡第Ⅱ文化層「角錐状石器」の出土状況【レジメP4左下図】

この石器の出土状況も、やはり集中地点から外れた位置にある。「樋状剥離尖頭器」同様、これも消費地としての状況が見られるものと考えられる。

事例3　東京都下里本邑遺跡Ⅸ文化層「局部磨製石斧」の出土状況【レジメP4右下図】

この遺跡でも、局部磨製石斧が一点の出土状況であり、遺物集中地点の外側に分布する。搬入品として石器が製作されたもの(製品)が入り

(註1)後期旧石器時代初頭期ではなくて、中期旧石器終末～後期旧石器初頭期の移行期と考えているが、通説に従って、ここでは後期旧石器時代初頭としておく。

込んでくる場合、石器出土分布の外縁部に分布する可能性が高い点が注目される。
これとは対照的に、長野県の日向林遺跡では、かなり大量の蛇紋岩製の石斧が遺物集中地点の中央近くに分布したのである。それらが野尻湖の周辺ということもあり、もしかすると大型動物を共同で捕獲する場として、かなり多量の原石ないし荒割りした局部磨製石斧を持ち込んだのであろう。そのために、この様な局部磨製の斧が使用されたのではないかとも思われる。

以上遺物の出土分布状況により、これらの事例は、他の地域で作られて消費地に分配された石器であり、「搬入品」と考えることができる。事例1・2の、「樋状剥離尖頭器」・「角錐状石器」など狩猟具のみならず、事例3における「局部磨製石斧」の加工具にもこのような事例が見られることが注目される。

(2)「原産地遺跡」の事例
事例4　大分県騎形地点遺跡「角錐状石器」【レジメP4左上図　1・3・5・6・9】
この遺跡の「角錐状石器」は、遺跡付近の大野川の河床礫のホルンフェルスを石材としている例が非常に多く、「角錐状石器」の「原産地遺跡」と考えられる。分布を見ると、ブロック、あるいは遺物集中地点の中央に分布してる例が多く、むしろ石器群の主体部を構成している。

以上、一見、一遺跡内で同じ石材による資料がたくさんある場合でも、ほかの母岩とは異なる単一母岩で存在することが、「消費地遺跡」における「搬入品」のあり方として重要である。したがって、同じ母岩から複数剥がされている、いわゆる「個体別資料」から成っている場合では、この様な分布のあり方を示さないことになる。この点からでも、分布のあり方は重要であろう。

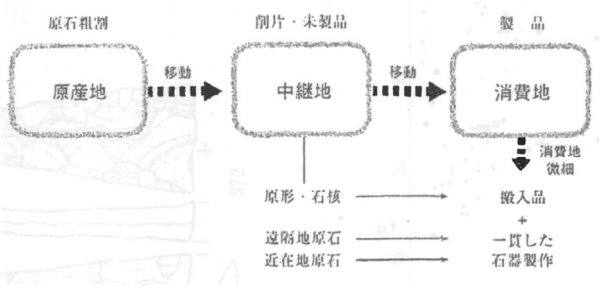
5.石器の機能変化について
事例1　縄文中期の石皿
岡本孝之1983「住居内出土の石皿の覚書」『神奈川考古』3【レジメP2右上図】
住居内の「石皿」の分布に注目。「石皿」が出入口の近くにある例と、炉の近くにあるもしくは奥内にあるという例の、二つの傾向が認められる。前者は「石皿」が機能していた段階、後者は既に「石皿」としての本来的機能が停止し、別の機能に変化したものではないのか、とする。
事例2　秋田県地内遺跡の石槍
土壙墓から、「石槍」が他の石器と一緒に出土。本来、狩猟具である「石槍」の機能が停止して、祭を行うような、機能・用途になる場合と考えられる。

以上の事例は、小林達雄氏らが言う「第二の道具」というような観点で捉えられるかもしれないが、そのように道具がある面では「再生」されていく、という考え方が必要であろう。

6.縄文草創期における土器の出土分布について
事例1　茨城県後野遺跡【レジメP5左図】
A地点、B地点があり、A地点では「神子柴・長者久保石器群」、B地点では細石器の石器群が検出されている。土器の出土分布を見ると、一部のみ、一塊りになって出てきており、それ以外は全部石器が分布している。これらは、約一万年以上前の「関東ローム層」から出土しており、ごくわずかの土器の出土がなければ、これは後期旧石器時代の所産であると理解してしまうものであろう。

事例2　神奈川県寺尾遺跡第Ⅰ文化層【レジメP5右図】
この遺跡でも、土器が一塊りになって出土した。これらの遺物も、ローム層最上面の赤土から出土しており、土器の出土がなければ、後期旧石器時代の終末ということになっていたであろう。

事例3　新潟県本ノ木遺跡【レジメP8右図】
この遺跡でも、ひとにぎりの土器に対し、多量の石器の出土という、様相を呈している。芹沢長介氏と山内清男氏との間の「本ノ木論争」として有名であるが、いわば「旧石器的視点」の芹沢氏と「縄文的視点」の山内氏という立場の論争であったと考えられるのである。



第１図　搬入石器の流通組織

白石浩之 2002『旧石器時代の社会と文化』
日本史リブレット 1 山川出版社

縄文時代草創期というのは、土器の有無という、なければ「後期旧石器時代」であり、あれば「縄文時代」であるのでけれども、旧石器時代から縄文時代の過渡期はそれほど多くの土器が普及しているわけでもないので、全体的には僅少である。したがって、土器がないから「後期旧石器時代」であるとは当然言えない、ということを、事例は示している。

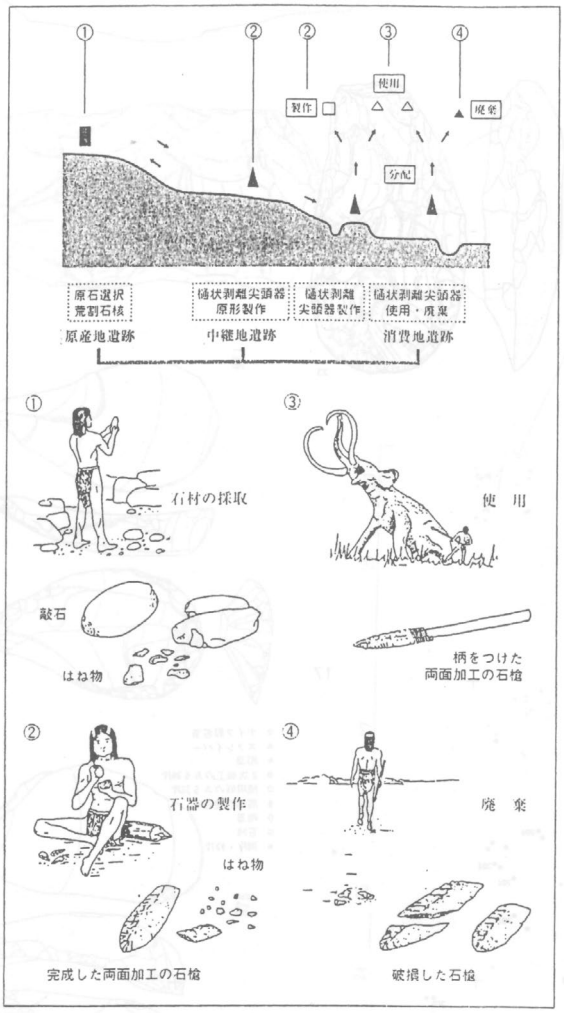
7.遺跡間接合からみる、移動について
事例1　新潟県津南町下モ原Ⅰ遺跡・居尻A遺跡【レジメP6】
下モ原Ⅰ遺跡出土の石核と居尻A遺跡出土の剥片や、下モ原Ⅰ遺跡出土の掻器と居尻A遺跡出土の剥片とが接合する例などから、下モ原Ⅰ遺跡を拠点として、居尻A遺跡との間を往来していたと、想定される。両遺跡は約600m離れて、段丘をたがえている。

事例2　神奈川県吉岡遺跡群B区・用田鳥居前遺跡【レジメP7】
接合作業により、吉岡遺跡出土の石核と用田鳥居前遺跡出土の剥片との接合し、同一母岩であることが確認される。両遺跡は約2km離れている。吉岡遺跡を拠点に、キャンプ地としての用田鳥居前遺跡に行き来していたと考えられる。

8.石器埋納遺構について
事例1　福井県鳴鹿山鹿遺跡【レジメP2下図】
長大な粗割りされた石斧の下に、複数の有舌尖頭器を隠しておいて例である。図では有舌尖頭器を横並びにさせているが、実際上の出土状況は異なっており、皮袋に入れて埋納していた可能性があろう。
事例2　神奈川県吉岡遺跡群【レジメP8左図】
二枚の大きな平たい河原石の下から2点の礫器が出土した。礫器は土坑の側壁部近くの上部で重なるようにして出土した。恐らく河原石は目印として配置されたもので、土坑の中に石器を埋納したものであろう。
事例3　山形県日向洞穴遺跡【レジメP2下図】
円形の土坑の中から、剥片が多数出土した。これも必要時において、剥片を石器にするために保管しておいたものであろう。
事例1・2から、縄文草創期にはモノを隠しておく、という行為が見られると考えられる。また、事例3からは余剰分を蓄える現象の出現が考えられる。旧石器時代と比較すると、土器の出現によって生活にゆとりが出てきたのであろう。モノを隠しておくとか保管する行為はその現れであろう。

9.全国からみた東海地方の石器の特徴【レジメP2左図】【レジメP3中・右図】
斎藤基生氏作成の愛知県における旧石器時代から縄文時代初頭期の石器石材の搬入経路である。旧石器時代の石器は、東海地域の地理的位置から東日本的な石器群と西日本的な石器群の接点にあたるので、両者の石器群が認められる。どのような石器や石材の流通を行っていたのか。とりわけ愛知県下の旧石器は主として消費地遺跡が卓越していたのであろう。岐阜県下の下呂石やチャートの原産地遺跡、または中部高地の黒曜石原産地からもたらされた石器石材や、比較的近距離から調達した在

(註２) 遺跡の年代は暦年代を用いて示している。以下同じ。



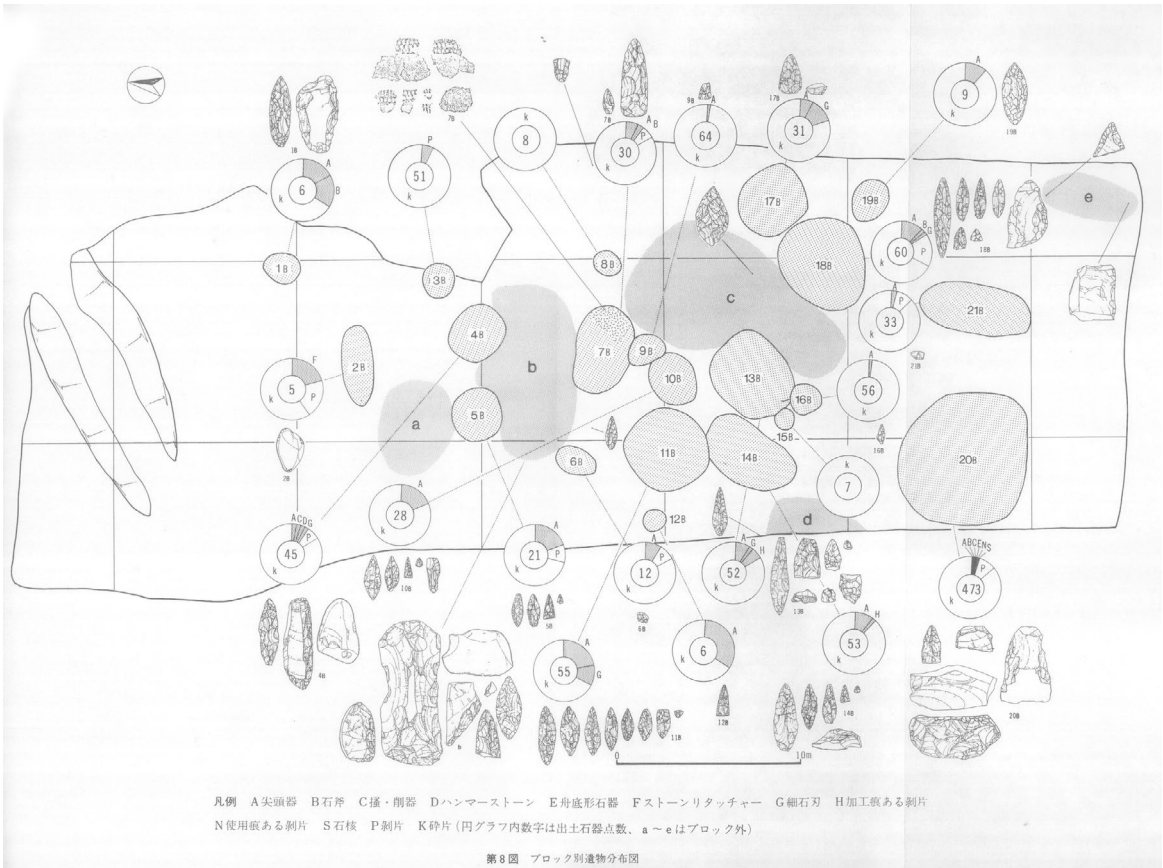
第2図

地形的な特徴をよく利用したのであろう。愛知県下における旧石器は決して多いと言えず、かつ表採資料が凌駕している。今後採集地点を目安にして石器群の時代や遺跡の様相をさぐるべきであろう。一様状剥離尖頭器から

縄文時代草創期の動きが発達する以前、また遺跡や遺物は縄文時代草創期に特徴的に認められるが、押型文土器の時期まで残存するかどうか、問題となっている。石鏃との母岩別資料や遺物分布から見極める必要があろう。また、石鏃の中に五角鏃が存在するが、古手の押型文土器に伴う特徴的な形態と捉えられている。そうとはいえ、その時期以降も五角形の石鏃は残るらしい。飛行機鏃は縄文時代終末期に発達するものである。縄文時代前期には石匙が卓越するのも大きな特徴の一つといえる。また装飾品が発達するのも前期の段階からである。

以上、出土石器の分布を中心に旧石器時代から縄文時代にかけて全国的に見た様相について触れてきた。今後、遺物の分布や出土状態の観察など、遺跡で「なまの石器の状態」を分析することが重要であろう。

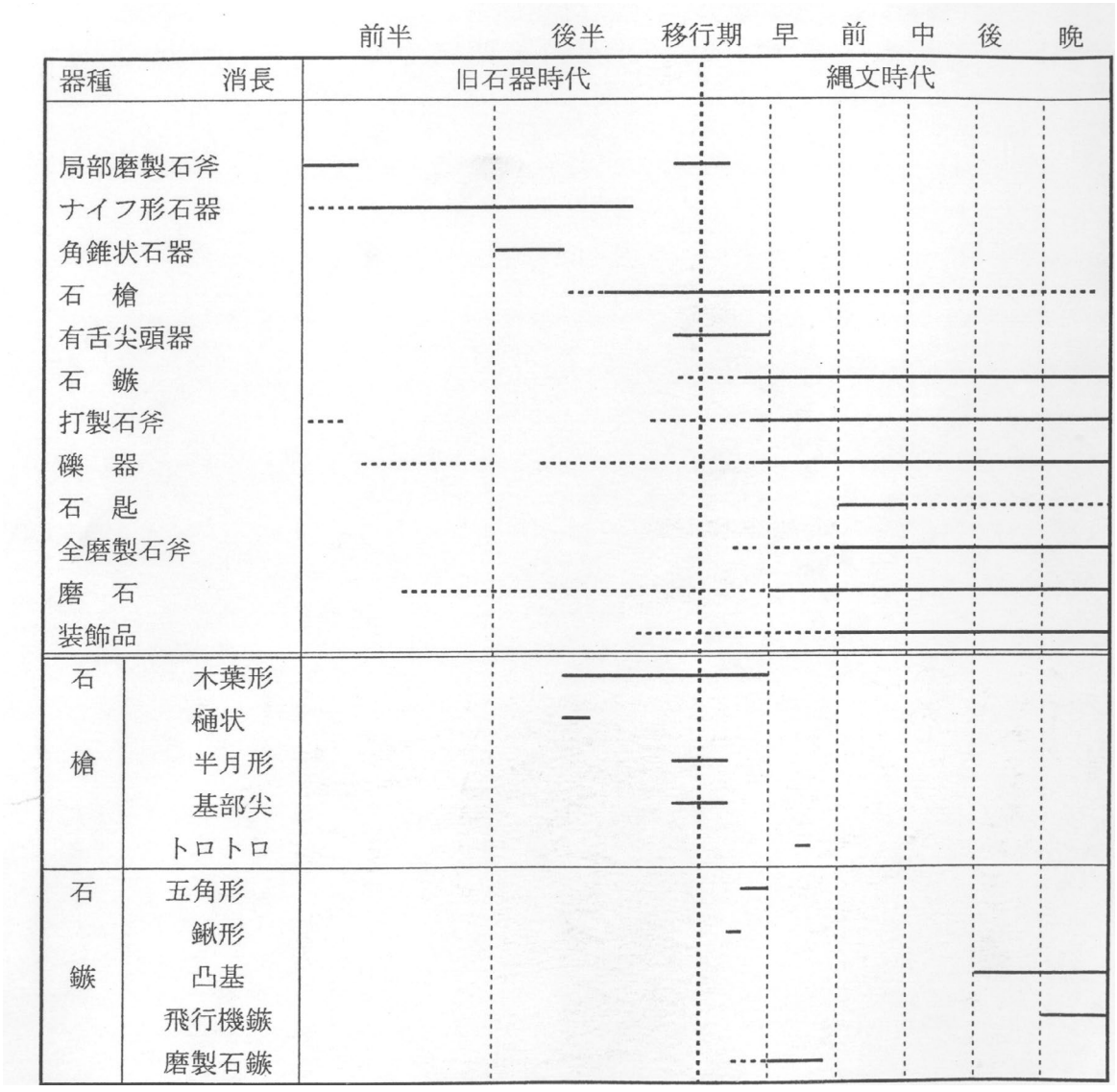
(註1)後期旧石器時代初頭期ではなくて、中期旧石器終末～後期旧石器初頭期の移行期と考えているが、通説に従って、ここでは後期旧石器時代初頭としておく。



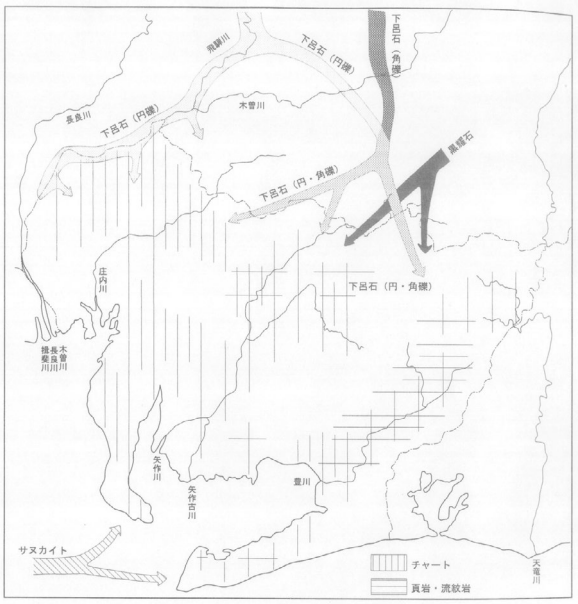
第8図　ブロック別遺物分布図

第３図　神奈川県寺尾遺跡

白石浩之 1980「第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告 18

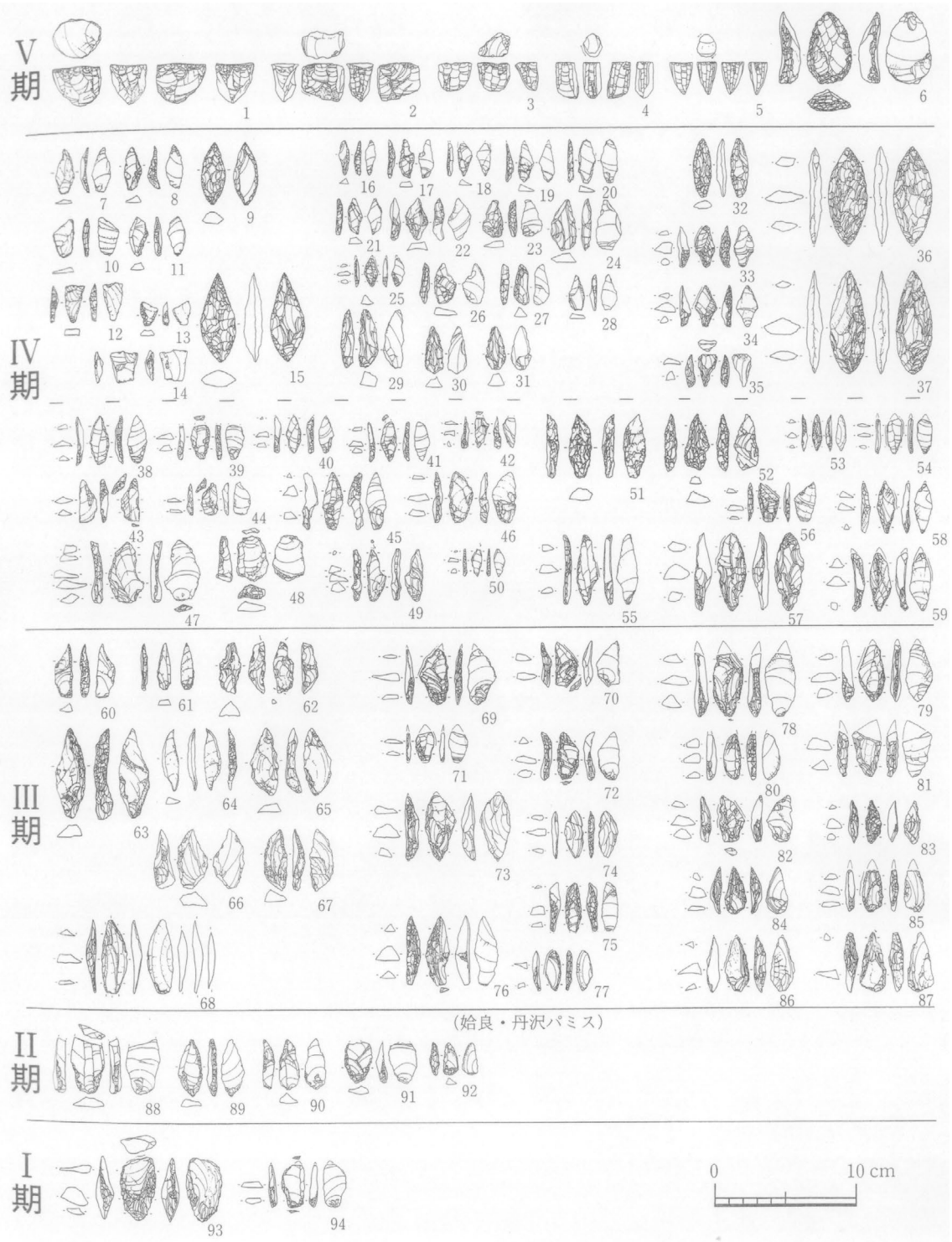

前半
後半
移行期
早
前
中
後
晩
器種
消長
旧石器時代
縄文時代
局部磨製石斧
ナイフ形石器
角錐状石器
石　槍
有舌尖頭器
石　鏃
打製石斧
礫　器
石　匙
全磨製石斧
磨　石
装飾品
石槍
木葉形
樋状
半月形
基部尖
トロトロ
石鏃
五角形
鍬形
凸基
飛行機鏃
磨製石鏃

第４図　主な石器の消長



第５図　主な剥片石器における遠隔地石材の流入経路と地元石材の分布

第５図・第６図ともに斎藤基生 2002「旧石器時代」
『愛知県史資料編１　旧石器・縄文』より転載



1：名古屋市名古屋城三の丸　2：幸田町牛ノ松　3・4：豊川市駒場　5：豊川市天間　6：豊田市梅坪　7～12：犬山市入鹿池A地点　13～15：犬山市入鹿池H地点　16～31：岡崎市五本松　32：名古屋市旧紫川　33：知多市市楽　34：田原町稲場　35：一宮町水神平　36：瀬戸市山路　37：小原村勘蔵連　38～50：春日井市上八田　51：名古屋市大曲輪　52：名古屋市見晴台　53・54：豊田市水入　55：岡崎市仁木八幡宮　56・57：豊川市天間　58・59：豊川市駒場　60～62：犬山市入鹿池A地点　63～65：犬山市入鹿池H地点　66・67：名古屋市竪三蔵通5次　68：豊明市勅使池　69～71：新城市荒井　72：新城市建長寺　73・74：新城市南貝津　75：豊川市上ノ蔵　76・77：豊川市天間　78～87：豊川市駒場　88：名古屋市竪三蔵通8・9次　89～92：名古屋市竪三蔵通5次　93・94：瀬戸市上品野

第６図　愛知県における後期旧石器変遷図

講義１　町田勝則氏「石器の観察・記録・報告の留意点、分析への視座」（当日配布資料から）

b．講義1　町田勝則氏　「石器の観察・記録・報告の留意点、分類への視座」(当日配布資料から)

石器を前にして

石器は、本来それ自身が客観的な事物であり、現実である。我々は、その現実を「形（かたち）」として認識し、受け入れるのであり、認識とは像の理解、すなわち事物の「見え方」の整理にほかならない。我々は、この視覚の世界にある事物を、一般的には言語を用いて共有化し、コミュニケイトしようと企てるのであるが、その実行が伴う限り、主観は避けられないハードルとして、頭を擡げてくる。むしろ人間科学においては、主観と客観の共存こそを、上手くコントロールすることで、現実を認識する方向性が必要なのである。

我々が石器を前にした時、実体そのものは現実であり、至極客観的なものであるはずなのだが、実際には、それを見る人の石器への問いかけ、つまり、「どのように石器を見るのか」という観察者の視点に左右される。観察者の視点は、多くの場合、経験による力量、問題意識によっているため、見る人によって石器の見え方が違ってしまうのである。

学問としての客観性を高めるためには、この見え方の統一をはかる必要があり、体系化された観察法と、その記述法、もちろんのこと認知された学術用語が必要となる。

石器の観察と分類

石器の見え方、すなわち像としての形は、大きさや辺の特徴、剥離や研摩などの加工痕、色などによって決定されている。石器は、通常の場合、人間が意思をもって作り上げた製作物であるから、形を構成している視覚的属性の多くには、人間の意志の基準が反映されており、それは「製作技術」によって導かれている。よって、我々はその製作技術を観察し、形の見え方を理解することで、石器を解るのである。

A）器種を決定する観察手順

1，素材を区別する

礫素材なのか、それとも剥片素材なのか

2，石材を分ける

どんな岩石か、ex）火山岩それとも堆積岩，あるいは安山岩それともチャート

3，二次加工の有無と技法の種類を観察する

礫素材であれ、剥片素材であれ、二次的な加工が施されているか否かを判断する

二次的加工には、剥離（打撃と押圧）、敲打、研摩の３技法がある。

4，使用部位の推定と使用痕の観察を行う

どの部分が直接的な作業部なのか、またどんな使用痕跡が確認できるのか

B）器種を種類分けする観察手段

1，形態を区別する

○全体形を構成している部位（辺）の剥離技法と空間配置、及び湾曲の度合い

ex）直接打撃による片面成形と両面成形、あるいは直線的側辺と内湾や抉れ側辺

2，規格を区別する

○大きさを規定する寸法、比率を機械的に区分する

3，用途を区別する

○　使用痕の類別

石器の記述と報告

製作技術の観察から理解された形の見え方（AとB）は、考古学的用語によって記述される。ことにB）の観察には、論理的思考に裏打ちされた記述が必要であり、学習による文化的能力としての分類操作を伴うものでなければならない。論理は具体的事象の選択的説明にほかならず、必ずしも客観的なものではないと考えるが、経験則にのっとったエゴイステイクな主観性は排除されねばなるまい。たとえば、湾曲の度合いや大きさなどの属性記述が、見る人によって感覚的であるのはいただけない。「絶対尺度」の階級区分を明示することで、考古学用語とすべきであろう。

石器は「道具」であり、道具とは身体器官の延長である。石器がどんな機能・用途をもった道具であるのか、形の意味を探るという研究の目的がある。一般に、石器の記述報告の中では、便宜的に道具分類が仮設されて、機能として切る道具、削る道具、たたく道具などを、また用途として、狩りの道具であるとか、木を切る道具であるとかのタクソンが設定される。これは石器の「器種」が研究者間の記述用語であるのと同様に、事物の本質に対して与えられた解釈の名称ではなくて、石器研究



の体系化を図る上での、ひとつのプレミスである。道具と器種の分類名称には、本来石器がもっていた機能と構造を探求する上に、使用目的にかなった合理性のある、あくまで言葉として学史的に認知されたものを極力用いるべきで、見る人が自分の都合で改変すべきものではない。

補足文献

1996「石器の研究法―報告文作成に伴う観察・記録法①―」『長野県の考古学Ⅰ』

1995「石器の研究法―報告文作成に伴う観察・記録法②―」『長野県埋文センター紀要4』

1997「石器の研究法―報告文作成に伴う分析法②b―」『長野県埋文センター紀要6』

1999「石器の研究法―報告文作成に伴う分析法①上―」『長野県埋文センター紀要7』

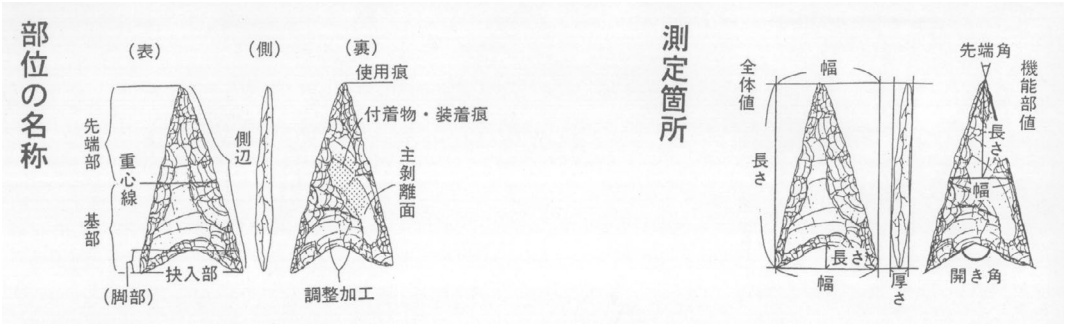
2000「石器の研究法―整理作業、指導と実践―」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』

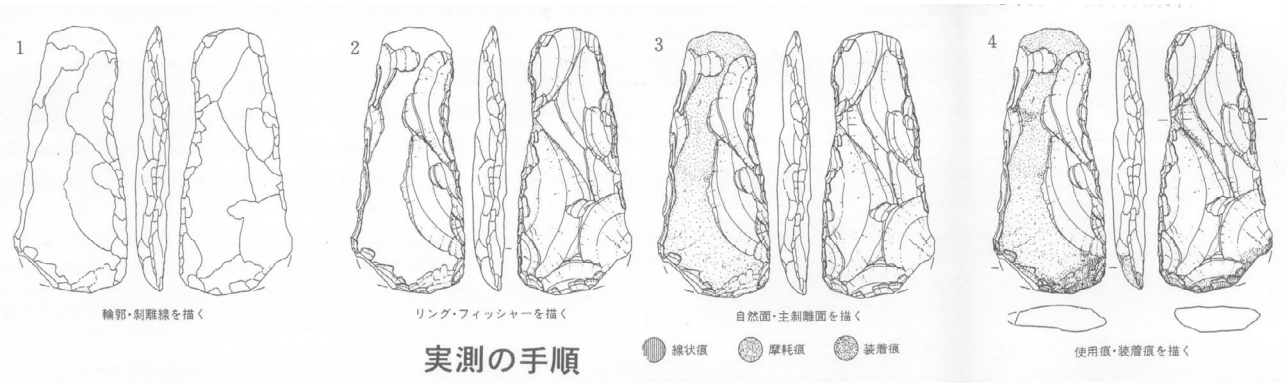
2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５―長野市内その３―松原遺跡　弥生・総論５　石器』長野県埋蔵文化財センター

補足文献
1996「石器の研究法一報告文作成に伴う観察・記録法１－」『長野県の考古学Ⅰ』
1995「石器の研究法一報告文作成に伴う観察・記録法２－」『長野県埋文センター紀要4』
1997「石器の研究法一報告文作成に伴う分析法2b－」
『長野県埋文センター紀要6』
1999「石器の研究法一報告文作成に伴う分析法１上－」
『長野県埋文センター紀要7』
2000「石器の研究法一整理作業、指導と実践一」
『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５
一長野市内その３一松原遺跡　弥生・総論５

A＝積極的に記述必要　B＝記述内容に検討必要　C＝現在は有効な活用なし
甲＝精度が高い　乙＝一般的に記載　丙＝片寄りある記載　丁＝僅かに記載　×＝記述されない

番号	法量（最大値）				機能部						機能部			装着痕跡		基部形態		側辺部形態	欠損		素材剥片	自然面	石材	分類	備考
	長さ〈cm〉	幅〈cm〉	厚さ〈cm〉	重さ〈g〉	長さ〈cm〉	幅〈cm〉	先端角〈度〉	抉り長〈cm〉	抉り幅〈cm〉	茎長〈cm〉	使用痕有無	種類	再生	有無	付着物	茎	形		部位	状況					
例1	2.2	1.2	0.2	0.4	1.1	0.8	33	0.3	1.2	－	あり	衝撃	－	あり	漆？	－	凹	直線	完	－	縦形	－	チャート		
2																									





講義２　角張淳一氏「剥片剥離技術の検討および石器実測図の評価」（当日配布資料から）

ｃ．講義２　角張淳一氏　「剥片剥離技術の検討および石器実測図の評価」(当日配布資料から)

第１章　剥片剥離技術と石の刃物の考古学

第１節　剥片剥離技術の理解と石器研究

・石器の製作とは‥‥石という天然素材を用いて、人工的な刃先や形態をもつ「石の刃物」を製作すること。

・同じ地域の同じ時代を発掘すると、よく似た石器がたくさん出土→石器製作には歴史的に形成された規則がある‥・特定の石材を特定の技術で、特定のデザインに石を加工しているのだろう。

・石器の製作に刻まれた歴史的規則＝石器製作技法＝「素材の選択性」と「意図されたデザインとそれを結ぶ「技術」の「法」‥・石器製作技法を明らかにすることは、石器に刻まれた「石器文化」の内容を明らかにすることです。この場合の「技術」＝「剥片剥離技術」です。

第２節　剥片剥離技術の二つの意味

1：広い意味では、「石を剥ぐ手法」のことです。

具体的には「石器の形態や刃部を形成する技術」と「石器の素材となる剥片」を製作する技術です。

2：狭い意味では、「石器の素材となる剥片」を製作する技術に限定します。

参考）広義の剥片剥離技術と石器製作体系

石器製作の体系は、経験的事実から大きく３体系に分類されます。

A：礫器の製作体系・‥右手にハンマー、左手に素材。剥がされたのは「剥片」。左手に残ったのは「礫器」。

B：剥片石器の製作体系‥・右手にハンマー、左手に素材剥片。剥がされたのは「剥片 (砕片)」。左手に残ったのは「剥片石器」。

C：目的的剥片の製作体系‥・右手にハンマー、左手に素材。剥がされたのは「目的的剥片」。左手に残ったのは「石核」。

A、B、C それぞれに剥片が剥離されます。通常では B の剥片だけが「砕片」と呼称されます。実際に遺跡を発掘すると、多様な剥片が出土します。出土した剥片を A、B、C の体系に分類し、剥片の特徴を記述して、数をカウントすると、その遺跡の石器製作の内容が把握できます。

第３節　剥片剥離技術の記述方法

「石を剥がす手法」を工具と身振りに置き換えて記述。

右手の技術：選択されたハンマーの種類とその身振り

左手の技術：素材の保持とハンマーの当て所（打撃の目標点）のコントロール

＝剥離面の特徴（剥離角・縁辺・末端形状）などで記述。主に二次加工の記述に有効。

第４節 ハンマーの種類と身振り

・石の割れ方の物理的な性質と剥離面・剥離技術の理解

1：割れ円錐（コーン）の生成

ハンマーが当たった点（打点）には圧縮の力が働きます。石核は元に戻ろうとして、圧縮の力に対して引っ張る力を働かせます（弾性変形）。このとき最も大きな引っ張る力は、ハンマーのすぐ脇に生じる。物体は引っ張りの力で壊れていくので、ハンマーの脇に小さな亀裂が生じます。この亀裂がハンマーによる圧縮の力の領域を避けるように石核の内部に生じていくと割れ円錐（コーン）が出来上がります。

2：ソフトハンマーとハードハンマーの定義

理論的にはハンマーが石核よりも充分に硬いと、ハンマーの当たっている点（打点＝コーンの頂点））はハンマーによって完全に拘束されます。この拘束が完全なほど



ハンマーに押さえられた点は変形せず、よってコーンは形よく残ります。

逆をたどって剥片をみたときに、コーンがきれいに残っているならハードハンマーです。（図 1 の H2 と H3 がわかりやすい例です）。

ソフトハンマーは、石核よりも変形するハンマーです。打点の拘束が弱く、当たった瞬間の圧縮力は高くても、すぐに変形してショックを吸収します。したがって、コーン径が広い、不安定なコーンが生じます（図 3 の S1 と S2 がわかりやすい例です）。

3：剥離の開始部

先に見たように剥離の開始部をみることにより、ハンマーの種類と身振りを推定することができますが、石が割

	直接打撃	間接打撃	押圧剥離
ハードハンマー	ＨＤ	ＨＩ	ＨＰ
ソフトハンマー	ＳＤ	ＳＩ	ＳＰ

れるときにはコーンが生ずるコーンタイプの他に、クサビタイプと曲げタイプがあります。

石の割れ口をみると、いずれかのタイプに分類できますが、これによってンマーの種類やハンマーの身振りを推定する根拠とします。

繰り返しますが、「剥離技術＝ハンマーの種類と身振りの組合せ」をみるには、剥離の開始部をみて、剥離技術を推定する作業が石器研究の最初の手続きとして必要になります（土器研究で、土器文様を観察して工具と工具の身振りを推定するのと同じことです）。

クサビタイプは、圧縮の力で石核を引き裂く場合の剥離

(通常)	剥離角　120度前後
急角度剥離	剥離角　90～110度
平坦剥離	剥離角　130度以上
刃潰し	縁辺が潰れた状態
鋸歯縁	縁辺が連続したギザギザの状態
その他・・・	発見してください

の開始部です。コーンは生じても圧縮の力が勝って真二つになるか、コーンが生じないで剥離の開始部は砕けます。バルブは発生しません。図 1 の H1 はコーンが吹き飛んだ剥片です。ハンマーの当たった点が軽く湾曲して、その直下にコーンの抜け殻がみえます。打面は線状になり、打面もろともコーンが吹き飛んだ様子がわかります。これは HD でも圧縮の力が強く作用した例です。真性のクサビタイプとはいえませんが、かなり圧縮力の強い、つまり力強くハンマーを振り下ろして生じた剥片といえます。真性の

クサビタイプの開始部は楔形石器の潰れた辺によく観察できます。
　曲げの剥離は、引っ張る力だけで剥がれる場合の剥離の開始部です。これはバネの力で生じやすく、二つの場合があります。ひとつは石核の縁辺が鋭いときです。人間の手で簡単に理屈が説明できますので、実際に試してください。左手の指先をピンと伸ばし、これを石核とします。右手の人差し指をハンマーとして、左手の中指の先に押しつけてください。人差し指のハンマーの直下にコーンが生ずるはずですが、実際は指の付け根の関節で折れます。これは縁辺角が鋭いとバネの力で元に戻ろうとするために、実際にハンマーの当たった点よりも奥から亀裂が生じます。亀裂は引っ張りの力で生じていますので、コーンはできません。石器の鋭い縁辺が折れている場合は「曲げ折れ」と呼称します。コーンタイプで叩き折っている場合と区別する必要があります。
　次に引っ張りの力は、ハンマーを寝かせた時に生じます。これも簡単に実験ができます。紙を一枚用意して、その端の手前を左手にもって固定します。右手で紙の中程をおさえ、向こうに向かって右手の指先に力をいれます。もし紙に切手のような細かい穴があいていたら、その穴に沿って紙はふたつに裂けます。これは右手によって引っ張る力を生じさせたからです。同じことは、ハンマーを寝かすときに起こります。
　ハンマーは垂直に振り下ろすほど圧縮の力が強く、寝かせるほど引っ張りの力が強くなります。ソフトハンマーのように変形する工具は、ハンマーを充分に寝かせて加撃すると、引っ張る力で剥片が剥がれるようになります。尖頭器の剥離面がよい例です。図３の S3 は大きなコーンが生じていますが、石核の縁がせり出しています。これはかなり引っ張る力の要素が強い剥離の特徴です。曲げの剥離はハードハンマーでも生じますが、充分に硬いハードハンマーの場合は、剥離の開始部が吹き飛んだ曲げの剥離が生じ、コーンも明瞭に観察できる面も残っているでしょう。

・一般的なハンマーと身振りの理解から、遺跡の個性へ
　以上の理屈と実験は、ごく一般的な理解に必要です。しかし、実際に遺物を分析すると、見た目に非常に多様であることに気づきます。この多様さが、同じ技術の程度の差であるのか、複数の技術に整理されるのかを明らかにする必要があります。一般的な理解をもとに、遺物を分析して、遺跡の個性の理解を得る必要があります。
　また、遺物と同じ石材を用いて、剥離面の生成を実験で確かめる必要があります。剥離技術は既に歴史の中に消えていますので、物理的に同じでも、工具の差や身振りの差を遺跡の個性として記述するために、遺物と同じ剥離面を求める実験研究が必要になります。ただし実験研究の基礎に、一般的な石の割れ理解とそれを剥離技術に結びつける論理的思考がないと、やみくもに石器をつくるだけになり、研究に成りません。理論と実験を繰り返して積み重ねることが必要です。

第２章　実測図に必要な剥離面属性

　第１節　　石器の実測図とは何か
石器の技術の理解を記述した図。写真は無作為に情報が表現されている。その多様な情報を整理し、石器の技術に必要な属性を選択し、線で表現する図。割れ口のリアルさより、割り方の理解の図。

　第２節　実測図に必要な剥離面属性
・打点・‥剥片の場合はコーンの頂点（本来の打点）を、石核や加工の場合はコーン頂点が抜けたように！！
・コーン・‥コーンの規模と形状。コーンを形成するフイツシヤーとリングの径で表現する。
　コーンを形成していない基辺のリングとコーン内のリングの径に注意。
・バルブ‥・コーンの延長の膨らみなので、コーンから追って、その範囲を表現する。
・リング‥・剥離面の稜線の形状（剥片の主要剥離面の場合は、その両側辺）で、辺の変換点をみつける。その変換点を起点にして、剥離面の膨らみ（凹み）をリングの径で表現しながら、剥離軸に径の預点をもっていく。そのまま反対側辺に収束させる。(註１)
・末端形状・‥フェザー、ステップ、ヒンジフラクチャーの３形態をかき分ける。
・フェザーエンド：末端辺にリングを掛けない。
・ステップエンド：階段状になっている部分は、少し太めの線で表現。階段と末端辺の隙間が狭いときには、階段部分を太く表現するだけでも OK。
・ヒンジフラクチャー：末端にリングをかけて、背面側に主要剥離面がめくれあがるように表現。
・フイツシャー・‥石質と切り合いを表現０できるだけ過剰な表現は避ける（少ない手数で大きな効果を！）。(註２)

第３章　石器も土器と同じように研究‥・
　第１節　地域の中の文化の変遷
ヘラ状石器と打製石斧（主に関東地方）の例（「群馬県における縄文時代早期末から中期初頭の打製石斧」中島誠 2002　『石斧の系譜』予稿集　笠懸野岩宿文化資料館他）
　ヘラ状石器・・・縄文早期末から前期中葉
　　加工された刃部と反対面には平らな素材面で刃部を形成・・・片面加工の削器の一種。
　　ハードハンマーの直接打撃もしくは間接打撃で両側辺を加工。貝般状の剥離面が形態形成の加工。
　打製石斧・・・縄文前期中葉から中期以降
　刃部はハードハンマーの直接打撃の両刃。刃部を対象物に直接当てる鈍器。

①打製石斧とヘラ状石器は、石器の種類が違います。
②ヘラ状石器は関山式から諸磯式土器の文化に伴います。
③諸磯式土器の文化には打製石斧もありますがヘラ状石器の加工技術で形態形成された「打製石斧」もあります。
④中期にはヘラ状石器が消えて、打製石斧になります。

　第２節　同時期の文化交流

　福島県上の台遺跡の石匙（『上ノ台遺跡』いわき市教育委員会他 2000）
　　両面加工石匙と周縁加工石匙、そして折衷技法の石匙。

　上の台遺跡の在地石材は流紋岩である。そこには横形石匙と縦形石匙が出土した。横形石匙はすべて流紋岩製。縦形石匙は流紋岩製と珪質頁岩製（遠隔地石材）で構成される。
　珪質頁岩の縦形石匙は、流紋岩にコピーされる。またミニチュアデフォルメされて流紋岩で製作される。
　・コピーされる側とコピーする側。　　二つの文化の関係を示す。
　・折衷石器の属性の階層性。　　技法の混在性＝文化の溶け合い方を示す。
　・折衷とコピー・・・・二つの石器の比較で、素材（石材と素材剥片）・技術・デザインが同じ石器はその文化の「オリジナル」である。コピーは、異文化のデザインを、自分の技術と素材で実現した折衷形式。(註３)

　第３節　補足：技法 (文法) で石器を分類する
　石器を属性に分解して、文法で理解。遺跡間で技法による石器の比較を試みる。

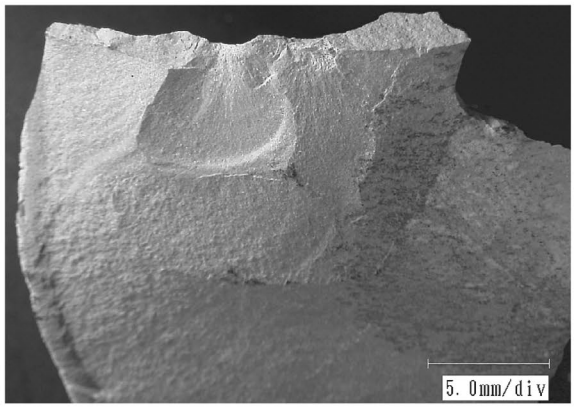
1：石材・・・便宜的に岩石学的分類。本来は石質の分類。土器でいう粘土。(註４)

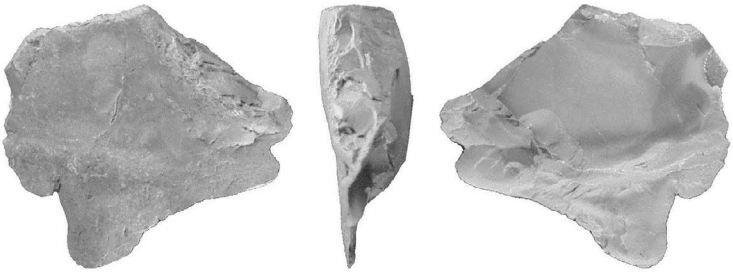
2：デザインを属性で記述　刃部属性（形成属性と使用痕）、整形加工、成形加工、素材形態、素材技術、加工様相（両面加工、片面加工、周縁加工、部分加工など）、他。

3：一個の石器を属性で理解する・・・属性相互をつなげ

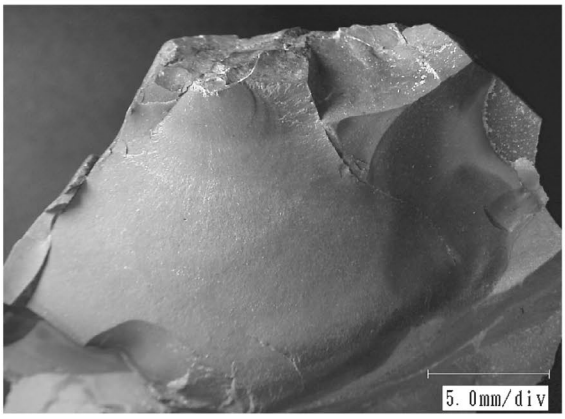


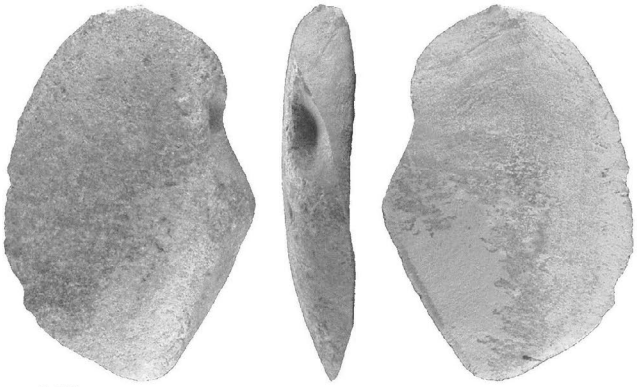
H1



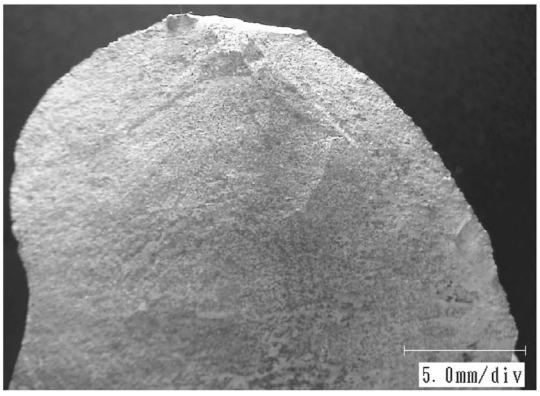


H2



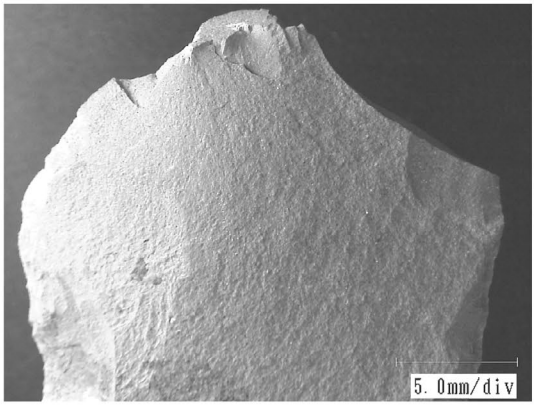


H3



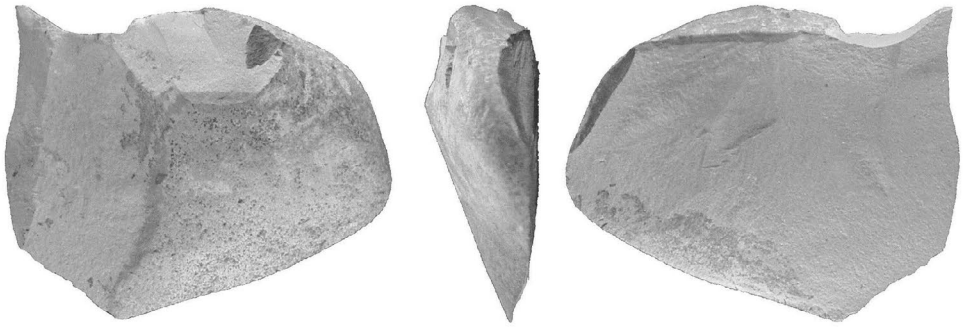


H4

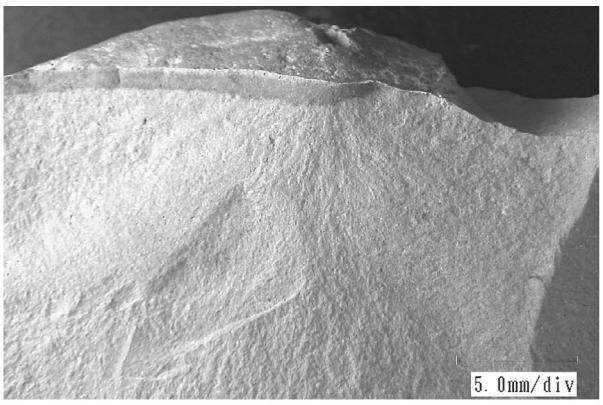


実験石器の縮尺：2/3

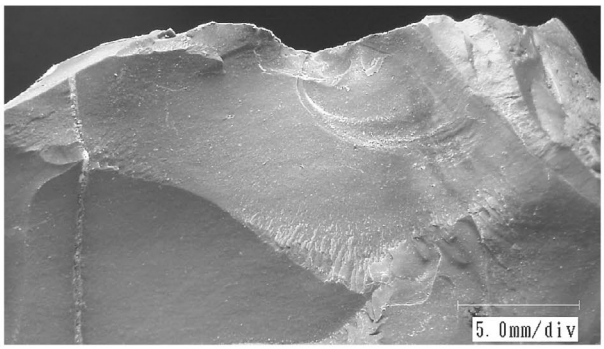
第１図

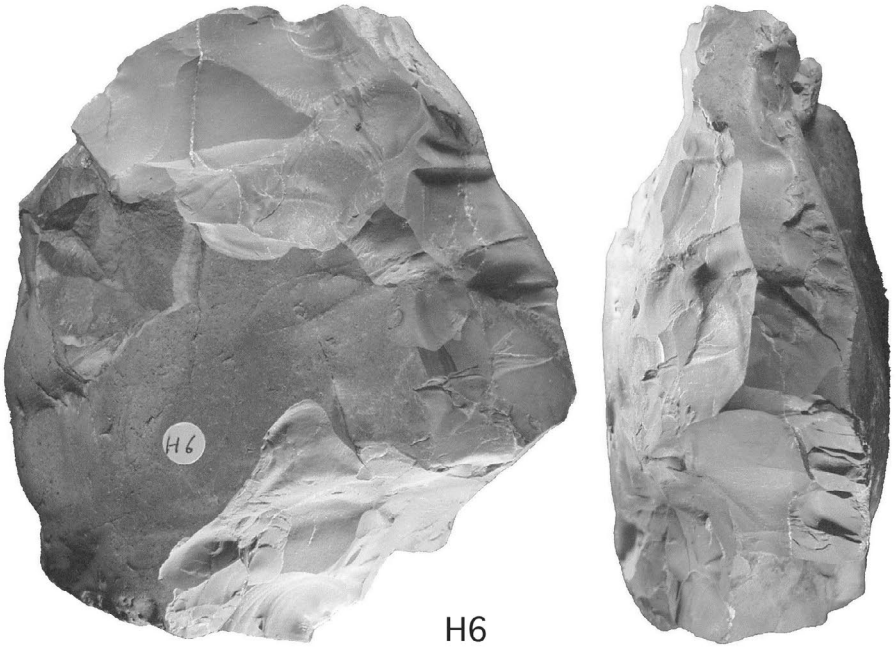


H5









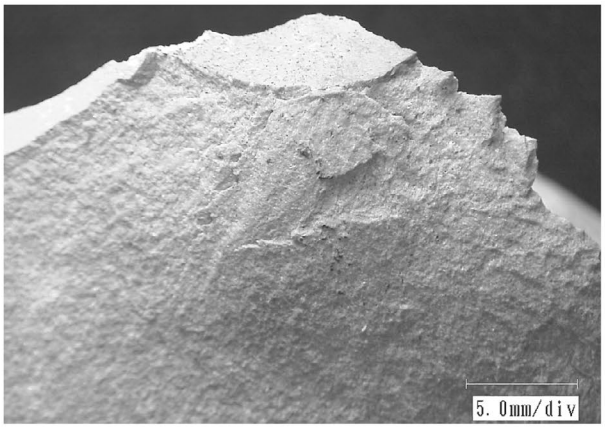
H6

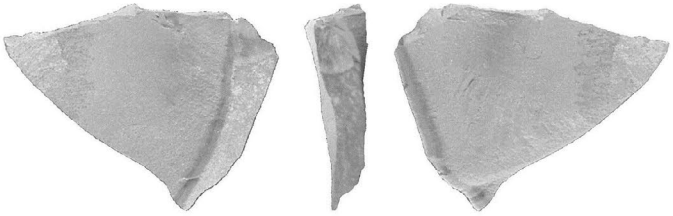
実験石器の縮尺：2/3

第２図

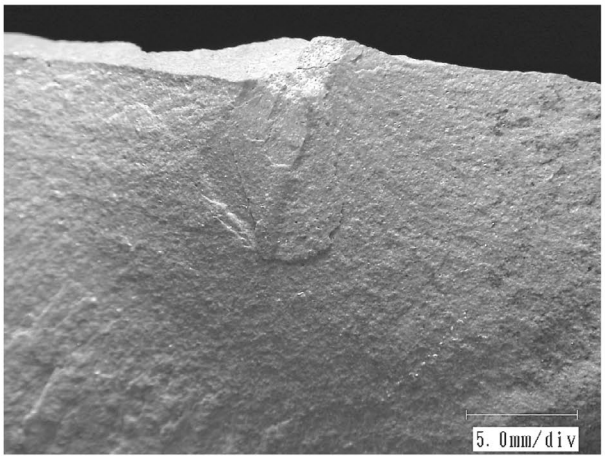


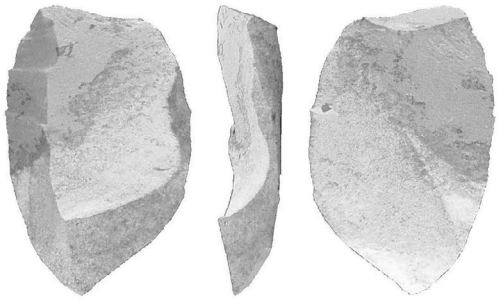
S1



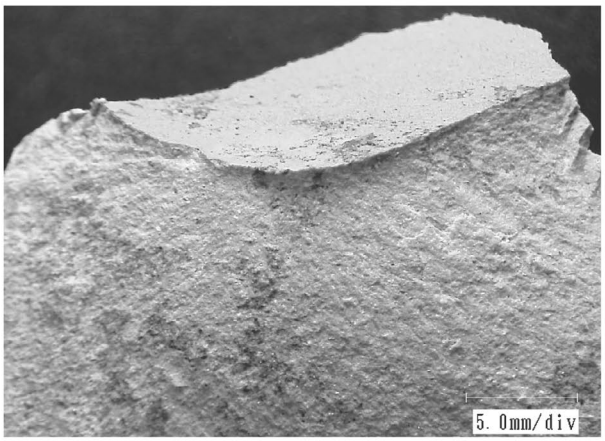


S2





S3



実験石器の縮尺：2/3

第３図

る
a）刃先をみつける　刃先の属性を記述する・‥素材辺か、加工で形成されているか、もしくは折れ（欠損）ているか。本来は使用痕分析で刃先が特定される必要があります。
b）刃先以外の辺を加工の有無で区切る。加工された辺は、技術の属性で記述。
4：遺跡内の石器を属性で理解する・・・石器の種類を明らかにする

a）強い属性の束と弱い属性の束の集合が「石器」である
例 1）剥離幅 3 ミリ前後のソフトハンマーの押圧剥離の両面加工＋三角形＋二脚＋ 3 センチ前後＋チャート＝「凹基鏃」と名付けよう。

b）石器を文法と品詞の内容で理解しよう
刃部＝ V（動詞）
主要な形態形成の辺（S）
縁辺を調整する辺（H）
打面を形成する辺（P）
など・・・
例 2）S（素材の未加工の辺）＋ V（剥離幅 1 ミリ前後の鋸歯状＋刃部長さ 5 センチ前後＋横長剥片の末端辺）＝鋸歯縁削器
例 3）S（素材の交わらない長辺＋垂直の HD 加工）＋（長辺に囲まれた一短辺＋両刃 HD 加工＋土づれ痕）＝打製石斧

（註 1）リングは、「剥離面の捻れ」や深さ（厚み）の程度を記述する表現方法です。辺の変換点以外から多くのリングを入れると、属性が混乱するので注意。
（註 2）剥離面の切り合い関係は、「辺と辺の関係」に用いるのが効果的。連続する二次加工の剥離面の切り合い関係は意味のない場合が多い。特に、石鏃の押圧剥離などの細かな剥離面は、切り合い関係よりも剥離の開始部が大切。綺麗な図の前に、石器の理解が記述されている図が必要です。
図では記述に限界があります。図と属性表の記述（文法のない記述）を、文章で日本語にして意味付けする必要があります。

（註３）「範型」の実現が「コピー」という型式論（「タイポロジー」小林達雄『日本の旧石器文化』1 雄山閣 1976）では、
文化の位相を分析できない。
（註４）先史時代人の石材選択意識と岩石学的記述は整合しない。先史時代人の石材選択性は、剥離属性（脆さ⇔粘り、

講義３　原田　幹氏「石器の使用痕」（概要）

石器の使用痕
原田　幹



１．石器の機能推定
石器の機能を推定する方法は、⑴ 形態からの推定、⑵ 民族・民俗資料からの推定、⑶ 出土状態からの推定、⑷ 実験による推定、⑸ 使用痕からの推定等がある。研修会では ⑸ に関連する石器の使用痕研究の概要について、実験石器や実際の分析事例をまじえて紹介した。

２．使用痕の種類と観察方法
遺物の観察により、使用痕として認識できる事象には次のようなものがある。
ａ．破損
ｂ．微小剥離痕（マイクロ・フレイキング）
ｃ．線状痕
ｄ．摩滅痕
ｅ．使用痕光沢（ポリッシュ）
ｆ．付着物・残滓
使用痕の観察方法は、対象とする痕跡の種類や分析の目的に応じて決定される。肉眼やルーペによるマクロな痕跡の観察から、走査電子顕微鏡などきわめて高倍率な観察機器までが用いられる。現在の使用痕研究では、数十倍程度の実体顕微鏡により主に微小剥離痕や摩滅痕、比較的マクロな線状痕を検出する方法と 100～500 倍程度の金属顕微鏡によりポリッシュおよび線状痕を観察する方法が主にも用いられている。前者は低倍率法（lowpowerapproach）、後者は高倍率法（highpowerapproach）と呼ばれるが、これらは相反するものではなく相互に観察情報を補完する分析法である。

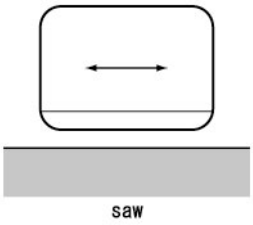
３．実験使用痕分析
遺物に残された痕跡を観察するだけでは、その痕跡がどのように生じたものかを明らかにすることはできない。使用痕と石器の機能との因果関係を調べるために条件を制御した多数の実験プログラムが実施される。実験の内容は研究の目的によって変わるが、基礎的なデータを得るために次のような条件が設定される。
@石器の形態、石材の種類
A対象物の種類（とその状態）
B石器の操作方法
C作業量

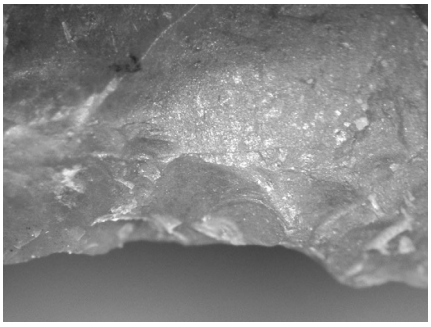
４．低倍率法による観察
ルーペや実体顕微鏡（10～100 倍程度）を使用し、主に微小剥離痕の観察に主眼をおく。微小剥離痕は対象物との接触によって生じる刃こぼれである。剥離の形態（平面形・断面形）、大きさ、分布等が記録される。石器の使用部位、操作方法、対象物の硬さと蓋然的な結びつきが認められる使用痕である。

５．高倍率法による使用痕分析
観察には金属顕微鏡（100～500 倍程度）が使用される。主に使用痕光沢（ポリッシュ）、微細な線状痕が観察の対象となる。
ポリッシュは対象物との継続的な接触によって石材表面が徐々に摩耗することで形成される。光沢面の特徴により約 10 タイプに分類されており、草本植物、木、骨・角、皮、肉、土等の被加工物の種類との間に一定の相関関係を有する。このため、識別的なポリッシュが観察される場合、被加工物の大別的な種類を推定することが可能となる。ポリッシュの分布や線状痕の方向等の情報とあわせ、石器の使用部位、操作方法を推定する。

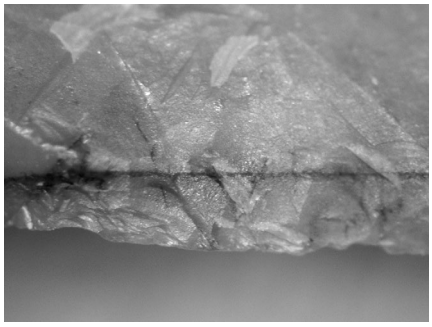
６．分析の実例
主に弥生時代の石器を対象とした、高倍率法による分析事例について紹介した。
・磨製石庖丁（綾歌町神前溝手遺跡）
・粗製剥片石器（清洲町ほか朝日遺跡）
・スクレイパー（清洲町ほか朝日遺跡）
・打製石斧（岡山市津島岡大遺跡）
・石錐、ヘラ様石器（豊田市川原遺跡）

７．使用痕研究の目的と課題
石器の使用痕研究には、個別の石器や器種の機能を研究するだけでなく、遺跡の空間的な機能の復元、器種組成を機能的な組成として記述し石器の技術的、社会的な側面にせまるという、より高次の目標がある。一方、使用痕研究を進めていくうえでの課題や障害も多い。使用痕光沢は被加工物と一定の相関を有するものの、一対一の対応関係があるわけではなく蓋然的な結びつきである。ブラインドテストの結果でも、使用部位、操作方法、被加工物の順に正答率は下がり、被加工物の推定では６～８割程度の正答率となる。使用痕光沢の場合、Ａタイプのようにきわめて特徴的で被加工物との相関が強いもの、Ｆタイプのように微弱で特定の対象物との関係が不明確なものもあり、分析の精度も一律に評価できない場合がある。また、使用痕の同定は分析者の職人芸とたとえられるように、観察・同定のプロセスがブラックボックス化し、第三者による客観的な評価が難しいという意見もある。この点については、使用痕の検出、記述の方法、解釈の手続きなどをより明示的に示すための整備も必要であろう。もうひとつは、石器が使用後に被る様々な損傷や表面変化の問題である。観察の障害となる石器表面のダメージについては、遺物の分析事例の増加に伴い、ある程度明らかにされてきているが、そのメカニズムや使用痕への具体的な影響については不明な部分が多い。
現状における石器使用痕の研究には多くの課題や限界も存在するが、これらの課題や限界を見極めたうえで、石器研究ひいては考古学研究へ寄与することを望むものである。

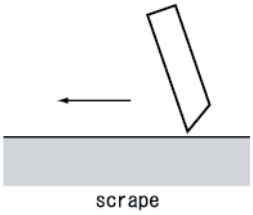


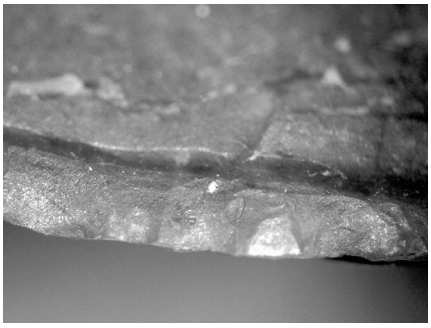


骨のsawing

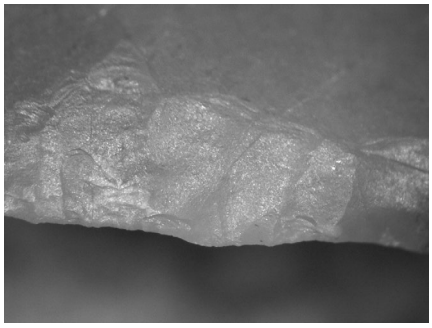


骨のsawing





木のscraping



鹿角のscraping

図 1　実験石器の微小剥離痕

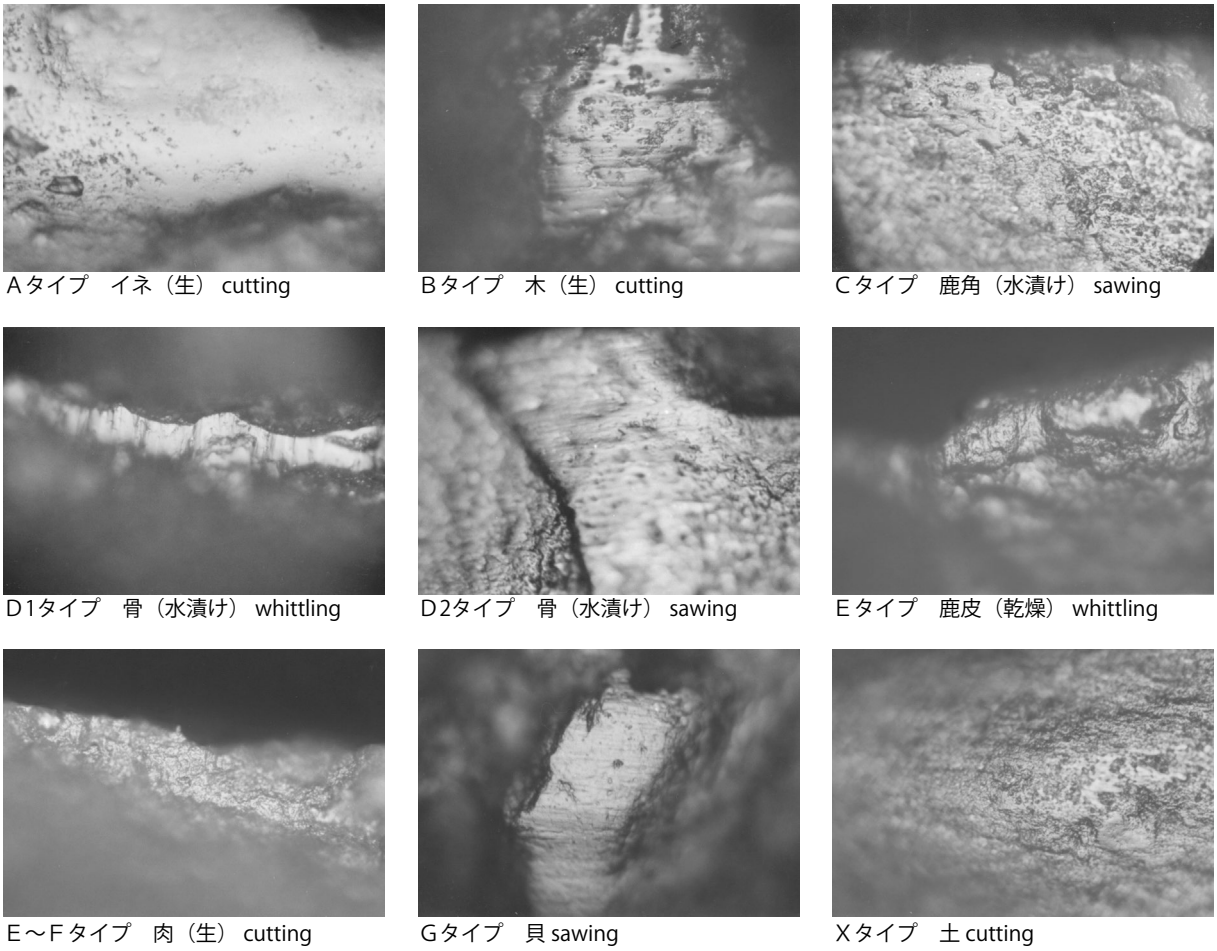


図２　実験石器（チャート）の使用痕光沢（ポリッシュ）

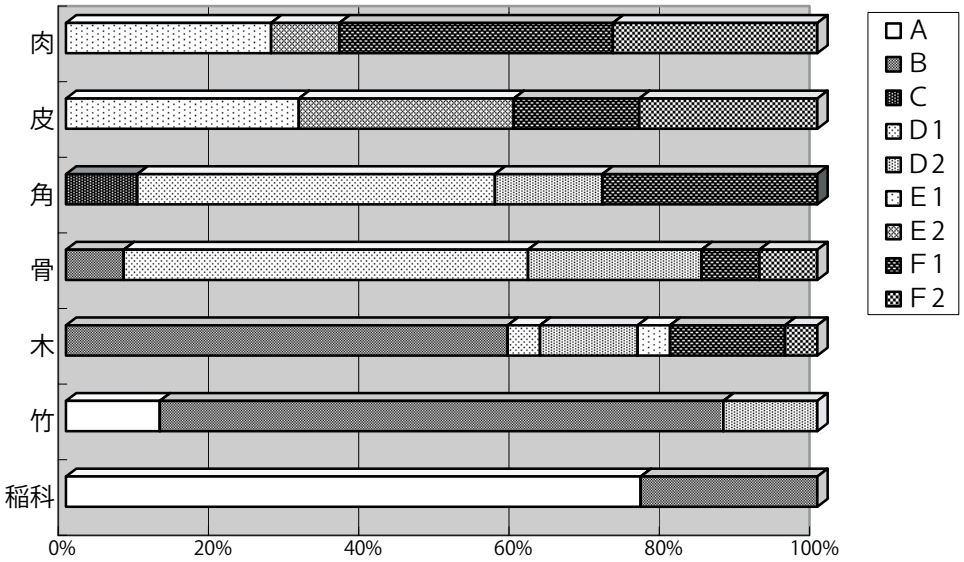
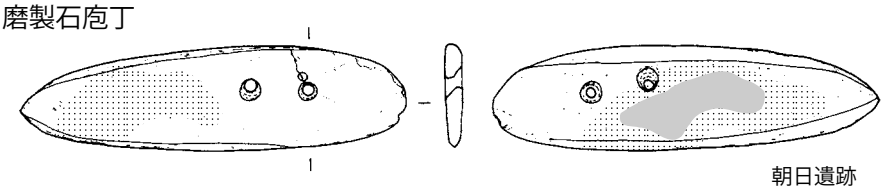


図３　ポリッシュと被加工物との相関（梶原・阿子島 1981 をもとに作成）

磨製石庖丁



朝日遺跡

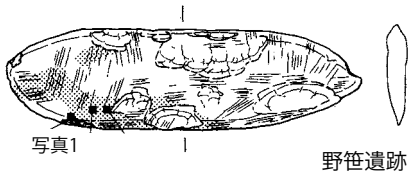


写真1

野笹遺跡

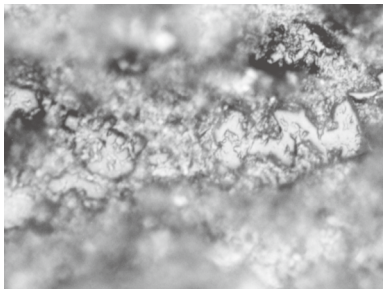


写真1　500×

＊イネ科植物に対する作業では、独特の明るさと滑らかな表面を特徴とするA、Bタイプの光沢面が形成される。東海地域の弥生石器では、磨製石庖丁、大型磨製石庖丁、粗製剥片石器にこの使用痕が認められ、収穫など農具として用いられたと考えられている。石器の操作方法では、磨製石庖丁はいわゆる「穂摘み」に、大型磨製石庖丁と粗製剥片石器は刃部を平行方向に操作する切断に用いられたと推定される。

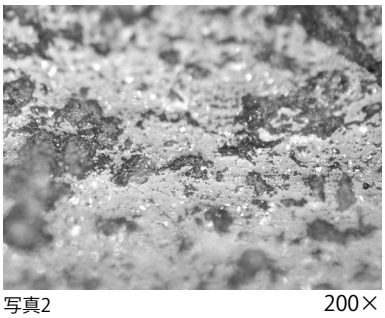


写真2　200×

大型磨製石庖丁

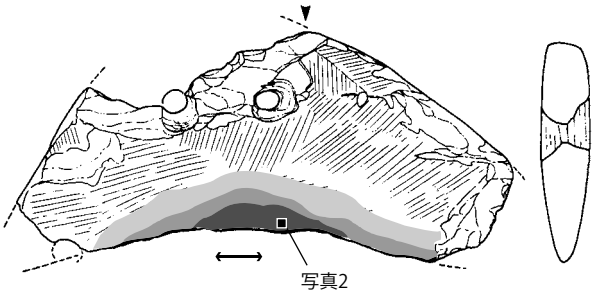


写真2

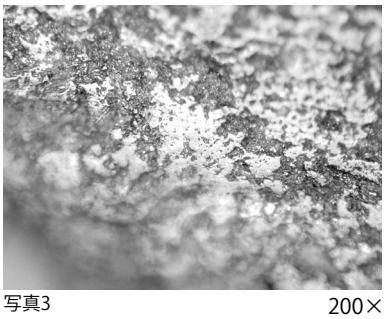
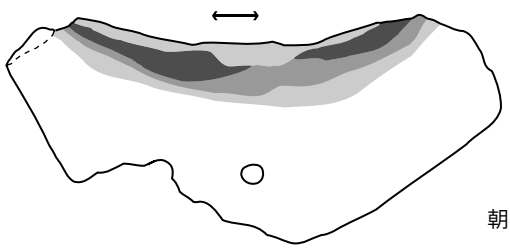


写真3　200×



朝日遺跡

粗製剥片石器

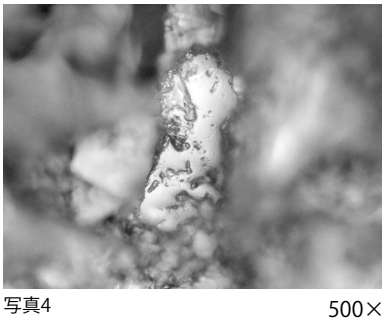


写真4　500×

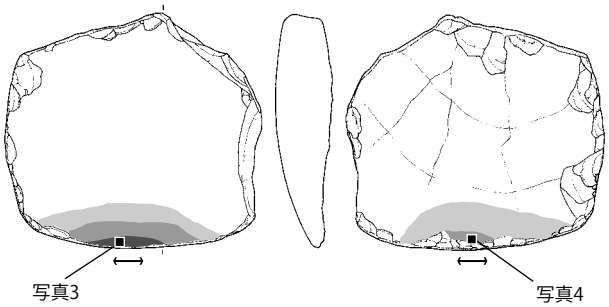


写真3　写真4

朝日遺跡

第４図　石製農具の使用痕と機能



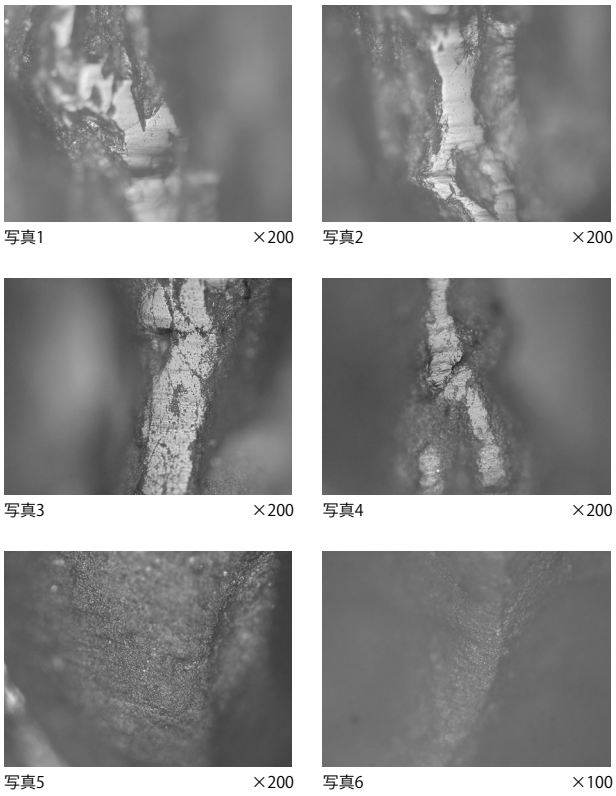


図５　石錐の使用痕

＊豊田市川原遺跡では、チャート、下呂石製の石錐が出土している。このうちチャート製の石錐に使用痕が観察された。線状痕はいずれも錐部と直交する方向性をもち両側縁に認められることから、錐部の回転による穿孔を機能が考えられる。光沢面には次の3種類が認められ、被加工物の違いを反映しているとみられる。

3175は錐部測辺の稜上に使用痕光沢が認められる。光沢部は明るく平坦で、表面はなめらかである。線状痕が明瞭に認められる。光沢タイプはDタイプで、水分を含む鹿角や骨と関係する使用痕とみられる。

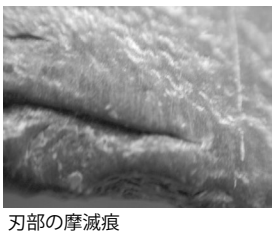
3171は錐部側辺の稜上に使用痕光沢が認められる。光沢部は明るく平坦で線状痕も明瞭である。3175で確認したDタイプの光沢に似るが、表面がやや粗く線状痕も鋭く、光沢内部に剥落したようなピットがみられ、より硬いものが被加工物と推定される。

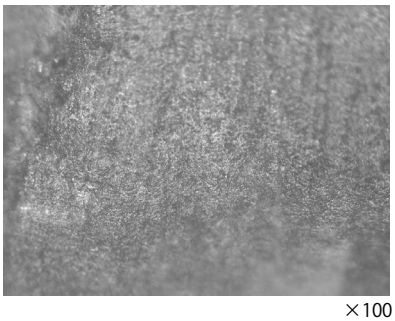
3178は肉眼でも観察できるほどよく摩滅している。光沢としては発達しておらず、摩滅面に無数の鋭い線状痕が形成されている。



＊岡山市津島岡大遺跡出土の打製石斧（サヌカイト製）

土によって生じる使用痕の特徴は、肉眼でも判別できるほど強い摩滅痕をともなうことである。打製石斧のように一定の方向に使用された石器では、操作方向に擦痕が形成される。高倍率下で観察すると、石材表面が一様に摩滅し、高低所に関係なく鈍く荒い光沢面に覆われ、無数の溝状の線状痕をともなっている。





刃部の摩滅痕　×100

図６　打製石斧の使用痕

実習　大沼克彦氏「文化としての石器作り」（概要）

e．実習　大沼克彦氏　「文化としての石器作り」(概要)

はじめに、世界の石器文化に関わる概要説明をされた後、礫核石器(チョッパー・チョッピングツール・ハンドアックス)の製作、ルヴァロア剥離、石刃・細石刃の製作、木葉形尖頭器の製作などを示された。その後、研修生各人が石鏃などの製作実習を行った。

特に、製作によって示していただけたものが、石刃と木葉形尖頭器である。石材は黒曜石で、ハンマーは写真にあるものを使用された(写真**)。

石刃は軟質石や鹿角をハンマーとされた。まず、板状の素材に直接的な稜を探す。もともと稜が揃ってない場合には、それを細かい剥離で作り出す。次に、稜の起点部分に凹凸のない滑らかな打面を作り、打面の縁にハンマーを打ち当てる。当て方には注意が必要で、あたかも擦るような形で、腕を回して打ち当てた。最初の剥離によってできた二本の稜線に沿わせ石刃を交互に剥離していかれた。連続した剥離を継続するために、時折、石核の打面調整を行われた。

第**図は、その時間に大沼氏が実際作られた木葉形尖頭器の実測図である。大きさの異なる硬木のハンマーを用いた整形で作業を行ったことが分かる。著書で述べられているように、薄くて長い剥離を、全体形を壊さずして、施すためには、ソフトハンマーとしての硬木が有効であることを示されている。



参考文献　大沼克彦 2002『文化としての石器づくり』東京　学生社。



写真１　使用ハンマー



写真２　粗割り風景１



写真３　粗割り風景２



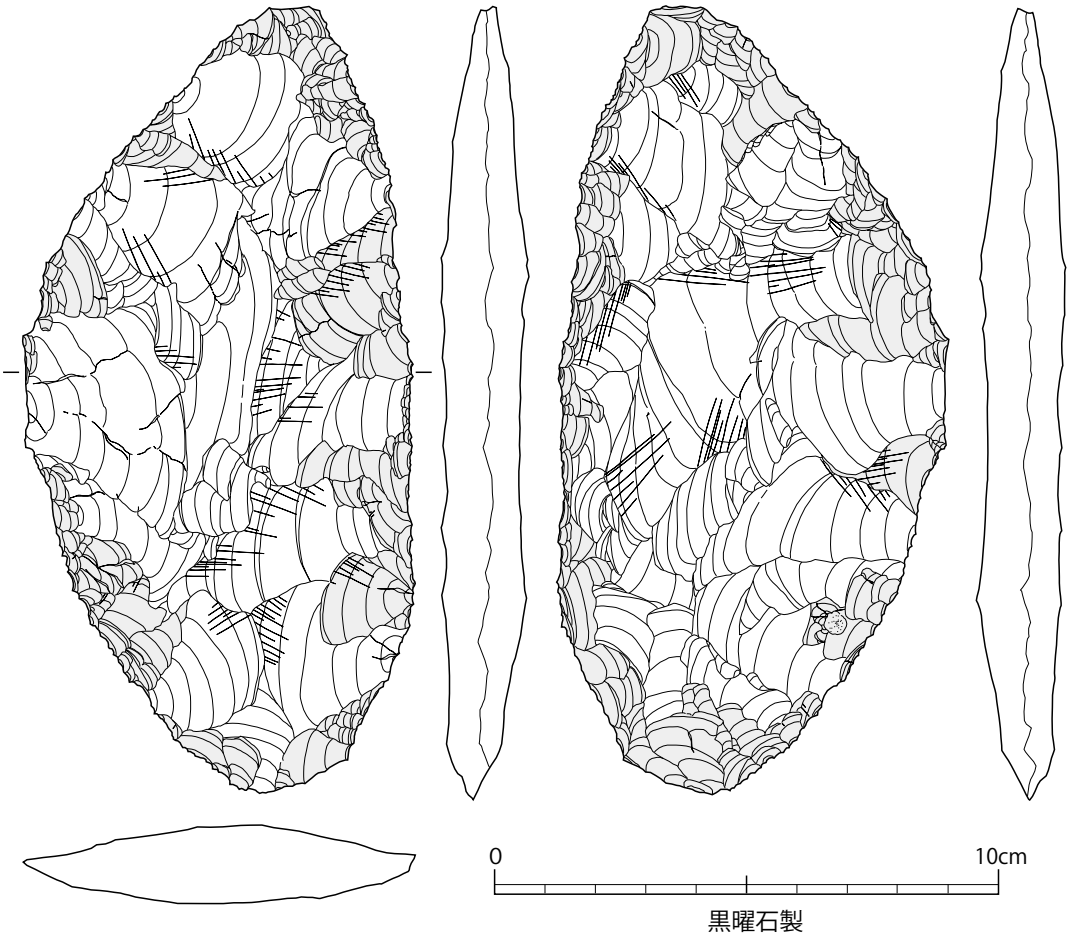
写真４　軟質の石材をハンマーとした調整



写真５　講義風景１



写真６　講義風景



黒曜石製

最終整形　小型木製ハンマー(硬木)による直接打法。力まずに、縁をもぎ取るようにした。

ほぼすべてが中型木製ハンマー(硬木)による直接打法(一部鹿角による直接打法)。
全体を薄身にする作業で、かなりの力で、内側深くに入るような剥離。
両側から交互に剥離を施し、中央部分の厚みをとる。

木製のハンマーには、ツゲ・カシ・カマツカなどの硬木が適している。

第１図　大沼氏作成石器実測図（３分の２）

V. 埋蔵文化財センターの活動

埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会

［愛知県教育委員会・瀬戸市教育委員会との共催］

埋蔵文化財展

会　場	瀬戸市文化センター　美術展示ホール	
会　期	平成14年８月３日（土）～８月18日（日） （火曜日を除く）	
テーマ	埋蔵文化財展2002　「考古学じゃない？考古学」	
展示品	第１部	平成13年度　最新成果・出土品 名古屋城三の丸遺跡、権現山遺跡、朝日遺跡、中之郷北遺跡 上品野蟹川遺跡、中洞窯跡、鷲窯跡、凧山屋敷遺跡、巡間E窯跡 惣作・鐘場遺跡、東端城跡、上橋下遺跡、矢並下本城跡、城山城跡 五葉窯跡（瀬戸市埋蔵文化財センター調査）
	第２部	自然科学から考古学へのアプローチ 川原遺跡、志賀公園遺跡、八王子遺跡、朝日遺跡、郷上遺跡 田所遺跡、大毛沖遺跡、名古屋城三の丸遺跡、清洲城下町遺跡
入場者	1008名	
その他	入場者にパンフレット（A4版８頁）を配付	

埋蔵文化財講座（瀬戸市文化センター）

講座１	８月３日〔土〕	「平成13年度発掘調査成果の紹介」
講師	佐野　元氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）	「瀬戸市五葉窯跡」
	宇佐見守調査研究員（愛知県埋蔵文化財センター）	「瀬戸市惣作・鐘場遺跡」
	成瀬友弘調査研究員（愛知県埋蔵文化財センター）	「豊田市矢並下本城跡」
参加者	116名	
講座２	８月17日（土）	「考古学を科学する　-科学の目で眺めてみると-」
講師	永草康次氏（文化財学会会員）	「砂粒が語る土器のふるさと」
	森　勇一氏（愛知県立明和高等学校教諭）	「清洲城に米蔵があったってホント？」
	堀木真美子調査研究員（愛知県埋蔵文化財センター）	「骨・ほね・ホネ」
参加者	118名	

埋蔵文化財講演会

会　場	瀬戸市文化センター
開催日	平成14年８月10日（土）
講　師	国際日本文化研究センター　教授　安田喜憲氏
演　題	「森と人との物語ー環境考古学のすすめー」
入場者	188名

発掘現場見学会

会　場	瀬戸市惣作町　惣作・鐘場遺跡
会　期	平成14年８月５日（月）～９日（金）　午前・午後各1回説明
内　容	発掘調査中の遺跡を見学しながら、遺跡調査の方法や手順を説明する
参加者	122名

現地説明会等

現地説明会

遺跡名	開催日	所在地	内容	参加者
凧山Ｃ窯跡	6月23日（日）	瀬戸市凧山町	13世紀半ばの窯体2基、工房跡2ヶ所、灰原と灰釉系陶器（山茶碗）生産に関わる遺構群を確認した。	230名
名古屋城三の丸遺跡	9月7日（土）	名古屋市中区	17世紀中頃の「御屋形」に伴う池や石組溝などを確認。これらは庭園に伴う遺構と思われ、庭石や玉石等で装飾されていた。また、那古野城関連の遺構も検出された	350名

地元説明会

遺跡名	開催日	所在地	内容	参加者
荒山古墳群	6月29日（日）	豊田市渡合町	古墳時代後期の円墳2基を検出。1号墳は当地域で類例の少ない「竪穴系横口式石室」で遺存状況も良好。石室内からガラス玉が出土している。	120名
長谷口遺跡	8月22・23日（木・金）	瀬戸市長谷口町	縄文時代早期～中期の遺構・遺物が多数確認。特に中期の竪穴住居や埋甕は注目される。また瀬戸市域で初見となる弥生時代中～後期の住居跡も検出。	100名

記者発表

朝日遺跡	11月27日（水）	清洲町朝日	巴形銅器（弥生時代後期前葉）

施設見学

遺跡名	月　日	所在地	参加者
埋蔵文化財センター	5月29日（水）	海部郡弥富町	江南市　続・近世文書を読む会　26名
名古屋城三の丸遺跡	7月29日（木）	名古屋市中区	愛知県立半田高等学校　20名
埋蔵文化財センター	7月29日（木）	海部郡弥富町	愛知県立半田高等学校　20名
埋蔵文化財センター	8月2日（金）	海部郡弥富町	愛知県立岡崎高等学校　12名
惣作鐘場遺跡	8月9日（金）	瀬戸市惣作町	知立市教育研究会社会科部　35名
名古屋城三の丸遺跡	8月9日（金）	名古屋市中区	知立市教育研究会社会科部　35名
惣作鐘場遺跡	9月20日（金）	瀬戸市惣作町	豊田加茂地区文化財保護委員　30名
埋蔵文化財センター	10月24日（木）	海部郡弥富町	尾北地区主査　13名
埋蔵文化財センター	2月13日（木）	海部郡弥富町	桜小学校3年桜組　6名

資料の貸出・提供

貸出先	目的	遺跡名	貸出・提供資料			期間
長久手町教育委員会	「長久手町史　本文編」に掲載のため	上品野遺跡	旧石器遺物写真	転写	合計8点	平成14年4月1日～10月1日
		金萩遺跡	石鏃実測図	転写		
		牛牧遺跡	土偶写真	転写		
		朝日遺跡	復元図.朝日遺跡への招待より 転写	転写		
		朝日遺跡	銅鐸出土状態写真.	転写		
		高針原1号窯	「黒見田五十戸」銘甕　写真	転写		
		高針原1号窯.	調査区風景写真	6×7カラーポジ1点		
		岩作城跡	岩作城跡付近の航空写真	モノクロプリント　1点		
東京文化財研究所	2001年度東京文化財研究所年報	西川原古墳	鉛同位体分析結果.一式	許可のみ	合計2点	平成14年4月8日
		寄元3号墳	鉛同位体分析結果.一式			
(株)学習研究社　一般教養編集部「歴史群像」	学研・歴史群像53（2002年6月号）	城山城跡	遺構写真	デジタルデータ2点	合計2点	平成14年4月24日
一宮市博物館	企画展「猫島遺跡遺跡ー弥生時代のムラー」	猫島遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 14点	合計14点	平成14年4月26日
名古屋市博物館	企画展「名古屋城下の"ゴミ"事情　」の図録および会場パネルに使用のため	名古屋城三の丸遺跡	遺構写真7点、	6×7カラーポジ 6点、6×7モノクロ ネガ1点	合計7点	平成14年5月10日～7月27日
西尾市教育委員会	特別展の図録および会場パネルに使用のため	岡島遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ　9点、35mmカラーポジ 1点	合計10点	平成14年5月10日～7月15日
株式会社木耳社	出版物に使用のため	朝日遺跡	弥生土器赤彩壺・赤彩器台	6×7カラーポジ 1点	合計1点	平成14年5月21日～6月21日
国際航業株式会社	出版物「空間情報技術の実際」に使用のため	朝日遺跡	CG出力図、作成平面図	許可のみ	合計2点	平成14年5月23日
株式会社ブレイン	出版物「かわなみ通信夏号（7月1日発行）」に使用のため	猫島遺跡	遺構発掘写真	6×7カラーポジ 1点	合計1点	平成14年5月27日～6月27日
株式会社　小学館	出版物「考古学つれづれ草（14年6月発行予定）」に使用のため	朝日遺跡	遺構写真　杭列	転載許可のみ	合計1点	平成14年6月11日
国際航業株式会社	文化財事業部パンフレットに使用のため	朝日遺跡	遺構3次元CG写真	許可のみ	合計2点	平成14年6月26日
		上橋下遺跡	発掘作業風景写真			
株式会社ジャパン通信情報センター	「文化財発掘出土情報」2002年8月号「各地の動向」に掲載のため	鴛窯跡	2002年3月3日実施成果報告会資料、遺構・遺物写真（デジタルデータ各1点）	デジタルデータ12点	合計3点	平成14年6月26日
朝日新聞社アエラムック編集部	アエラムック「古代史がわかる」2002年7月末刊行に掲載のため	西上免遺跡	遺跡全景写真	デジタルデータ1点	合計3点	平成14年7月23日
株式会社里文出版	「目の眼」（2002年8月28日刊行）に掲載のため	名古屋城三の丸遺跡	色絵婦人座像	許可のみ	合計1点	平成14年8月5日
株式会社山川出版	「日本史リブレット3弥生の村」（2002年9月刊行予定）に掲載のため	朝日遺跡	杭列	6×7カラーポジ1点	合計1点	平成14年8月5日
東洋陶磁学会	会員に配布する「東洋陶磁学会会報　第47　号」に掲載のため	鴛窯跡	人面陶板写真	デジタルデータ1点	合計1点	平成14年8月21日～10月末日まで
五月書房	「東海学を深める」に掲載のため（平成14年10月末日刊行予定）	朝日遺跡	出土遺物パレス壺	6×7カラーポジ1点	合計1点	平成14年9月2日
株式会社　講談社	「日本の歴史　第1巻『縄文の生活誌改訂版』」に掲載のため	川地遺跡	出土遺物「首飾り」	転写	合計1点	平成14年9月20日
静岡市立登呂博物館	特別展「くろがねのわざ」展示解説図録に掲載のため	朝日遺跡	遺構写真、遺物写真	6×7カラーポジ 9点	合計16点	平成14年9月27日～10月末日
		八王子遺跡	遺構写真、遺物写真	6×7カラーポジ 7点		
一宮市博物館	特別展「川から海へ1」展示解説図録および展示パネル作成のため	朝日遺跡	銅鐸出土状態,下呂石剥片出土状況、、 龍文鏡、、 玉造工程写真、玉造工具	6×7カラーポジ 23点、デジタルデータ1点	合計29点	平成14年9月19日～11月5日
		鳥帽子遺跡	下呂石出土遺構写真	35mmカラーポジ 1点		
		八王子遺跡	銅鐸	6×7カラーポジ 1点		
		一色青海遺跡	動物遺体	6×7カラーポジ 3点		
愛知県総務部総務課県史編さん室	愛知県史「資料編2　考古2　弥生」に掲載予定のため	東光寺遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 3点	合計24点	平成14年10月14日～平成15年1月14日
		猫島遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 3点		
		諏訪遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 2点		
		上の平遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 1点		
		島田陣屋遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 2点		
		川原遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 2点、35mmカラーポジ 1点		
			遺物写真	6×7カラーポジ 1点		
		麻生田大橋遺跡	遺構写真	ベタプリント　.1点		
		本川遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 1点		
		岡島遺跡	遺構写真	6×7カラーポジ 1点		
		八王子遺跡	銅鐸写真	6×7カラーポジ 3点		
		朝日遺跡	銅鐸、遺構写真	6×7カラーポジ 3点		

貸出先	目的	遺跡名	貸出・提供資料			期間
株式会社 学生社	一宮市博物館開催シンポジウム記録「銅鐸から描く弥 生時代」に掲載のため。	八王子遺跡	銅鐸B 面写真、遺構図面	転写	合計2 点	平成14 年10 月22 日
有限会社ヴュ ー企画	ビ デオ「 映像考古学」の 解説冊子『 遺跡めぐり ガイド 」に掲載のため。	朝日遺跡	復元図2点、 赤彩土器、乱杭、柵列、骨鏃	転写 6×7カラー　ポジ 4 点	合計6点	平成14 年10 月29 日 ～ 12 月末日
豊明市教育委員会	豊明市史自然編（ 平成14 年度刊行予定） に掲載のため。	大脇城跡	遺構写真,現地説明会写真	35mm カラー ポジ2点	合計2 点	平成14 年10 月29 日 ～ 11 月6 日
鈴鹿市教育委員会	企画展「 弥生時代の石器」の パンフレット ・パネルに利用のため。	朝日遺跡	出土石器写真	デジタルデータ1点	合計1点	平成14 年11 月末日～ 12 月末日まで
滋賀県立安土城考古博物館	企画展「 日継知らす可き 王無し 」の パンフレッ ト ・パネルに利用のため。	池下古墳	遺構写真	6×7カラー　ポジ 2 点	合計2 点	平成14 年12 月10 日 ～平成15 年4 月末日
愛知県総務部総務課県史編さん 室長	「 愛知県史　資料編2　考古2　弥生」に掲載のため。	山中遺跡	遺構写真	35mm カラー ポジ1点	合計12 点	平成14 年12 月12 日 ～平成15 年3 月11 日
		伝法寺野田遺跡	遺構写真	35mm カラー ポジ1点		
		八王子遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 2 点		
		一色青海遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
		堀之内花ノ木 遺跡.	遺構写真	6×7カラー　ポジ 2 点		
		勝川遺跡	遺構写真	35mm カラー ポジ2点、6×7 カラー ポジ 1 点		
		朝日遺跡	遺物写真	6×7カラー　ポジ 2 点		
岩倉市長	公報「 いわくら」 1 月1 日発行に掲載のため。	岩倉城跡	遺構写真	35mm カラー ポジ1点,6×7 モノクロ ポジ1点	合計11点	平成14 年12月 ～ 12 月末日
			復元想定図1点、遺物写真8点	転写		
株式会社小学館	「 考古資料大観　第8 巻　弥生・古墳時代　木・繊維製品」 2003 年7 月刊行に掲載のため。	八王子遺跡	遺物写真	6×7カラー　ポジ 15 点	合計35点	平成15年1月6 日 ～8 月末日
		一色青海遺跡	遺物写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
		朝日遺跡	遺物写真	6×7カラー　ポジ 19 点		
清洲町企画室企画課長	「 清洲町町政要覧」 作製のため。	朝日遺跡	遺物写真（ 巴形銅器,銅鐸）	デジタルデータ1点、6×7カラー ポジ 1 点	合計2点	平成15年1 月7日 ～1 月末日
愛知県総務部総務課県史編さん 室長	「 愛知県史　資料編2　考古2　弥生」に掲載するため。	朝日遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 8 点,6×7 モノクロ ネガ2 点,35mmカラー ポジ1点,4×5カラー ポジ1点	合計13点	平成15 年1 月8 日 ～3 月11 日
		平手町遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
安城市教育委員会	「 新編安城市史」 編さん事業 のため。	下懸遺跡	遺物写真（ 墨書木簡）	6×7カラー　ポジ 1 点	合計1点	平成15 年1 月16 日 ～ 1 月31 日
愛知県総務部総務課県史編さん 室長	「 愛知県史　資料編2　考古2　弥生」に掲載するため。	山中遺跡	遺構写真	35mm カラー ポジ1点	合計51点	掲載許可のみ
		伝法寺野田遺跡	遺構写真	35mm カラー ポジ1点		
		一色青海遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
		堀之内花ノ木 遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 2 点		
		勝川遺跡	遺構写真	35mm カラー ポジ2点		
			遺構写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
		朝日遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 11点,6×7 モノクロ ネガ2 点,35mmカラー ポジ1点,4×5カラー ポジ1点		
			遺物写真	6×7カラー　ポジ 2点		
		平手町遺跡	遺構写真	6×7 モノクロ ネガ1 点		
		東光寺遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 3 点		
		猫島遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 3 点		
		諏訪遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 2 点		
		上の平遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
		島田陣屋遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 2 点		
		川原遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 2 点、35mm カラー ポジ 1 点		
			遺物写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
		麻生田大橋遺跡	遺構写真	ベタプリ ント . 1 点		
		本川遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
		岡島遺跡	遺構写真	6×7カラー　ポジ 1 点		
		八王子遺跡	銅鐸写真	6×7カラー　ポジ 2 点		
			遺構写真	6×7カラー　ポジ 5 点		
吉野ヶ里公園管理センター	吉野ヶ里 歴史公園ガイドブ ックに掲載のため	朝日遺跡	遺構写真および 復元図	6×7カラー　ポジ 2 点、イラスト 転写	合計3点	平成15年1 月29日 ～2 月末日
株式会社小学館	「 考古資料大観　第1 巻　弥生・古墳時代　土器1 」 2003 年7 月刊行に掲載のため。	三ツ井遺跡	遺物写真	6×7カラー　ポジ 8 点	合計127点	平成15年2 月12 日 ～8 月末日
		一色青海遺跡	遺物写真	6×7カラー　ポジ 11点		
		朝日遺跡	遺物写真	6×7カラー　ポジ 62 点,6×7 モノクロ ネガ31 点,4×5カラー ポジ2 点,4×5モノクロ ネガ13 点		
伊勢中世史研究会事務局	「 東海の考古学・ 中世史情報」に掲載のため	巡間E窯跡	遺構写真（ SY02）	デジタルデータ　各1点	合計3点	平成15年2月17日
		御船城跡	調査区全景写真			
		城山城跡	B区堀切断面写真			
（ 株）新人物往来社	歴史読本「 新視点・倭国 の研究」に掲載のため。	朝日遺跡	遺構写真、遺物写真	6×7カラー　ポジ 4 点,35mmカラー ポジ1点	合計5点	平成15年2月28日 ～3月5日

<< 平成 13 年 4 月 1 日～平成 14 年 3 月 1 日 >>

研　究　会

原始部会

	日　付		内　容
第 1 回	2002.05.17	(金)	今後の活動方針について
第 2 回	2002.06.14	(金)	遺物検討会　「瀬戸市八王子遺跡出土石器」
第 3 回	2002.08.22	(木)	現場検討会　「瀬戸市長谷口遺跡」
第 4 回	2002.09.09	(月)	現場検討会　「瀬戸市惣作・鐘場遺跡」
第 5 回	2002.09.20	(金)	現場検討会　「三重県中谷遺跡」
第 6 回	2002.10.18	(金)	遺物検討会　「一宮市猫島遺跡出土石器」
第 7 回	2002.11.15	(金)	報告　　川添和暁「関西地方の縄文時代早期後半石器群について」
第 8 回	2002.12.20	(金)	遺物検討会　「藤岡町水汲遺跡出土石器」
第 9 回	2003.01.17	(金)	現場検討会　「瀬戸市吉野遺跡」
第 10回	2003.03.11	(火)	遺物検討会　「名古屋市大曲輪遺跡出土石器」

古代部会

	日　付		内　容
第 1 回	2002.05.17	（金）	年間活動計画の作成
第 2 回	2002.06.14	（金）	報告　早野浩二「集落遺跡の段階区分と時間軸の対比」
第 3 回	2002.06.26	（水）	現場検討会「豊田市荒山古墳群」
第 4 回	2002.09.04	（水）	現場検討会「名古屋市名古屋城三の丸遺跡」
第 5 回	2002.01.17	（金）	現場検討会「名古屋市古沢町遺跡」

中近世部会

	日　付		内　容
第 1 回	2002.05.31	(金)	現場検討会　名古屋城三の丸遺跡 1
第 2 回	2002.06.14	(金)	平成14年度の活動方針について検討
第 3 回	2002.06.23	(日)	現場検討会　瀬戸市凧山Ｃ窯跡
第 4 回	2002.07.17	(水)	現場検討会　名古屋城三の丸遺跡 2
第 5 回	2002.09.19	(金)	報告　朝日西遺跡の再検討 1
			小澤一弘「朝日西遺跡の概要」
			鈴木正貴「朝日西遺跡からの課題」
第 6 回	2002.10.11	(金)	報告　朝日西遺跡の再検討 2
			武部真木「中世土師器皿の様相
			－12～16Cの尾張平野の中で朝日西遺跡とは？－」
			遺物検討　朝日西遺跡出土遺物の検討。
第 7 回	2002.11.15	(金)	中・近世研究部会の活動方針の検討
第 8 回	2002.11.28	(木)	現場検討会　名古屋市戸田遺跡
第 9 回	2002.12.20	(金)	尾張国富田荘関連研究の方法と役割分担についての検討
第10回	2003.01.17	(金)	報告　尾張国富田荘関連のこれまでの考古学関連の研究から
			蔭山誠一「尾張国富田荘の考古学関連の研究」
第12回	2003.02.14	(金)	現地踏査　富田荘絵図の地域 1（名古屋市千音寺遺跡～大治町域）
第13回	2003.03.14	(金)	現地踏査　富田荘絵図の地域 2

報告書作成のための遺物等の指導

日付	遺跡名	指導者（所属）
2002.04～2003.03	本川遺跡／猫島遺跡	森勇一（愛知県立明和高等学校）
2002.09.18	八王子遺跡	青木修（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）
2002.0904	八王子遺跡	増子康真（（株）日本ガイシ）
2002.10.22	八王子遺跡	金子直行（（財）埼玉県埋蔵文化財事業団）
2002.11.20	鷲窯跡	楢崎彰一（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）
2002.12.04	鷲窯跡	井上喜久男（愛知県陶磁資料館）
2002.12.16	鷲窯跡	永田信一（京都市考古資料館）
2003.01.16	権現山遺跡	千葉豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）
2003.02.04	八王子遺跡	齋藤基生
2003.02.12	凧山屋敷遺跡	城ヶ谷和広（愛知県立豊田南高等学校）
2003.02.17	古新田遺跡	城ヶ谷和広（愛知県立豊田南高等学校）
2003.02.21	古新田遺跡	梶山勝（名古屋市博物館）
2003.03.05	水入遺跡	森泰通（豊田市職員）
2003.03.12	水入遺跡	城ヶ谷和広（愛知県立豊田南高等学校）

発掘調査現場における遺構・遺物等の指導

日付	遺跡名	指導者（所属）
2002.06.10	凧山Ｃ窯跡	楢崎彰一（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）
2002.06.27	名古屋城三の丸遺跡	楢崎彰一（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）
2002.06.28	荒山古墳群	伊藤秋男（南山大学）
2002.07.15	名古屋城三の丸遺跡	小寺武久（中部大学）
2002.08.21	名古屋城三の丸遺跡	仲隆裕（京都造形芸術大学）
2002.12.02	惣作鐘場遺跡	渡辺誠
2002.12.02	吉野遺跡	渡辺誠
2003.01.22	吉野遺跡	渡辺誠
2003.01.27	朝日遺跡	村上恭通（愛媛大学）

ホームページ

内容の更新

日付	カウント	更新内容
2002.4	22,888	考古学関連イベント案内 / 今月の考古学者（小澤一弘）/ まいぶん愛知PDF（68）/ 調査速報（朝日遺跡・城山城跡・鶯窯跡・東端城跡）
2002.5	30,291	考古学関連イベント案内 / 今月の考古学者（小嶋廣也）/ 特選コレクション / 紀要２号 PDF/ 調査速報（朝日遺跡・名古屋城三の丸遺跡・伝法寺野田遺跡・凧山Ｃ窯跡・荒山古墳）
2002,6	34,192	考古学関連イベント案内 / 調査速報（荒山古墳）/ 自然科学から見た考古学（カメのその後）/ 凧山Ｃ窯跡現地説明会案内 / 凧山Ｃ窯跡現地説明会資料 PDF/ 埋文展開催案内
2002.8	36,969	考古学関連イベント案内 / 今月の考古学者（宮腰健司）/ 調査速報（荒山古墳・凧山Ｃ窯跡）/ まいぶん愛知 PDF（69）/ 名古屋城三の丸遺跡現地説明会案内 / 名古屋城三の丸遺跡現地説明会資料 PDF
2002.10	39,606	考古学関連イベント案内 / 今月の考古学者（都築暢也）/ 埋文展終了報告 / 調査速報（名古屋城三の丸遺跡・朝日遺跡・惣作・鐘場遺跡）
2002.11	41,319	考古学関連イベント案内 / 今月の考古学者（川添和暁）/ 調査速報（朝日遺跡・吉野遺跡・長谷口遺跡）
2003.1	43,127	考古学関連イベント案内 / 今月の考古学者（川井啓介）/ 季節のコレクション（動物モノ紋様）/ 自然科学から見た考古学（年代測定）
2003.3	45,131	考古学関連イベント案内 / 今月の考古学者（酒井俊彦）/ まいぶん愛知 PDF（70）/ 自然科学から見た考古学（年代測定２）

＊カウント数はトップページに設定したカウンターの値

メールでの問合せ

日付	件数	主な問合せ内容
2002.4	9	狛犬について / 条痕文土器の新旧 / 資料請求 / リンクの許可　など
2002.5	3	石鏃の形について / 作業員募集　など
2002.6	1	考古学の講座を開催希望
2002.7	3	センターの事務所の場所確認 / 資料請求　など
2002.8	5	報告書の入手方法 / アルバイトの募集 / 県内の古墳について　など
2002.9	3	自宅の庭から出土した土器片について　など
2002.10	3	リンクの許可　など
2002.11	1	資料請求
2002.12	8	土笛の出土遺跡について / リンクの許可　など
2003.1	7	柱穴のない竪穴住居について / 考古学関連の仕事につくための進学について　など
2003.2	1	作業員の募集について

平成 14 年度　愛知県埋蔵文化財センター　組織一覧

運営協議会委員

伊藤秋男	南山大学教授
今泉孝之	県都市教育長協議会会長 豊川市教育委員会教育長
沢田正昭	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長
諏訪兼位	日本福祉大学学長
楢崎彰一	名古屋大学名誉教授 （財）瀬戸市埋蔵文化財センター所長
金井正樹	県教育委員会生涯学習監
渡辺　誠	名古屋大学名誉教授

専門委員

考古学	楢崎彰一	名古屋大学名誉教授
文献史学	福岡猛志	日本福祉大学副学長
地理学	海津正倫	名古屋大学教授
建築史学	小寺武久	中部大学教授
考古学 **動物学** **植物学**	渡辺 誠	名古屋大学名誉教授
形質人類学	多賀谷 昭	長野県看護大学教授
保存科学	沢田正昭	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長
岩石学	諏訪兼位	日本福祉大学学長
木材組織学	木方洋二	名古屋大学名誉教授

所長（兼管理課長）　藤澤宣勝

管理課

課長補佐	佐藤栄一	
主　査	種田享司	
主　事	中野成章	加藤慎二
	佐々木裕二	

調査課

課　長	都築暢也	
課長補佐（兼主査）		川井啓介
主　査	赤塚次郎	石黒立人
	小澤一弘	宮腰健司
	藤岡幹根	
主　任	松田　訓	酒井俊彦
	池本正明	
調査研究員	小嶋廣也	宇佐見守
	鈴木正貴	樋上　昇
	堀木真美子	永井宏幸
	鬼頭　剛	洲嵜和宏
	成瀬友弘	武部真木
	蔭山誠一	川添和暁
	永井邦仁	早野浩二
	鵜飼雅弘	

本書に掲載した地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の
2万5千分の1地形図を複製したものである。
（承認番号　平14部複　第308号）

年報　平成14年度

平成15年3月
編集・発行　(財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
印　刷　(株)クイックス

本書は再生紙を使用しています。